

個性社会の球磨川禊

黒箱BoX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒロアカに球磨川をぶち込んでみた何番煎じかわからない物語となります。転生ではなくヒロアカの世界で生まれた球磨川が仲間の過負荷と一緒にプラスをぶつ殺そうとする物語です。基本的に球磨川の性格は和解前です。

球磨川がヒーロー達を蹂躪するマイナスストーリー。オールマイトにデク、その他ヒーローたちは心を折る戦い方に対してどう出るか。ヴィラン連合？ 彼らは成長する前に心を螺子切られました。

現在、生徒たち+ヒーローVS過負荷編です。球磨川は負けながらにして生徒たちの心を螺子伏せていく。立ち上がれない生徒たち、悪に膝を屈する教師陣。その中で諦めない者は……？

誤字報告ありがとうございます。気を付けているのに一向に無くなりませんね。それと堀越先生、キャラの名前誤字って申し訳ありません。

目次

プロローグ	襖の生まれ	1
第1旋回	悪と過負荷の断絶	4
第2旋回	過負荷の意味	9
第3旋回	ヴィラン連合	17
第4旋回	雄英教師陣襲撃	23
第5旋回	一からやり直し	31
第6旋回	転校生	37
第7旋回	根津校長と過負荷	42
第8旋回	転校生にありがちなこと	49
第9旋回	いじめの真実	55
第10旋回	忍び寄る過負荷	65
第11旋回	過負荷、江迎 怒江	72
第12旋回	襲撃の過負荷	81
第13旋回	過負荷来襲	88
第14旋回	オールマイト登場	94
第15旋回	恐怖した者たち	101
第16旋回	戦う気概を取り戻そうとする者たち	106
第17旋回	生徒会選挙	112
第18旋回	予期せぬ一撃	119
第19旋回	人吉瞳、参戦	124
第20旋回	マイナスの戦略	129
第21旋回	毒蛇の巣窟	136
第22旋回	毒蛇の巣窟	144
第23旋回	冬眠と脱皮	152

第24 巡回	火付兎	160
第25 巡回	火付兎 (2)	166
第26 巡回	狂犬落とし (1)	173
第27 巡回	狂犬落とし (2)	180
第28 巡回	人比べ	188
第29 巡回	終幕、ならず	198
第30 巡回	頂上決戦	204
最終巡回	物語は終わらない	210

プロローグ 禊の生まれ

彼は「無個性」だった。

——球磨川禊と言う名で生まれた彼は誰もが受けるように個性の検査を受けて、当たり前のようにそれを持っていないと診断された。「個性」。それはキラ付けといった性格的な意味ではなく、実際の力を伴った超常能力がこの社会で個性と呼ばれるに至ったものだ。つまりはプラス的なものと言えるだろう。炎を出す力、速く走る力、持っていて損はないものばかりだ。

個性差別などと言う言葉があるが、そういったマイナスも実際にある。プラスだけではないと言うことだ。例えばヘドロの個性なら臭いから必然排他されることだろう。そして、悪い意味で有名な——例えば犯罪者が使った個性だとかと似たような個性であれば、血縁から犯罪者を出したような社会的地位を押し付けられる。

それだけ個性というものは社会に普遍的に広がっている。けれど、それは全てではない。個性は世代を増すごとに発現率が増えている。つまり子供にはほとんどいないとはいえ、大人には無個性がけっこういるのだ。

けれど、それでも——球磨川禊が個性を持っていないと言うことは関係者にとつては驚きとも言えた。

気持ち悪い。

探せばいくらかでも嫌悪感を持たれるような姿になる個性というものはある。特に牢屋などにはたくさんいるだろう。彼の“それ”もそういったものであってほしいと、彼の両親は願っていた。彼はどこからどう見ても旧世代の人間の姿をしていたのに。

——だって、仕方ないだろう？ 気色悪いんだから。親が子供を気持ち悪く思うなんて、とその両親が名前も知らない誰かに言われたことは数えきれないし、自分を責めたこともある。けれど、それは生理的に湧き上がり続けるものだ。そういうものなのだ。

むしろ、人として親としてできた類だと言える。その気持ち悪さがハンデだと知ることができたなら受け入れられるかもしれないと……それはまぎれもなくプラスな気持ちだ。

彼を調べた者たちは藁にも縋る想いで医者に頼った。どうか彼の個性を、あの這い寄る混沌よりもマイナスなそれを特定し、日の元に曝し“どうということもない”と言ってくれと。実際、個性であればヒーロー「イレイザーヘッド」などがそれを打ち消せる。

その希望は打ち砕かれた。彼は無個性だった。

それが何を意味するかと言うと、破滅でしかない。

球磨川という姓の大人二人は狂ってどこにもいなくなってしまうし、襖を収容していた病院は廃墟としか呼べない有様になっていた。彼と関わり、生き残ってしまった不幸な人々は正気を失って今や自身が檻の中にいる。行方不明扱いになるのとどちらが幸運かは知れないが。

そう。個性治療の最前線、「箱庭総合病院」は一夜にして完全崩壊した。

そこは人生においてマイナスとなる個性を治療しようと言う試みが行われていた場所だった。

「髪が伸びる」個性を治療して、いつ何時車の車輪に髪が挟まり巻き取られて顔面をはぎ取られるかもしれない恐怖から解放してあげようという試み。

「フェロモンを出す」個性を治療して、密閉空間に居ない限り虫に集られてしまうという宿命から解放してあげようという試み。

軍事利用よりも真っ先にハンデ解消の方に動く日本は流石と言えよう。もつとも、成果は怪しい上にあつたとしても瓦礫の下だが。

そう、個性とは違う異質な特異——過負荷マイナスについて多少なりとも理解しえた女医はもはやなく、対処など論外の域になる。

こうして、球磨川襖は解き放たれた。

絶対者のいない世界で、メアリー・スー黒神もいない。主人公すらもい

やしない——この世界で。

第1巡回 悪と過負荷の断絶

そこはさびれたバーと言った風情の場所。けれど、それはそういう薄暗い演出なのであるからには清潔そのもので薄汚さはない。そういう趣味のバーで、気に入るものはとても気に入る素晴らしいバーと言える。

もつとも、その場所に一般人が足を踏み入れることはないだろうが。

「……殺すべきだ。その男はステインの言う偽物のヒーローだ」

とかげ男、といった外見の男が口を開く。いかにもヴィランといった姿で、他の面々も犯罪者らしさを隠さない。そいつらは真正銘、社会に喧嘩を売るヴィラン^悪なのだから。

そんな、悪の坩堝ともいえる場所に一般人は近づくことはできない。本能がそこに足を向けることを拒否するし、鈍い奴がいても気付かれないように他の場所へ誘導する。ヴィランにも理性はある……一般人の被害を出せばその時点で警察に場所を掴まれるだなんて、言われるまでもない。

「やめろスピナー、他も。手を出すな」

彼らを称して、ヴィラン連合。誰もが認める“悪”そのもの——のはずが、今は「ヒーロー殺し」ステインに社会の興味は移っている。スピナーと呼ばれた男でさえ心酔するほどにそうなっていて、連合はうわさ話にすらなっていない。

「なぜだ、死柄木 弔——こいつはヒーローだ。殺さない理由などない！」

それをガキじみた癩癩を無視して死柄木は語る。椅子に縛り付けられ、手を後ろに拘束されている少年に対して友人のように親しげに。

「現代ヒーローってのは堅っ苦しいよなあ。爆豪くんよ」

「人の命を金や自己顕示に変換する言いよう。それをルールでぎちぎちと守る社会。敗北者を励ますどころか責める国民」

「——俺たちの戦いは問い。ヒーローとは、正義とは何か。この社会が本当に正しいのか、一人一人に考えてもらおう。……俺たちは勝つつもりだ。君も、勝つのは好きだろう?」

「——で、爆豪……勝己くん。俺らの仲間になってくれる気はないかな」

嘘みたくに穏やかだが、それは甘さを意味しない。銃をちらつかせると言う無意味なことをしないでだけで、爆豪の額には銃が突き付けられている。その現実を噛み締めさせるようにゆっくりと語った。

「——は。馬鹿が」

椅子に縛られ、腕もまた縛られている彼は吐き捨てる。粗野とか言われようが、己はヒーローなのだと言おう。そして、敵にへりくだるような情けない真似はしない。

「ならば、殺す」

とかげ男が一步前が出る。

「手を出すな、そいつは大切な駒だ。縄をほどいてやれ茶毘」

「……」

白けたような雰囲気漂う。体育祭で大活躍をして社会の認知度はもしかしなくてもヴィラン連合より高いとはいえ、ヒーローの卵だ。プロではない。そんな彼がこの多対一、しかも場所すらわからない状況で何かができるとは思えない。が、ほどいた程度で意見を曲げるようなガキとも思えないのだ。誰が見ても。

「いいのか、暴れるんじゃないのか」

と、茶毘が聞くが聞いた本人が信じちゃいない。コイツ一人なら仲間とどうにでもできると思っている。

「は。勧誘してるんだ——誠意を見せなきゃなあ」

そのリーダーは考えを変え様子もない。というか、囚われの彼に何かができると考えている者は一人もない。だから、反対とは言っても一応だ。むしろ、いたずらに信頼関係のなさが露呈している。

「やれ、トゥワイス」

茶毘から言われたトゥワイスは、は!? 俺かよ、嫌だよなどと言いつつながら前が出る。そこまでは正史の通り。けれど、物語は“ここ”か

ら捻じ曲がる。

『あれ？ ハッどハッ？』

へらへらと笑う男が扉を開いた。

「な——ッ!? 馬鹿な、鍵は閉めておいたはず。いや、それ以前にあの監視網をどうやって突破して……ッ!」

黒霧が驚愕する。“ここ”を用意したものとして、容易に知れるような構築はしていない。一見はただのバーだが、その本質は要塞だ。一体どれだけの金をかけたかと思っっている。正史ではオールマイトはじめ豪華パーティーから奇襲を仕掛けられていたが——それはむしろ、それほどのすさまじい人選が必要だったと褒めるべきだろう。

ゆえに、コスチュームもなく、警察の制服を着ているわけでもない、どこかの学校の制服を着たその少年がそこに居るのは間違っているのだ。

『……あれ？ 爆豪ちゃんじゃないか、久しぶり。元気してた!』

相手がヒーローならともかく、球磨川のあまりの意味不明さに思考が停止したヴィランの間を突いて爆豪の前に出る。

「——あ?」

だが、思考が停止したと言う意味では爆豪も同じ。というか、より酷い。まあ当然の話と言ってもいいだろう。いきなり友人のようにふるまわれたのだ。ヴィランに閉じ込められた現場で、一度も会ったはずのない人間に。

『いやあ、心配してたんだよ。ほら、テレビでは君が攫われたことばかりやってるからさあ。虫けらみたいにぷちって潰されちゃったのかと思ってたよ』

「……ああん?」

その言葉を思考が停止した中で挑発と受け取り、怒鳴りつけようとして。

『あれ? なんか熱いぞ』

球磨川がきよろきよろとあたりを見渡した瞬間、彼が黒く燃え上がった。

「そのまま殺せ、茶毘」

死柄木が冷酷に命令を降す。有名なヴィランでないことは分かる、その辺りの名前と顔は頭に叩き込んである。ゆえに言える、こいつは違うと。だから排除する。

『ぎゃあああああー!』

球磨川が炭化する。炎による熱が強制的に筋繊維を駆動させて不気味なダンスを踊らされる。

『あ。ああ——あああ』

爆豪に伸ばされた手がぱたりと落ちる。

「うわ——ああ。……てめえらあああああ!」

爆豪が叫ぶ。無意味に個性が発動して己の肌を焼く。騒音が響く。さしもの爆豪も、人が死ぬのを目の前で見るのは初めてだ。混乱して、わめいてもなお戦意を失わないのはさすがともいえるが状況は見失っている。

「ふむ、高校生には刺激が強かったようだね」

いつのまにか爆豪の後ろに回ったMr.コンプレスが己の個性で封印しようとする。けれど、癖が出た。マジシャンというのは、“観客の注意を逸らす”ことが仕事。ゆえに己は一般人とは別の注意の払い方をする。それが不幸だった。だって、まともに見てしまったのだから。

『やれやれ、酷いなあ。君たちはママに人に火をつけちゃいけませんって習わなかったのかい?』

ぐにやりと生理的嫌悪をもたらす冒瀆的な動きで立ち上がった死体がある。いや、それはもう死体ではない。炭になったはずの学生服までもが戻っている。

「……うー!」

Mr.コンプレスは吐き気を抑えるようにマスクに手を当てる。

「なんだ——こいつは?!」

「へえ、不思議ですねえ。ちよつともう一回死んで生き返る所見せてください」

判断が早かったのはトガヒミコだった。ナイフで一直線に球磨川の腹を狙って突進して。

『女の子が僕に向かって飛び込んでくる!?　なんて積極的な女の子なんだ。さあ、おいで!』

狙われた球磨川は大きく両手を広げて待ち受ける。当然、ナイフは根元まで刺さって。

「いえ、あなた私の好みじゃないんで——」

ぐり、とひねった。“殺し慣れた”手法、実はナイフで刺突しても重要器官でなければ手術で助かることもある。けれど、刺した上でひねれば絶望的だ。

『だが、これで僕を止めたつもりかい？　甘えよ』

もう手遅れな球磨川は、どこからともなく取り出した螺子を投擲した。

「——な!?!」

そして、それは爆豪の頭を貫いた。

第2巡回 過負荷の意味

「お、お前——爆豪勝己と知り合いなんじゃないのか？」

止める暇もなかった黒霧が思わず聞いてしまう。個性「ワープゲート」を使ってどこかに放り出せばこの惨劇は起きなかったのではないかと、わずかな後悔が心に生まれたことは彼自身気付いていない。

『え？ なんのこと。僕があんな有名人《プラス》と知り合いな訳ないじゃん』

あっけらかんとした態度。これを見て球磨川に罪悪感とか、嘘をついた呵責とかを感じるのは不可能だろう。

「……な？」

友達だとか言ってたくせに、わずか数秒後にはそれを否定する。まったくもって何がしたいのかわからない——大体、ヒーローでもないくせに、知り合いでもないならここに来る理由がないではないか。

「し……死柄木——」

頭がいいはずの黒霧がリーダーに助けを求めるように意見をうかがうのもむべなるかな。いや、本当にどういうリアクションをすればいいんだ、この場合……

「あ——え——」

いくら何でも、ここですぐに答えを出せず空を仰ぐのは経験不足とか役者不足とかそう言うことではなく仕方のないことだろう。けれど。

『おいおい、リーダーがボケるんじゃないよ。皆を率いるのがリーダーの仕事だろ？』

球磨川がその隙を見逃さずに螺子を死柄木の頭に突き刺そうとして。

「ふざけんな」

彼の個性『崩壊』で粉々にしてしまった。球磨川は空になった手を不思議なものでも見るようにグーパーしている。

「ふざけてんじゃねえぞ……！ いきなり来て、何もかも台無しにし

てくれやがって——ッ！ ぶち殺せ、てめえら」

球磨川の身体は瞬く間に炎上し——

『お——うおっ……！』

「貴様はヒーローからもっともかけ離れた害悪。ここで肅清する！」

大剣でぶった斬られてしまった。縦に半分になった死体が倒れて中身が転がり血臭が立ち込める。

「……だが、この後はどうしますか。死柄木。彼はこの乱入者に殺されてしまった」

「分かってるさ、黒霧。だが、こうなったもんは仕方ねえ。いくら先生でも死人は生き返らせねえ——こうなったら、爆豪くんは死体として活用するしかね……え——？」

爆豪を見ると、寝ていた。潰されたはずの頭は血の一片すらも付いていない。普通に寝ていた——夢見は悪そうだが。

「……な、なんだこれは——ッ！」

もう展開についていけない、というのが黒霧の正直な感想だった。

「まさか、『幻影』の個性か。なら、そいつも……ッ！」

今、まともなものを考えているのは死柄木のみだった。他はもう展開に飲まれて何が何やら——自分が盤上を操る、そう決めたから“やる”。もはやこれは彼の意地だった。球磨川を見る。そういう個性なのだとしたら、転がっている死体も騙されているだけなのではないかと思つて。

逆に他の者は訳の分からない状況に考えることをリーダーに丸投げしている。

『いや、それは違うよ。僕のは君たちが言うような個性じゃない。というか、そもそも個性なんて都合のいい力プラスが僕にあるはずもないしね』

無傷の球磨川がそこに立っていた。まるで、悪い冗談のように。

「……くそが！ 先生……来てくれ。どうやら、こいつは俺たちの手には負えない——」

“助けを求めた”。考えに考えたからこそ——“素直に助けを求めろ”、リーダーに絶対唯一に必要な能力があるとしたらそれだろう。実はできる人間はそう多くないのだ。自分はやっていると思っ

たとしたら、それは大抵の場合、面倒ごとを他人に押し付けているにすぎない。

『おいおい、助けを求めて安心しちゃだめだぜ』

だが、判断を誤らなかつたところで気が抜けてしまえば世話はない。その一瞬でヴィラン連合はまとめて螺子で磔にされた。弱みを見つけることにかけて球磨川の右に出る者はいない。助けを求めた瞬間に負い目があった。それを見逃すほど球磨川は甘くなかつた。

「やれやれだ、まったく——意味不明にして脈絡もない。君たち言う過負荷は、^{マイナス}どうして“そう”なんだい？ 全てを台無しにして、それで何をしようと言うのかな、何ができるといふのかな」

声が聞こえて、黒い爪が出現する。それは動けなくなつたヴィラン連合をいたぶろうとする球磨川の足を止めた。

『いやあ、久しぶりだね。長い間会ってないから名前を忘れちゃつたよ』

それでも球磨川はへらへらと笑って、手を振る。親しい友人にでもするように。

「君は僕と会つたことがない。君と言う存在を知つて興味が出て調査したが、分かつたのは君と関わりと碌なことにはならないと言う事実のみ。できれば会わないままが良かったんだけどね——」

『おいおい、そんなこと言うなよ。君と僕の仲じゃないか』

「だから、会つたこともないと僕は言ってるんだがね——」

無限に伸びる黒い爪と螺子がぶつかり合う。軌道から外れた、いやわざと外した爪の一本が黒霧に刺さり——

「個性強制発動——」

『逃がさな……いいー！』

黒霧に向けて螺子を投擲しようとした腕を新たな爪が切り落とし。

さらに——

「マグネ、君もだ。個性強制発動……！」

そして、三本目。トガヒミコをひっかけてワープゲートの中に放り込む。

『だが、彼らはすでに僕が螺子伏せた！ 引力があらうと螺子が抜け

なければ意味はない』

「そうかね？　ならば壁の方を何とかしようじゃないか」

オール・フォー・ワンは片膝を付き、爪のないほうの手を床に置く。
『何……？』

『『腐食』×3＋『微熱』＋『反応活性化』×2。螺子そのものが畏、という可能性を考えないほど僕は間抜けではないつもりだ。ゆえに土台のほうを崩させてもらおうか……！』

崩壊した。螺子——ではなく、床……どころか建物全体を腐らせて。規模が違う。能力^{個性}が違う。桁違いな強力さ、これこそがオール・フォー・ワン。

『ぐっ……！　これじゃ、螺子が意味をなさない』

結果は建物そのものの倒壊だ。床が、壁が腐って落ちる。倒壊と言うよりも、鉛細工が溶けて流れ落ちるような破壊。

「さあ、これで君と僕の二人きりだ」

崩れ落ちた建物の上で二人は対峙して——

『……』

球磨川は死んでいた。腐った建材がクッションになったとはいえ、三階分からの転落だ。一般人でも悪くて気絶くらいのもものなのに。この男——雑魚と言ったら魚に失礼と言われるほどの弱^{マイナス}さにはそれで致命傷だった。

「まあ、いい——死んでくれるなら、それで」

『『ワープ』の個性で飛ぼうとして。』

『なるほど。素晴らしい力、そして信念だ。さすがはヴィラン連合としか言えないよ』

球磨川が立ち上がる。

「馬鹿な……！　貴様は死んだ。『生命探知』で死亡を確認したのに」
『悪かったね、試すような真似をして。だが、これなら安心だ。今こそ言おう。僕がここに来なければならなかった理由。ヒーローにはできない、ヴィランにしかできない使命を——』

拍手する球磨川の目にぎらりと光が宿る。

「使命……ッ!?　何のことだ、ヒーローにはできない……だと」

『そう、ヒーローでは無理なんだ。だから君たちに頼るしかない。君たちだってヒーローの限界はよくわかっているはずだ。君たちでなければ——』

真摯な目が心を射抜く。真剣な話だ、この上なく。

「だから、襲撃をかけたのか。このヴィラン連合に」

『そう。その使命こそ——』

たっぷり息をため、空を仰ぐ。

「その、使命——」

ごくりとつばを飲み込む。オール・フォー・ワンにはもはや口などと呼べる場所はないとはいえ。しかし、それくらいの緊張度だ。

「……っが!？」

だしぬけに心臓に螺子が突き立てられた。

『ええと、なんだっけ。使命だっけ？ ああ、あれだ。刑務所で臭い飯食うとかじゃない?』

へらへらと馬鹿にするように指をさす。今までの真剣な態度が一変、人を食ったような馬鹿にした笑いを浮かべている。急転直下、人としてどうなのだろうと思うレベルの変わり身だ。もつとも、“人でなし”ということに関して彼の右に出る者はいない。

「貴様——」

ここで、解説を入れるとすれば……オール・フォー・ワンは別に愚かではないということだ。

騙された。それは事実だが——どこに存在する？ ただ事態を滅茶苦茶にできればいいだけの人間など。筋道の通る説明、ならば現実的なのは何かしらの“敵”……クトウルフとかBETAとかでもいるから“悪役”^{ヴィラン}に頼ると言うことが本命。というか、力試しそのものは彼らもやっていた——その結果としてムーンフェイスやマスキュラーの投獄がある。襲撃そのものに不自然さはまるでない。

別にヴィランは現社会の崩壊は望んでいても人類皆殺しなど間違っても望んじやないのだ。

ゆえにやはり、ここで騙し討ちは“ない”。そんなものに意味はない。いや、オール・フォー・ワンを憎んでいるから、ならいいが球磨

川にはそんな恨みはない。それは裏社会のドンといわれた彼であれば見れば分かる。どこをどう考えても、ここは手を取る場面だった。オール・フォー・ワンから拒むことはあっても、球磨川から騙すのはどう考えても意味がない。

そして、それがヴィランと過負荷の違いである。

『まったく、君たちはあれだね？ ヒーローとヴィランとか言っちゃって、憎み合っている。ヒーローにできないとか言われるだけで舞い上がっちゃってさ、僕から見れば過負荷弱点でしかないよ』

「ならば、球磨川禊——君の目的は何だと言うんだね？」

『うん？ 僕の目的……そうだ、僕は昔爆豪君に燃やされたことがあって復讐しに来たんだ、あれしつくりこない。じゃあ、昔死柄木にイジメられたんだよ、うん、これも違う。ええと、思いつかないから明日メールするね？』

「……は？」

ヒーローとヴィラン、それはどちらも強者プラスだ。信念を胸に灯し、見定めた目標に向かってたゆまぬ努力を続ける。——その境界は社会にとって都合がいいか、悪いかだ。

……過負荷に目的などない。信念などない。

『じゃ、さよなら』

球磨川が止めを刺そうとして。

「目的など、ないのか……！ 僕をこれだけ邪魔しておいて、確固たる信念も、目的すらもないだと——」

その螺子は半ばから真つ二つに。

『え……あの……』

オール・フォー・ワンが愚かではない証拠をもう一つ。ああ、確かに不意打ちで一撃を貰ったとも。けれど、それで不利になったわけでは実はない。

『衝撃吸収』＋『身体液状化』。君の攻撃は効かなかった」

『あ……やべっ』

「今度こそ、死ぬ。もう手加減はなしだ『空気を押し出す』個性、＋『筋骨発条化』＋『瞬発力』×4＋『臂力増強』×3」

崩壊した建物が地下にまで叩き潰された。もちろん、それには球磨川の体も含まれる。

『……あは。いや、すごいね。こん——』

もう一度。

『あの』

もう一度。

『あ』

もう一度。

『』

何度も何度も。

「残念だったね、球磨川禊君。殺せないなら、死ぬまで殺すだけさ——」

その一か所だけ完全に陥没し、どこかの秘境にありそうな大穴になるほど衝撃波を叩きこんだ。例えオールマイトでもまともに喰らえば耐えられないであろう程の破壊。

『殺せないから殺し続けるって、頓智とんちかよ』

螺子がオール・フォー・ワンの頭に突き刺さった。今度こそ、個性を使う暇もなく。まるで因果を無視している。油断したわけでも、大穴から這い上がるのを見逃したわけでもないのに球磨川は隣のビルの屋上に立っている。

『けど、あれだけ殺されちゃ勝利とは言えないな』

くるりと踵を返して路地へと消えていく。周囲にはもはや人影はない。

『また勝てなかった』

残されたのは、自分が生きているどころか——見えていることに戸惑い、自らの顔を触っては輪郭があることに驚愕するオール・フォー・ワンだった。彼の体の惨状と言ったら一秒先には死んでそうだったのに。それが生きているどころか怪我が治ったのだ、終わって見ればこれ以上良い結果はないはずだが。

「なんだ、これは——」

その胸にあるのは気持ち悪さしかなかった。集まって遠巻きに見

ているヒーローどもを虐殺するような気は起きるはずもなく、ワープで逃げた。

第3巡回 ヴイラン連合

「おい、こりやどういことだよ——」

死柄木が机に腕を叩きつけ、個性で粉々にしてしまう。ヴィラン連合にダメージはなく、捕えた爆豪もお眠り中。今はセーフハウスの一室に隠れていて不安要素はそうない、はず……なのだが。

「やれやれ、台無しにされてしまったね」

オール・フォー・ワンが現れる。彼もまた傷はない、どころか——
「せ、先生——あんた……怪我は？」

見知らぬ男、見知らぬ声。それもそうだ、彼の素顔は死柄木すら知らない。なにせ、文字通りに“潰れて”いたのだから。他の面々に至ってはそもそも存在を、名前すら知らぬ者もいる。

「治されたようだ。まったく、ああいう輩には関わりたくなかったんだがね——」

ふう、とため息をつく。その様は本当に疲れているようで。

「——なあ、あんたは何者だ？」

茶毘が口を開く。当然、いつでも個性を発動できるようにした状態で。そう“知らない”。彼を知っているのは死柄木で、彼はこのことを隠していた。

「いやあ、怖いね茶毘君。僕は君の味方さ——ヴィラン連合を裏切らない限りはね」

「黒幕はあんたと言う認識でいいのか？」

冷たく睨みつける。ボスだと思っていた存在が見知らぬ人間に“先生”などと呼び頼るのを見たら疑いもする。基本、ヴィランは独立独歩……自分が部下の部下など認めがたい。今でも同志ということ、死柄木に下ったつもりはない。そう、茶毘だけではなく誰一人として膝を折った記憶などない。

「駄目だね。全然だめだ。確かに脳無を作ったのは私だし、いくつか私の指示で弔にやってもらったこともあるがね——ヴィラン連合は弔のものだ。彼が指揮し、彼が導く」

「あんたが導いてるようにしか見えないんだがな、“先生”？」

むろん皮肉。茶毘は一度聞いた名前を忘れるほど鈍くはない。わざと先生と呼んだだけだ。

「もちろん先達として教えられることは教えるとも。けれど、何をやりたいかは弔が決める。君らも、彼に共感して集まってくれたのだろう？　そういう意味では僕も君たちと変わらない立場と言える」

「では、違うのは？」

「同志、というよりパトロンになるのかな。僕の立場で言えば教師よりも黒幕よりも、もちろん部下ではなく出資者というのが一番近い。ま、そういう意味じゃ黒幕かもしれないね。けれど、君たちのリーダーは弔に他ならない。大体お金を出したから僕がボスだなんて、君たちも認められないだろ？　僕のことは裏方の一人と思ってくれればいいんだよ」

「……」

「納得してくれたようだね。他に質問はあるかい？」

見渡すと皆が押し黙る。思いつかない、というよりも圧倒的なオーラに気圧されている。これこそが全盛期のオール・フォー・ワン。並の精神であれば向かい合うだけで心が崩壊する。

「じゃあ、次の話だ先生。あいつ一体何なんだ？」

「ふむ、そうだね弔。その話をしなければならぬね。ただ——僕としても知っていることはそう多くないと覚えておいてほしい」

滔々と講義のように語り出す。

「まず、彼らの特殊能力は個性ではないと言うことだ。いや、では何なのかと言うのは分からないがね。入手した廃病院のデータによると“個性因子を攻撃する”個性によっても異常性の消去を確認できないと言う症例が記録されている」

「そのデータも残っているのはわずかでね。襲撃してきた彼、球磨川禊と言うんだがそいつが研究病院を廃墟にしまったんだよ。そういう研究を主眼とした病院はいくつかあったんだが、それも潰されてしまっただけ。彼ではなく、別の——そう、過^{マイナス}負荷がやったと見ている。彼らの特異性は便宜的にそう名付けられていたようだ」

「いや、分からないけどね？ そのデータが本当かどうかとか。ほとんど情報が入手できない。彼の危険度を鑑みて調査は常に行っているのだがね——分かったのは廃校になった学校のいくつかに彼の痕跡が見えたと言うことくらいだ」

「さて、ここまで言ったら分かると思うがね。僕が今まで言ったのは分からないことが分かったと言うツマラナイことだよ。質問はあるかね、と言いたいが聞かれても答えられないので講義はやめていいかな」

言い切った。

「——あれは幻惑系の個性じゃなかったのか？」

死柄木が口を開く。ヴィランとヒーローの優位性で最も大きいのが個性が知られているかどうか。それがどういうものか、知っていれば対策はたやすい。

「違うね。いつの間にか僕が治されていた。まったくもって、なぜこんなことをしたのか謎だけれど——これがどういう力なのかはさらに謎だ」

「治療系……ということもなさそうだが」

「いや、本当に何なんだろうね。螺子の生成、変形すらもやっていたけど——そもそも個性じゃないのだから能力としてひとまとめにできるようなものでもないかもしれない」

「何もわからないってことかよ。……くそが！」

沈黙が下りる。ここで球磨川と戦えと言われて頷ける者はいないだろう。わけのわからない不気味さ、そして正体の欠片すら見えぬおぞましがひたひたと押し迫ってくるように暗闇のとぼりが下りる。

「——で、だ。弔、どうするかね？」

「どうするって？ 先生」

「おいおい、君がリーダーなのだから君が決めてくれなければ困るな。ま、僕に言えることはこのセーフハウスは万全でもないから数日中に引き払ったほうがいいということくらいだよ」

「……ち。ヒーローどもか。一々こっちの邪魔をしてくれる……ッ
！」

そう、あくまでヴィラン連合の敵はヒーローだ。球磨川はあくまで横から出てきた意味の分からない第三勢力に過ぎない。本来の敵を忘れているとあつという間に叩かれる。

「さて、さらに悪い話だがね。出せる脳無がないんだな、これが」

じとりと他の面々がオール・フォー・ワンをねめつける。その目は雄弁に「都合が悪くなったから切り離すつもりか？」というじつとりとした疑いを語っていた。パトロンとしてはよくある話だ、旗色が悪くなったと単に逃げ出すというのは。

「ああ、いや。違う違う。僕がどうのではなくヒーローだよ。悪いね、生産工場をつぶされてしまった。というか、実は危ないところだったらしい。僕が帰るときにオールマイトはじめ豪勢なメンバーが見えた。始めから突入するつもりでパーティを組んでいたらしいね」

「「……ッ!?!」」

今度こそ、雰囲気は地の底まで落ちる。あのままだったら窮地だった。本来であればヒーローにしてやられていたという事実は耳に痛く。

そう、球磨川に滅茶苦茶にされて、ヒーローからは命からがら逃げ伸びる——そんな己のふがいなさに歯噛みする。「もう、自首してしまえばいいんじゃないかな」誰一人として言う者はいないが、その程度には弱気になっている。

「ふざけんなー!」

死柄木がもう一つ机をつぶす。

「お前ら、いい様にされたままで満足か!? 俺たちの、ヴィラン連合の目的を思い出せ! 俺たちはこのくそつたれなヒーロー社会をぶつ潰すために集まった! まだ終わってねえだろうが!」

激情の本流。だからこそ、沈んだこの場の雰囲気にしみて。

「傷が治った先生ならオールマイトなんざ敵じゃねえ。なら、俺たちが他のヒーローを抑えてやる。オールマイトを倒し、くそつたれな平和を破壊してやろうじゃねえか」

その熱意に感化され、否。初めから熱量はあった。ただ球磨川の気持ち悪さに心が折れかけていただけで。ゆえにこそ、この説得は多大

な効果をもたらず。

「……ふ、その通りだ。さすがは弔。僕としたことが視野が狭まっていたみたいだ。あれをどうするかということばかりに思考が行っていた、初志貫徹こそ成功のカギなのにね。そこまで言われたら仕方がない——僭越ながら僕が主役を務めさせていたどころ」

「だが、あの男がまた現れたら——」

「あの過負荷マイナスにヒーローと協力なんてできるはずないよ。ならば、無視してしまえばいいのさ。マイナスなどね」

オール・フォー・ワンが断言する。意味不明のマイナスにおいて確実なことと言ったらそれだけだ。ヒーローを横から殴りつけはしても協力はしない。

「頼むぜ、先生。それと、ついてきたくない奴は来なくていい。ここでヒーロー社会が終わるのを待っている」

「おやおや、弔。ここは俺について来いという場面だと思っただけだね」

「足手まといはいらねえ。やるぞ黒霧」

「あんなこと言っておきながら私は強制参加ですかー」

「なんだ。嫌だったか？」

「まったく、あなたという人は。仕方ありませんね、付き合っただけでしょう」

死柄木は笑みを浮かべ、言う。

「さあ、ヒーロー社会の終焉ってやつを農的な阿呆どもに見せつけてやろうじゃねえか。なあ、爆豪君よ——」

いまだ眠り続ける爆豪に嘲りを向けて。

彼らは気づいてはいない。己たちは順調、どころか破滅に向かってまっしぐらだということ。確かに彼らは先だつての戦いで負傷を残していないし、球磨川に対して圧倒的にぶちのめして勝利を得たといってもいい。

ゆえに気づくこともない。この勝利によって生き方が螺子曲げられてしまったことなど——露も。

オール・フォー・ワンは表舞台に立つ気がなかったし、死柄木もまた“誰かに任せる”ことと“誰かに頼ってやってもらう”ことの違いは分かっていたはずだった。ことここに至って、初志が決定的にずれてしまった。

ずれた歯車が回り出す。壊れた機械が動けばどうなるかなど明白なのに、当人だけは気付かずに。

第4巡回 雄英教師陣襲撃

——雄英、会議室。そこでは塚内刑事を加えた教師陣営で話し合っていた。しかし、その空気は何ともいいかんともしがたく……一言でいえば暗い、重苦しい雰囲気だ。会議室を包んでいた。

「えー。とりあえず、爆豪君の救出作戦は空振りに終わったわけだけど——」

校長が口を開く。ねずみでありながら雄英という名門を治める彼の個性は『ハイスペック』、つまり頭がいいということだが。しかし、頭が良ければ知らないことが分かるというわけでもなく空元気の有様だ。

「なんとも予想外ですね。とりあえず脳無の生産工場を押さえられたのはよかったです」

刑事が口を開く。が——“生徒がさらわれたままで良かったも何もない”、という視線を受けて居心地悪げに口を閉ざす。

「——オール・フォー・ワン」

オールマイトが口を開いた。

「オールマイト、それは……」

「校長、ここは知らせるべきでしょう。闇社会を取り仕切っていた、私が倒したと思っていたアイツが生きていた」

「まあ、そうだね——」

プロフィールを明かす。それでもワン・フォー・オールや都合の悪いことについては口を閉ざして。もちろん、教師全員にオールマイトの傷を明かすということもしない。

「問題は奴が何と戦っていたか、だ……！」

「それについては警察のほうではお手上げだ、オールマイト。目撃証言が何もない。まるで幽霊とでも戦っていたかのようだね」

「……僕も、心当たりはないね。いっそのこと、ヴィランが仲間割れでもしてくれたのだったら話は早いんだけどね」

「それについては、何分現場がひどい有様なので。ヴィランの死体で

も出れば僕に話に来るようになってますけど」

「いや、それはないと思うな。奴は闇のカリスマ、衰えたとはいえ逆襲を許すようなやつではないと思う」

議論が白熱する。そこに冷たい声が響く。

「いや、存外良い評価をしてくれるじゃないかオールマイイト。僕も、君ほどしつこい奴はついぞ見たことがない——誉め言葉だよ？」

圧倒的な闇の雰囲気。教師陣営ですら動くのを忘れた。けれど。

「……オール・フォー・ワン！」

オールマイイトが動こうとして。

「おっと、動いてくれるなよ？」

死柄木 弔。口にビー玉のようなものをくわえている。

「それは、Mr. コンプレスの……！」

「そう、動いたら爆豪君を食っちゃまうぜ？」

いきなり現れたヴィラン連合。瞬く間に会議の場を掌握してしまった。

「さあ、このゲートを抜けてついてくるんだオールマイイト。君と僕の決戦の場だ」

「もちろん、他の人間が入ってくることは許さない。破れば——ま、分かるだろ？ 偽善者諸君」

かりかりと歯の上で玉を転がす。逆に言えば取り返すチャンスだが、死柄木を驚かせて反射的に口に含んだものを噛み砕かれたらたまらない。……動けない。雄英のヒーローたち、誰一人として。

「……良かろう。貴様の茶番に乗ってやろう」

恐れ一つ見せずに歩き出すオールマイイト。

「馬鹿な！ 待つんだオールマイイト。これは罠だ！」

「罠であろうと、真正面から潰すのがヒーローだ！」

「オールマイイト……！」

踏み込んだ彼とともにゲートが消える。

ゲートの先は樹海につながっていた。

「さて、改めて久しぶりと言わせてもらおうかな。オールマイイト」

「オール・フォー・ワン、ここまでついてきたのだ。爆豪少年は返してもらう！」

「え？ 嫌に決まってるじゃないか。そんな約束をした覚えはないよ」

けらけらと笑う。

「……ぐ！ 貴様、どこまで——」

「ま、いいさ。彼は人質、だなどと言うつもりはないよ。存分に殺し合おうオールマイト。なぜなら僕は君を憎んでいる。簡単には殺さないよ」

暴力的なまでの圧力。怪我が治り、全盛期に戻った彼の闇の威圧は桁が違う。おそらく先程の会議で出していたら教師たちは再起不能になっていた。

「良からう。今度こそ引導をくれてやる」

けれど、オールマイトには通じない。この“平和の象徴”に、ただ強いだけでは膝を屈させることは能わない。そう、どれだけ強い敵にも立ち向かう姿こそがヒーローなのだから。

「では、僕は絶望を与えることにしよう」

悪の首領、そして平和の象徴——究極域に達しながらも方向性が全くの逆を向いている到達点二人の戦闘が始まる。

一方、ヴィラン連合はというと——ヒーローと戦っていた。死柄木はかつて“どこからともなく湧いて出る”なんて言ってしまった通りに、派手な行動を起こした以上はヒーローがここに集まってきている。もちろんヴィラン側が選んだ土地、名のあるヒーローは近くにいない。

どころか爆豪を人質に取っているともなれば、もはや戦いどころではなく虐殺だ。手も足も出ずに虐殺されていくヒーローを踏みつけて高笑いする。怪我人、どころか死者すらも積まれて——

人質は一人だから、それができるのは死柄木一人と思うかもしれないが、それは違う。Mr. コンプレスの個性に目印はない。“それ”に何が入っているかはわからない。で、ある以上はヒーローはどうし

ようもない。たとえ10分の1だろうが、可能性がある以上は手出しできない。それがヒーロー。

ゆえにこそ、それは今ただただ死体と負傷者を山と積み上げていくレミングと化していた。

だが、戦いの結末はそんな木っ端を考慮しない。

オールマイトが敗れば築き上げた象徴が崩壊し、果ては社会が崩れ去る。けれどオール・フォー・ワンが負ければ、ヴィラン連合は消耗戦だ。限られた戦力であらゆるヒーローを相手にしなければならぬ。どれだけ善戦したところで終わりの見えないチキンレース、必ず負ける戦いだ。それがわかっているだけにオールマイトとオール・フォー・ワンは負けられない。

「オールマイト！」

「オール・フォー・ワン！」

戦う理由は十分で、負けられない理由は十二分。どちらにとっても後はない。同時に踏み出す。勝たなければならぬのは同じ、だからこそ二人が選択したのも同じ。まっすぐ行ってぶっ飛ばす。

「馬鹿正直なのは変わらないね！ 『衝撃反転』」

かちあつた拳と拳、オールマイトの腕から血が噴き出す。

「……おお！」

それでもひるまない。それがどうしたといわんばかりに逆の腕で顔に一撃を入れた。

「悲しいねえ、オールマイト。あの時は君が上回った。けれど、今は君が“下”だ。その体ではねー」

お返しに殴り飛ばした。オールマイトは木々を折りながら飛んでいく。

「なるほど。確かに治っているようだ。貴様、何をした？」

「さて、僕は一体何をされてしまったんだろうね——」

「は、貴様らしい煙に巻いたような言い分だな」

「誉め言葉と受け取っておくよ」

向かい合う。とはいえ、オール・フォー・ワンが“らしい”かと言

えば、実はそんなことはない。卑怯卑劣で、闇そのものを凝縮したともいえる悪魔的頭脳が発揮されていない。彼のヒーローじみた正々堂々は球磨川に勝ってしまったことに端を発する。

「この身に代えても貴様を討つ」

「では、僕はこの身に代えずとも君を倒そう」

かつかつと歩を進める。目と鼻の先まで、近づいて。

「……ッ！」

同時。拳が互いの顔にめり込んで。

「——っおお！」

殴る。殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る——すさまじい、どころか悲惨とすら言える拳の連打。両者、一歩も引かず。

『『空気を押し出す』個性、＋『筋骨発条化』＋『瞬発力』×4＋『膂力増強』×3』

引いたのはオール・フォー・ワンだった。すかさず遠距離攻撃を放つ。

「甘いぞー！」

だが、オールマイトはかわす。後ろに人質がいなければ当たってやる理由はない。

「それは君だオールマイト。遠距離攻撃手段がないのは変わらないだろう？」

何度も撃つ。

「それで私を倒せるとでも？」

かわす、怪我もない。何十回でもかわす自信はある。

「さて、それはどうだろうオールマイト。喰らえば君でも一発でおいしいじゃないのかな。そして、僕は何度でもチャレンジできるんだ」

オールマイトはまともに喰らえば動けなくなる。そして、まともに喰らわずとも、相殺してさえ残りの力はなくなる。オールマイトは弱っている。それを感じているからこそ。

「全盛の僕と、弱った君の違いさ。こうしているのは僕の方がはるかに疲れるよね。けどね、それでも——君はあと何秒持つ？ 僕は1週

間でもこうしていられるよ。元々の体力が違うのさ」

「……ッ！」

持久戦。オールマイトは歯をかみしめる。それでは勝ち目がない、マッスルフォームに制限時間があるのでは。

「ワン・フォー・オール力あるうとも！ 傷つき弱った君に無限に戦い続けることはできない。ゆえに僕が勝つ。手堅くいかせてもらうよ」

「いいや、それでも勝つのは正義だ」

オール・フォー・ワンが驚愕する。オールマイトはなんと突っ込んだ。

「勝負を諦めたかい？ わざわざ喰らってくれるなんて——ね！」

同じ個所に二度、三度。油断はない、確実にとどめを。

「貴様を倒す！ そこに行くから待っている！」

だが、それがどうしたとばかりに突き進む。消耗戦では勝ち目がなから特攻？ それは奇策ではなく暴挙と言う。“勝ち目が0に近づくなら0にします”って、そんなのは初めから破綻している。けれど、それでも——その無茶を通せず何がヒーローか。成功率など100万回に一回成功するなら十分だ。

「馬鹿、な——」

「——私が来たぞ！ DETROIT SMASH！」

そして、オールマイトこそがヒーローだ。だから彼は不可能なはずの道を踏破する。4回どころか1回相殺すれば終わりの身で連射をさばききって接近、渾身の一撃で叩き伏せ、地にひびを走らせた。

「つぜ、はあ——……ッ!?!」

反動でマッスルフォームが解け、そして静寂が戻った森にヘリのローター音が聞こえてくる。報道機関のヘリ。つまり、世界に見られてしまった——このやせこけたトウルフォームを。

「けど、奴は——ッ!?!」

起き上がる。倒したはずの、全てあらゆる力を振り絞って放った渾身の一撃を受けた敵が。

「はは。弱くなったね、オールマイト。これで終わりだ」

腕が巨大化する。

「これが今の僕が使える最高威力。君はきつちりこの手で殺しておかないと安心できないからね」

「……あ」

「さあ、お別れだ。オールマイト。ちょうどそこにヘリが飛んでいる。遺言の言葉を残しておくといい。それくらいは待ってあげるよ」

「――」

気力、体力。果てには残り火さえ、火がつかない燃え残り。

「ふふふ。よく考えて。これからはヴィランの時代なのだから」

「――」

それでも、最後に残るものがあるとするれば。それは声援。そう、どこかの誰かが応援する声が聞こえた気がして。

「おいおい、黙ってれば見逃してくれると思うんじゃないよ？ そろ

そろ我慢の限界だ。さあ、君は最後に何と言うのかな」

「私は平和の象徴オールマイト。悪になど負けはしない」

だからこそ、決意を込めて笑顔を見せるのだ。それがやせこけた歪なものであろうとも。

「……そうかね、命乞いの一つも見れないのは残念だ」

ビルさえこともなく壊し粉碎する一撃が振り下ろされて――

「――何?! 馬鹿な、その力どこから来る!?! もはやこぶしを握る体力すらも尽きたはず! 君の体を動かすそれはなんだ!」

それが受け止められていた。何の力もないはずのオールマイトに。

「悪がいる限り、何度でも言おう。私 came!」

腕だけのマッスルフォーム。歪なそれがオールマイトはもはや限界すらも超えていることを示す。

「だが甘い。『衝撃反転』」

「――があー!」

血を吐いて。いや、それどころではない。腕が砕けて紫色に。

「そして、片方だけじゃあない」

今使ったのは片手。とどめの二撃目。人の腕は二本ある。

「だからこそ――」

オールマイトがかわして懐に潜る。

「まさか……！ 腕を犠牲に？ そんな戦術、どこで——」

「これが我々が紡いできた歴史！ 受け継がれてきた志！ 貴様が侮ってきた者も思いを今こそ——」

残り火が燃え上がる。これが真正正銘、最後の一撃。ワン・フォー・オール、闇の帝王を打ち倒すために受け継がれてきた歴史の極致にして到達点。

「ユナイテッド UNITED ステイツ STATES オブ OF スマッシュ SMASH」

その一撃こそが世界最強。誰であろうとも超えることはできない人の歴史が詰まった“重い”一撃。

「が……は——」

ついに、オール・フォー・ワンが倒れた。

「これで、ようやく終わりました。師匠——」

「だと、思ったかね」

絶望が立ち上がった。

第5巡回 一からやり直し

「そんな……なぜ……ッ！」

もはや両腕ともピクリとも動かせる状態でなく、そして体は枯れ木のように頼りない。もはやエネルギーなど寸分すらも残らぬ体のオールマイト。全力をさらに飛び越えて、倒したと思ったのに。

「はは、自慢するようなことじゃない。確かに効いたさ、あの一撃は。ああ——僕の体が治ってなければ、倒れていただろうねえ」

立ち上がったオール・フォー・ワンはぱんぱんと適当に服のほこりを払う。

「——ッ！」

絶望とともに理解する。始まる前から満身創痕のオールマイトと、なぜか傷が治っていたオール・フォー・ワン。その差だった。防げたわけではない、効いていないわけでもない、ただ削り切れなかった——

「さあ、さよならだ」

渦巻く衝撃波。それを避ける手段などオールマイトにあるはずもなく。すでに残り火は燃えカスどころか欠片すらも残ってはいない。

「……すまん！」

誰に謝ったのか、オールマイトの悔恨もろとも黒い渦が飲みこんで

「おやあ？」

「え？ なにが——」

外れていた。衝撃波が吹き飛ばしたのは木々だけだ。

「ああ、君の拳は痛かったからね。ふらついてしまったよ。けれど。二度はない」

もう一度。ダメージで狙いがずれたのなら、当たるまでやればいい話だ。もはやオールマイトは動けない。

「……諦めん！」

だが、そこにオールマイトは希望を見た。もう体力がない？ 個性

が消えた？ 人を救うべきその両手はすでに折れている？ それはどうした。そんなものは関係ない。なぜなら。

「なぜなら、私がヒーローだから！」

力のこもった両目でオール・フォー・ワンをにらみつける。

「はは。そういう目をしてくれないとね。憎い君が何かができるはずと信じて——むごたらしく何もできずに死ぬ有様が僕は見たい！」

衝撃波。二度目はない、今度こそ命中した。もちろんぶれてはい、それでも広範囲な衝撃波はオールマイトを薙ぎ払った。そのはずだった。

「いや」

か細い声。ともすれば聞き逃してしまいそうな。多少ずれたところに彼がいた。幸運にも攻撃どころか余波も喰らわなかったらしい。

「なに!? いつの間に——だが、奇跡は三度も起きないよ！」

衝撃波。

「ヒーローはなぜ立ち上がるか知っているかい？」

もう一度。けれど声は消えやしない。

「……ッ！ なぜだ、なぜ生きているオールマイト。ワン・フォー・オールを失った貴様に個性はない。かわすことなどできないはずだ！」

「それは助けを呼ぶ声が聞こえるから」

訳が分からなかった。今のオールマイトに戦う力など何一つないはずなのに……ッ！

「馬鹿な。馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な——個性を使わずにヴィランと対峙する？ そんなの、君が作り上げた個性社会に対する反逆じゃないか！」

「その声ある限り、ヒーローは負けないんだよ」

幽霊のように、実体がないかのように何度衝撃波を放つても倒せはしない。では接近戦に切り替える？ そんな馬鹿な、先ほどはそれで手痛い反撃を食らった。つまりところはトラウマだ、自覚しないうちに接近戦を避けている。

「ふふ。ふははははは——ヒーローは負けない？ 助けを呼ぶ声があ

る限り不死身？ ならば、その声を断つてくれようじゃないか！」

遠距離戦でも接近戦でもダメ。ならば中距離なんてトンチはやらない、そんなものはしよせんどつちつかずだ。ゆえに、第4の選択肢を——そして同時に揺さぶりを。

「それは無理だよ、オール・フォー・ワン」

けれど、その声は冷静そのものだ。

「はは。確かに人里離れたここなら他人の姿など見えない！ けどね、オールマイト。どうせ君のことだから助けを呼んでいる奴という言うのは！ テレビを見て応援してくれる誰かとか、顔も知らない奴らのことを言っているんだらう!?」

「……」

「ならば、“ここ”から抹殺してあげるまでさ！ そう、わざわざワープする必要すらもない！ 毒の個性！ さらに風を操る個性！ その他もろもろを足して日本中の人間という人間を虐殺してくれよう！」

「……」

「どうした？ 言葉もないかい？ やると言ったら僕はやる。それともできないといたいのかな君は——ッ！」

「ああ、無理だ」

それでも、オールマイトはまっすぐ前を見て——笑顔を見せるのだ。

「ツそんな屈辱を受けたのは初めてだよオールマイト。そこで後悔するがいい。こんなことになるくらいならさっさと死んでおけばよかったとね！ 君のせいでみんなが死ぬよ！ あは。あはははは——ッ！」

「それをやっても声は消えない。なぜなら、君から聞こえたんだよ、オール・フォー・ワン」

「何を馬鹿な……！ 僕の何が聞こえたと——」

愕然として、おかしさすら覚えて。憎み合う僕らが、何を今更と唾を飛ばす。

「助けを求める声が聞こえた。だから助けるだけさ」

そして、限界。オール・フォー・ワンは当たり前に疲労で動けなくなってしまう。限界を超えたのだ、それが普通。

「君の生き様、悪のカリスマと呼ばれたのはただ自分のためだけじゃなかったんだろう？ 個性黎明期、まだ個性の認知がされず虐げられていた時代に君は立ち上がった。それが自分のためだけではなかったと、私は信じている」

「……違う。僕は。僕は——」

動けなくなった体でオールマイトを見る。誰にも理解されることになかった。けれど、この男だけは。そう、思いかけて。

『改心とかうざってえな。どうせそれも同情狙いとかだろ？ 貫けよ、男ならよ。情けねえ』

螺子が刺さった。

「……………あ？」

オールマイトが目を見開く。

「——」

オール・フォー・ワンの目から光が消える。

「ああ。あああああああああああああ！」

明らかに致命傷だと見て取って。

『おいおい、そんな叫ぶなよ。まるで僕が人を殺したみたいじゃないか』

球磨川が笑っている。へらへらと——同じ笑うでも、人によってはこれほど違う。オールマイトのそれとは180度違う、ただ自分のためだけの笑顔。

「なぜだ。なぜ、君は——ツ！」

『よく見てよ、僕は君たちみたいになけつたいなスーツは着ていない。つまりは一般人なんだ。だから、ほら——その人に螺子を突き刺したのも僕じゃない』

そう、両手に螺子を持って言う。“犯人は自分じゃない”などと恥知らずに謳い上げる。

「分かり合えるかもしれないと思ったのに……………」

『だから、僕は悪くない』

そいつは言ってやったぜ、みたいな笑みを浮かべた。

「——ッ！」

思わず、こぶしを握り締めて。うめき声が聞こえた。

「……オール・フォー・ワン？」

突き刺さった螺子が跡形もなくなった彼があどけない瞳でオールマイトを見つめている。その姿におぞましい何かを感じて——

「オール・フォー・ワン……ッ！」

その彼が口を開く。

「……パパ？ ママ？ ここはどこ？」

「——あ。なあ……」

ただならぬ、どころではない。ふぎけている様子は露もない。大人の大人が、まるで親とはぐれた子供のよう——

『彼の記憶をなかつたことにした。ほら、改心したら犯罪の記憶に苦しめられてしまうだろう？ だから解放してやったのさ』

そして、それは事実だ。今や裏社会のドンと呼ばれた最悪の人物はただの子供と変わりない精神に戻ってしまった。罪も罰も置き去りにして。

「なかつたことにした。だと……ッ！」

『精々救ってやるといい。僕は君と関係ない場所で、無責任に応援しているよ。だって、僕は悪くないんだから』

「待て……！」

オールマイトは手を伸ばして。彼はどこかへと消えた。

第6旋回 転校生

あの後、緑谷含む勝手に爆豪救出に向かったメンバーは相澤先生をはじめとする教師陣にこつてり絞られた。それでも救出に手間こそこかったが、爆豪は無事に救出された。生徒と関係ないところで。

犯人も逮捕——やっぱりオールマイトは流石だと言いながら世間は日常に戻って行った。雄英もヴィラン連合がつぶれたことで一安心して授業に戻る。

クラスまとめて怒られて意気消沈していたAクラスだけでも、そこはやっぱりヒーローの卵。立ち直りも早い。ヒーローが打たれ弱くは仕事にならないということだろうが、その辺の資質はばっちりと言えた。

「——転校生だ」

との言葉にA組は飛び上がるほど喜んだ。ヒーローを目指す者であるからには童心を忘れない……いや、まだまだ子供ではあるが。一々テンションが高いのもこのクラスの良いところだといえるだろう。ただ一人、馬鹿馬鹿しいものを見る目で見るやつがいるが。さらわれた爆豪である。

馬鹿馬鹿しい目というからにはもう一人のことも忘れてはいけな。相澤先生もまた、冷めた目で見ていた。

「おい、うるさいぞ。さっさと黙れ。合理的じゃないな。一人増えた分減らすぞ?」

ピタッと静かになった。冗談という雰囲気がないのだ、この人は。「ええと……」紹介に預かりました球磨川禊です。よろしくお願いします」

ごく普通の学生服を着た彼はぺこりと頭を下げた。クラスは受け入れる雰囲気だ——なぜなら、球磨川のマイナスな雰囲気はすっかり鳴りを潜めているのだから。こういうことも「できる」のが彼だ。

「——ッー」

気に入らないのが爆豪だった。殺されたのを忘れていない……い

や、生きているが。それが全く意味が分からない。なんで死んだのに生きているのか。うれしいどころか不気味なだけだった。

そして、その現象を引き起こしたと目星を付けた奴。あの訳が分からなく気持ち悪い奴が、いきなり現れて当然のようにクラスに転入してくるのも意味が分からないし、何より腹立たしいのはあの時自分が何をされたのかまったくもってわからないことだった。

「——クソが」

こつそりと毒づく。プライドの高い彼にはこの上なく気に入らないのだ。動ける状態でなろうと負けたこと。わからないことがあること。だが、この雰囲気では掛けるほど直情的な馬鹿にもなれなくて。

『——あ、爆豪君じゃないか。テレビでやってたよ、ヴィランにさらわれたんだってね。手も足も出なくて大変だったね』

だから、そう話しかけてきた球磨川にブチ切れて——

「つてメエが！」

最大火力での爆破。体育祭での振る舞いを見ればわかる、彼ほどスペシャルらしいスペシャルはいない。気難しいのも、才能屋のテンプレート。つまりは球磨川の毛嫌いする“才能があるから努力できる才人”^{スペシャル}そのまま。

『つぐは！』

その球磨川はおもむろにパンチを受けて倒れこんだ。

「——ツ!?!」

「やめろ、爆豪——除籍するぞ?。」

つまり、これはレイザーヘッドの“個性を殺す”個性。爆破が無効化されていた。それでも、爆豪の手から個性を使った名残、ぷすぷすと煙が出ている。

「お、おい爆豪……」

切島が話しかけるがその声は弱弱しかった。

『待って。無神経なこと言っちゃって怒らせちゃったんだね。ごめんね、僕が悪かった』

殴られた箇所を押さえて座ったままで球磨川は弱弱しく言った。

「——ッ！」

そして、球磨川は爆豪にだけ見えるように薄ら笑いを浮かべるのだ。

『思わないかい？』 “馬鹿だろ、こいつら” って——』

その声はなぜか爆豪以外の耳には入らなかった。

そして。

「爆豪君！ さすがにヒーローとして、いやそれ以前に人として話しかけてきただけで殴るのはどうかと思うぞ！」

委員長、飯田がおかんむりだ。

「そーだそーだ。乱暴すぎんぞてめー」

などと他のヤローどもからもヤジを飛ばされ。

「大丈夫でございませうか、球磨川さん？」

八百万が手を差し出した。

『え？ これ、夢かな？ ありがとう。実は僕、美少女に手を差し出されて立たせてもらうためにヒーローを志したんだ』

喜色満面の球磨川に彼女は苦笑して。

「もう、冗談はやめてください。むしろヒーローならば手を差し出すほうにならなければならぬのですわよ」

立たせてあげた。爆豪には茶番にしか思えない。なんでこのわざとらしい演技を信じているのか。 “馬鹿だろ、こいつら” などと思い

——背筋が凍った。先ほど言われた言葉は爆豪の感想を先取りしていた。

『いやあ、転校してきて良かったよ』

「っけ。ほんとーによーござんしたねえ」

黒い波動が放たれる。もつとも、それに力があるとすれば女子を寄り付かせないくらいだろうが。峰田だった。

「てめえ、わかってんだろうな？ 八百万のおててに触れるということかどういふことか——うらやましいぞコンチクショー」

「はい、あなたは引っ込んでましようね峰田ちゃん」

蛙吹がつまみ出そうとして。

「貴様ら、本当にクラスまとめて除籍されたいのか……？」
その目は本気だった。

そして、授業が終わる。拍子抜けするような一日だった——意外といえど転校生の頭が悪かったことくらいだろう。成績の悪さで除籍されそうなほどで、入学……というか転校できたのが不思議なほどだった。

「——質問があるようだな、蛙吹」

ただ一人、彼女だけは話を聞くために教室に残った。

「ええ、相澤先生。球磨川禊君って——何？」

「誰、ではなく“何”か。お前にはヒーローの資質があるよ。だが、それを言うなら爆豪は失格だな」

「それは……みだりに個性を使ってはならないから？　確かに今日のあれはどうかと思っただけど」

「それは違う。ヴィランに何もさせない、という点で思い切りは重要だ。攻撃されるまで手を出せないヒーローもは多い、そういうやつらは総じてレベルが低い。が——あれは別だ」

「……別？」

「お前はそれを感じ取ったから話しかけてきたんだろう？　個性が個性だけあって本能が鋭いのか。アレはな“立ち向かつてはいけな敵だ”

「——それは、ヒーローでも？　それとも、オールマイト先生に任せるってことかしら？」

「少なくとも、個人で戦うべきではない。そして、卵が相対している相手ではない。お前は手を出すな、黙っている」

「でも、それじゃ……！」

「俺たちが何とかする。——信じられんかもしれんがな」

「そんな……そんなことは……ない……わ」

「いいか？　じっとしているよ。あの類は注意をそらすためだけに全く無関係な人間を手にかける。気づかれたと知った時点で凶行に出る可能性がある」

「……ッ！」

相澤先生は息をのんだ蛙吹を置いて去っていく。その瞳に決意を載せて。

「――」

けれど、蛙吹は安心感どころか泥をのんだような不快感と不安をな
いませにしたような気分が晴れないのだった。

第7巡回 根津校長と過負荷

「——で、どういうことですか根津校長」

相澤先生は校長に詰め寄っていた。

「私も、聞きたいですな」

オールマイトもまたその席にいる。三人だけ——彼の危険さを理解できた者の数としては多いほうだろう。なにせ、弱すぎるがゆえに恐ろしいという矛盾^{パラドクス}——“障子紙よりも無抵抗な”球磨川の恐ろしさを理解することは強さを目指すまっとうな人間には難しい。

「球磨川禊——彼についてはすべてを伏せると、決めたときにあなたもいた。なのに——」

球磨川禊の名前は伏せられている。ヴィラン連合逮捕の時に現れた謎の少年、だがそれをありのままに報道することは状況が許さなかった。オールマイトの弱体化による社会の揺らぎをこれ以上刺激することはできない。弱体化はすでに全世界が知っているのだから。そしてオール・フォー・ワンは嚴重に幽閉されている。彼にもう闇社会のドンだった記憶はないとはいえ、凶悪な個性がある。そもそも記憶が消えても罪は消えない。はたから見れば悲惨の一言だが、だからといって釈放することなどできやしない。“かわいそうだから”などという理由で罪を許されたら社会は成立しないのだ。

「彼は危険だ」

そんな誰にとつても後味の悪い事件の原因、実行犯の彼が逮捕されない理由はない。闇社会のドンから罪を償う機会を永久に奪った彼。大体ヴィラン相手だろうとヒーローでないものが傷害事件を起こして罪でないはずがない。

「H A H A。まあ落ち着いて。言いたいことは分かるよ」

絞め殺さんばかりに迫る二人に対して、根津校長は空を仰いでコーヒーをすすする。

「では、なぜ？ 入学許可を出せるのは——というより、書類をごまかせるのはあなたしかいない」

そう、入学は決して正当なものではない。叩けば埃が出るどころか一片の真実すらも残らない、嘘とまやかしのみで構成された入学許可。

「……ううん」

言いにくそうにまごまごとしている。

「話してください、事情があるのでしよう?」

たっぷりと十秒ほど経って。

「どれだけ謝れば許してくるかな?」

「……根津校長!」

相澤先生が校長を掴みあげる。

「はは——ま、君たち相手ならどうやっても口を割ることになるんだろうね」

そう前置きして、観念した。

「昨日ね、球磨川君が来たんだ。理事会からの転校許可証を持ってね」
「理事会か——いや、待て。理事会に転校生を入れる権限など、どうかそんな制度自体がないはずだが……」

そう、雄英に転入制度などない。生兵法は大怪我の元、などという言葉があるように途中からヒーロー育成のカリキュラムを進めて事故を起こすわけにはいかないという教育上のルールだ。

「まあ、そんなの僕も持ってないけどね。まあ、偽造とかごまかしとかね」

つまり、誰も転入などさせられない。正式にそれを行う手段など誰であろうと持っていない幻の転校生。それをしたのなら、犯罪だ。裏口入学以外の何物でもない。

「……」

それでもあまりにあっけらかんと言われると黙るしかなくなる。

「とにかく、彼はそれを持ってきて転校させてくれと頼んできたんだ」
「それで、首を縦に振ったと? あなたが!」

「いやいや、もちろんしぶったさ。と、というか理事会だろうとそんな好き勝手はできない。彼を雄英に入れた僕が言えたことじゃないけどね」

「……なぜ」

「脅されたんだよ。ただそれだけさ」

「ヒーローが脅しに屈するなど!」

オールマイトのその顔は、なんだか悲しそうだった。

「君はそうだろうさ、オールマイト。でもね、皆そういうふうにはなれないものさ。君は不動の一位、並び立つ者がいない。だから、弱い者の気持ちがわからない」

対する根津校長は諦めと絶望をないまぜにしたかのような疲れた表情。

「……」

黙り込む。なによりも疲れ果てた根津校長の姿が痛々しくて。

「彼は人を食ったような男だったよ」

前置きして回想する。

『やあ、こんにちは。僕だよ』

そういつて彼は校長室に入ってきた。ヴィラン連合のこともあって強化した設備は元に戻してないのにね。当然だよ、残党が暴発する可能性を考えないほど馬鹿じゃない。だからこれは彼が規格外だったというだけの話だね。

「……君は」

うめくことしかできなかったね。なにせ、僕の個性は戦闘系じゃないから。ただの椅子に座っているとこころに來られちゃバトルも何もないよ。

『今日をお願いがあつてここに來ました』

「へえ、何かな。とりあえずコーヒーでも淹れようか」

この展開は望むところと思つたよ。いや、怪我の功名だとね。僕ならばうまいこと言いくるめられると己惚うぬぼれていた。なにせ、普通のヴィランというものは“何かを達成する”ために生きているからね——そこを利用すれば組すのはたやすい。

『とりあえず、死んでください』

「っが!」

殺されちゃったさ。螺子で頭をぐしやりとね。貫くどころか、頭そのものがなくなっちゃったよ。……僕は小さいからね。

『——なんてね、冗談ですよ冗談。僕は愚か者が好きでね、あなたも愚か者のほうにカテゴライズしてあげますよ』

悟ったよ。あれは無理だ。交渉も懐柔も説得もすべては無意味——あの這い寄るマイナスの前には。それは人間とやるものだ。アレは違う。

「なにをしたんだ？」

『ささやかながら僕を持つ異能でね。〃すべてをなかつたことにできるる〃ごくささやかな能力だよ』

意味が分からない能力だろうか？ 絶望したね。

「すべてをなかつたことにする……だつて？」

『そうだよ。傷も、記憶も——なんだつてなかつたことにできるのさ』
なにせ、僕はそれが真実だと悟ってしまったのだからね。

「何を言われようと、僕は生徒を売る真似はしない。羊の群れに狼を放つような真似だけはできない」

けど、だからつて生徒を生贄にできるわけがない。存在を消されようと抵抗するつもりだった。

『舌を噛み切つて、かい？ 自殺でもつて対抗、というわけかな。無駄だけどね』

「他者すら生き返せる能力、あながちはつたりと言いつつ切れないところが恐ろしい。——それでも、社会に君を告発することはできる。さすがに社会に広まる噂話なんて形のないものはなかつたことにはできないだろう？ 記憶が形のないものと言えば嘘にはならないかもしれないけれど、科学的見地ではニューロンが溜めこんできた電気信号という物質的存在とみなせる……個性による干渉が不可能じゃない。それでも、多数の人間に干渉なんてできるわけがない。一人二人ならともかく」

『おいおい、僕の過負荷を個性なんてものだと考えていたのかい？』

そんなプラスなもの、僕はもってるはずないってのに——』
「個性でなければ、なんだと……？」

『マイナスさ。才能ではなく、失ったものだから取り返しがつかない。だから君の予想は正しいよ。うわさ話なんてなかったことにはできない。なんせ、僕のこれは油断すると世界そのものをなかったことにしてしまうからね——たぶん、間違って世界ごと消しちゃうからさあ』

「世界……そのものを……ッ！」

『どうだい？ 止めてみるかな——その小さな前歯でも、がんばれば僕の喉首を搔っ切れるかもしれないぜ』

「あつはつは。無理だよ、だって僕の腰は砕けている。いや、慣用句でね。死んでもなお立ち向かう精神力は残念ながら僕にはないみたいだ。……オールマイトなら、諦めないのだろうけどね」

『じゃあ、僕の転校届も受理してくれますね？』

「それは嫌だよ」

『……』

しーん、と空気が流れた。

「え。いや、だって——相当どころかただの無茶だよ。正当な手続きなんて、元からないし。転入制度がないからね、雄英は。理事会の許可証だって、それで納得する先生方はいないよ？ もちろん、この僕だって社会から叩かれて校長を追い出されるのがオチだよ。転入したところで、1か月持たせるのも難しいよ」

『では、僕のお願いは聞いていただけないということですか？』

「脅迫の基礎をわかってないね。もしかしたらバレないかもしれない、と思うからこそ脅迫されるんだよ。初めから破滅するのが分かっているやらかす奴はいないさ」

『うーん。もう一声』

「一声って言われても。君がここに来たことを黙っていることしかできないよ……」

『じゃあ、こうしましょう。今からあなたの個性をなかったことにします』

空気が捻じ曲がる。悍ましい気配が物理的に世界を侵食するほどまでに濃くなっていく。これこそが負完全、過^{マイナス}負荷の極致の具現……

一瞬ですべてを台無しにしてしまうかのような。

「……え」

『自己紹介が遅れましたね。僕の名前は球磨川禊。そして所有するマイナス過負荷はオールフイクション大嘘憑き。実は今は亡きヴィラン連合に代わり、社会に問いを投げかけるためにここに来ました。ねずみであれば個性を得て人権を付与されたあなた、しかし個性をなくしてしまえばどう扱われるのか——実験動物かそれとも変わらず人と見るか、個性社会に問われることとなるわけです』

螺子を取り出し——

「待て。まってまってまってまって……やめてくれ！」

僕は、僕は——」

『さあ、皆様ごいっしょに！ It's all fiction!』

突きつけた。

「僕は、あんなところに戻りたく——」

ぶつん、と光が消えて。

「……あれ？」

非常灯が灯る。

『なんて。ちよつとしたお茶目ですよ』

光をなかつたことにした。もちろん、部屋内の——だから時間がたてば他から入ってきた光が中を照らす。

「……う、嘘——あ、大……嘘……」

『さあ、選んでください。個性人格を捨てて尊厳を失うか、正義教職を捨てて生徒を失うか。どちらでもお好きなように』

ぞわぞわとマイナスが空気を侵食する。これこそが球磨川禊の真骨頂。人を墮とす手管にかけては悪魔でさえも彼の右に出ることは許されない。

『どちらを選んでもこれからあなたの生き方は捻じ曲がることになりましたから』

そのおぞましく侵食する邪気に根津校長の心は完膚なきまでに螺子曲げられた。

心が折れた根津校長を放って二人で相談する。

「——で、どうするオールマイト？」

「え、いや。どうしようね？」

「さすがにあなたでも思いつかないか。さっさとあんな奴は除籍してしまいたいものですが」

「なかったことにする力……あれは反則だね。そういう力技をしては君自身の身も危ない。それだけならともかく、生徒のほうに危害を加える可能性がね……とりあえず今は刺激しないようにするしかないかな」

「そうですね。様子を見るのが今は合理的か——」

有効な手などなかった。ヒーローはどう盤上の駒でどう人を救うかが商売だが、マイナスは盤外戦術で心を挫きに来る。ヴィランとは違う第三の敵の前に有効な手など打つべくもなかった。

第8巡回 転校生にありがちなこと

球磨川が転校してから一週間。彼の存在により教室は滅茶苦茶なことになってしまふのではないかと、事情をわずかでも知っている人間は思っていた。そして、彼女もその一人。

(なんで、こんなことになってしまったのかしら)

唯一球磨川のマイナス性に気付いている蛙吹は頭を抱えていた。なぜなら――

(球磨川くん、彼とっても弱いわ。でも、それにしても)

誰がどう見ても強く思えない、のだ。ひよろひよろで吹けば折れてしまいそうな、“女の子よりも頼りにならなそう”などと1週間で言われてしまっている。その弱さは授業でもいかに発揮されている。

(でも――だから虐めるなんて、ヒーロー養成校にあるまじきこと……)

いじめ――そう聞けば緑谷のことを思い出してしまう。一応は隠しておこうという気はあるようだが、それでも思い出話を聞けば彼は爆豪にいじめられていたというのは容易に察せられてしまう。

(そもそも今でも当たりは強いわ。爆豪ちゃんにとってはおまわり変わってないのかもしれないけど、いじめがなくなったのは”取り巻きがいなくなったからできなくなった”からとみられても仕方ない。いいえ、実際にそう見ている人もいる)

レッテル貼りというのは許されない、なんて風潮はあるところにはある。しかし、実際の社会に出ている人間ならば誰でも知っている――それはレッテルを貼ることが許される人間と許されない人間がいるだけだということ。 “それ” は本能に根差した自然な行動で、だからこそ爆豪にいじめっ子というレッテルが課されることも当然だった。

そして、推定無罪とやらがどんなに軽い言葉かなど、子供ですら知っている。 “疑われたら終わり” など、誰でも感じていることだ。

(いえ、私でさえ爆豪ちゃんを信じていないのかも知れないわ。彼はそんなことをする人間ではないと思っっている——けど、彼が真犯人なんだと聞けば、心のどこかで納得してしまうわ)

白黒つける、なんて言葉があるけれど。他人と付き合えば分かるはず、世の中に白黒なんてなくて、黒っぽい灰色と白っぽい灰色があるだけだ。——言ってしまうえば8割がた信じているということは、逆に言えば二割は信じていないことになる。土台、信じ切るなど無理な話だ。相手はただのクラスメイトにすぎないのだから。

(嫌ね、この空気……)

もちろん、蛙吹は白黒についての観点など持っていない。別に社会学者でも心理の専門家でもないのだ。ただ、本人の察しの良さから薄々と気づいてしまっただけだ。

——これが悪循環であると。

誰もが声にしなくても気づいている。空気がよどんでいる。球磨川が転校してくる前の和気あいあいとした雰囲気なくなっている。……着実に悪くなっている。そして悪くなり続けている。

『え？ うわっ！ 気持ち悪！』

球磨川が自分の下履きを放り出す。中にはミミズが何匹ものたくっっていた。

『どうしたんだ、球磨川君！ これは、酷いことをするな』

飯田がどこからともなくやってくる。その面倒見の良さから球磨川と一番絡んでいた。

『あーあ、ホントいやになるよ。こんなこと、お母さんに言えやしない』

「む、確かにご母堂に相談するわけにもいかないな。男として」

球磨川は外でミミズを捨ててくる。この程度はもう慣れたものだ。『一体僕に何の恨みがあるんだか』

「先生方も調査してくれているらしいが。しかし、こんなこと栄えある雄英学園の一員として恥ずべき行為だ！ 犯人には一刻も早く名乗り出ていただきたい！」

と、憤慨しながら球磨川に使い捨ての除菌シートを渡す。

『でも、飯田君は本当に面倒見がいいね。ヒーローみたいだよ』

「はは。そう言われて悪い気はしないな。ただ、僕は前に少し〃やらかして〃しまつてね。その誉め言葉を受け取るにふさわしい人間であるかどうかを自問せざるを得ない」

『いや、誉めてるんだから素直に受け取ればいいじゃん』

飯田は一瞬、信じられないものを見る目になって——嘔き出した。

「はは。あつはつはつは！いや、そうだな！ 誉め言葉なんだから素直に受け取っておけばよかったな！ こちらこそ礼を言うよ、最近事件が続いてそんなことさえ忘れていたよ」

彼は真面目過ぎて妥協を許さないとこころがあるのだ。それは人を寄せ付けないストイックさにつながるものだが、わずかに折れた。

頑固さが人との関わりで柔らかくなったといえはいいことに聞こえる。けれど忘れてはいけない。強烈な完璧主義者はその完璧さゆえに偉業を成し遂げる。他人の迷惑など考えもしない者が文明を発展させる。そう、あの理想に狂ったヒーロー殺しに言わせれば〃弱くなつた〃。

けれど〃これ〃は何かにつながるような強烈なシーンではない。ただの日常的一幕で記憶に埋もれる欠片以上にはなれない。けれど、布石にはなる。これから訪れるかもしれない決定的なシーンにおいて染みができた。

このように、球磨川は誰にも気づかれず、誰も気づかないような捻じれを仕込んでいた——無数に。

『うおっ！』

球磨川が扉を開けると同時に飛び上がる。もう毎朝のシーンとなつてしまった。

「……………」

強烈に射殺さんばかりの目で見つめる爆豪。もちろん、その視線の先は球磨川しかありえない。ヴィランすら裸足で逃げ出す眼光と陰で呼ばれている。

『……………そつと。そつと』

抜き差し差し足で歩く。いや、隠れるべき相手の爆豪は完全に気付いて睨みつけているのだが。

「災難だよな、球磨川。毎度のこととはいええ、何をあんなに睨みつけることがあるってんだよ、なあ?」

切島が声をかける。彼だけではなくクラス全員が球磨川に対しては同情的だ。というか、問題があるのは疑いの目を向けられてもなお球磨川に殺意の目を向ける爆豪だろう。

もちろん、口では違うと言うが……行動を見れば信じられたものではない。

『ううん……』

「おい、どうしたよ。腹でも痛いのか?」

『いや、慰めてもらうなら女子にしてほしいと思つてさ』

「球磨川、お前な……」

毒気を抜かれるが、切島が近づいた目的は球磨川が怪しいと思ったからだ。10割爆豪を信じていると胸を張って言えるのは彼くらいのものだろう。

そんな男気溢れる彼だからこそ、調査のために近づいた。シロだったなら、それはそれで友達になれるからよし! などと、被害者の近くでクロを捕まえてやるぜと意気込んでいた。

けれど、そんな努力は実らない。一生徒の力どころか、雄英の力を使っても犯人を見つけ出すことができなかつたのだ。言うまでもなく緑谷も真犯人を探していたのだが、同じことだ。

そして大事件が起こる。

カラスの死骸が球磨川の机に突っ込まれていたのは発見した球磨川がさすがにたまらず叫んだ。

『うおおっ!! な、なんだこりゃ——ッ!』

机を倒して転げ落ちる。普段から結構オーバーリアクションの球磨川だが、さすがにこれは様子が違った。

「どうしたんだね、球磨川君。……っこれは!」

そう、カラスの死骸。ヒーローを指すからこそこういうものには弱かった。ヴィランは“倒す”。だが、目の前には無造作にその先——死体”が転がっていた。たかがカラスとはいえ、それでも生き物には違いない。それが死んでいる。

今までのお遊びとは比べ物にならない負の雰囲気教室を満ちす。

「犯人は、こんなものまで……ッ！」

「関係ない動物を手にかけるなんて、人として最低ですわ」

そんな声が聞こえる。

「待って。これ——焦げ跡？」

緑谷が目ざとく見つけた。彼は爆豪を信じたがっていて、だからこそ彼がやったのではないという証拠を見つけたかったのだが。

「デク、てめえデタラメ言うんじゃないやねえ！」

爆豪は反射的に怒鳴る。彼の明晰な頭脳は焦げ跡という言葉が自らに不利を招くことを瞬時に理解していた。焦げ跡、それは直感的に彼の個性『ニトロ』を連想してしまうだろう。

「お、おい爆豪。まさか——」

けれど、不幸なのはさらにその先を考えられなかったことだ。“疑いの目は強まった”。いじめっ子そのままの言動の上、見ようによれば証拠が見つかって焦っているように見える。才能ゆえ、というのが完全に皮肉になっている。気づかないほど鈍ければよかったのに。せめて、気づくのが一瞬でも遅れていたら。

「違うー！俺じゃねえー！」

時として、真実に意味はない。どこかの誰かが言っていたように、大衆は本物ではなく“それっぽい”ものを求める。今の状況、とても爆豪が犯人“ぽい”。少し考えてみれば焦げ跡なんて証拠にはならないが、幅を利かすのは事実よりもうわざでしかない。よく考えなければ、その死骸は証拠として十分なインパクトを持つ。

「俺はやってねえ！ やってねえつつつてんだ！ その目はなんだ!？」

ええ、デク」

掴みかかる勢いでデクに詰め寄って。

「やめたまえ、爆豪君」

飯田がその腕をつかんで止める。

「……テメ——」

「やめなさい、あなたの立場が悪くなるだけよ」
蛙吹にも止められて。

「——ツチ」

舌打ちして、席に着く。カラスは回収され、事件は教師陣に取り上げられた。

だが……犯人は不明ということでは。こんなでかいものの入手経路が分からないはずがないと雄英関係者は意気込んだものだが、しかし結果としては何もわからなかったのだ。

無能と言ってしまうえば簡単だが、しかし今は社会の変革期が来て未だに安定してきたところ——そもそも調査の土台自体ができていない。マニユアルを作る前の試行錯誤する段階で、成功例を集めているような段階だ。誰もが個性を持っていなかった頃の科学調査レベルを期待するのは間違っている。

とはいえ、教師陣はもう爆豪は疑っていない。彼はマークされていた。悲しいことに教師陣は爆豪を疑わざるを得なかったのだ。そして、その中でこれができるほどの計画性は彼にはないと判断された。まあ彼にとつては屈辱かもしれないが、そもそも生徒レベルで抜けるのは無理な警戒網だ。

——雄英関係者としてはまさに悪夢だ。ヴィラン連合に続きさらなる災難。

このままでは雄英の雰囲気は悪くなる。それは生徒の成績だけではなく、当校の評判まで落とすことになってしまうだろう。マスコミには生徒を守れなかった結果とか好き勝手なことを言われてしまうかもしれない。

ゆえ、誰もが必死だ。もちろんクラスメートを守ろうとするヒーローの卵たちも。教師をやっているヒーローも。なのに、犯人は見つからない。

……ただそこには被害者がいるだけだ。

第9旋回 いじめの真実

——そして、一週間。

「球磨川君、ついてきてもらえないかな？ 真犯人がわかったんだ」
そう、緑谷出久が切り出した。いじめ事件の真相は誰もが追っついて、最初にたどり着いたのが彼だった。

『……へえ。すごいね、緑谷君。頭いいんだ』

へらへら笑う球磨川の腕は包帯で吊られている。いじめは激しさを増し、ついには階段から落とされてけがをすることでエスカレートしていた。

「それでもないけど——でも、確かにこの事件の真相は難しいかもしれない。発想の転換が必要になるからね」

『それならなおさらだよ。オールマイトの後継者はやっぱり違うね』
へらりと、そんな言葉をねじ込んだ。No. 1 ヒーローのお気に入りになりやがって、という嫌味。蔓延する悪い空気がこんな嫌味まで簡単に言えるようにしてしまった。

「……ッ！ 僕は、そんなじゃないよ」

『そうかい？ みんな言ってるけどね。オールマイト先生は緑谷君をひいきしているって』

「と、とにかく来てくれるかな。ここじゃ言いづらいし」

『いや、ここで言うべきだよ。だって、こっそり解決するなら被害者に言うべきじゃない。吊るし上げみたいなことをして、他人の興味を煽るだけ煽るのはよくないと思うな』

正論、と言えるのかどうか。こんなこと、普通は言えない。まるで他人のあらをつけければそれでいいというような。

「——球磨川君、あなたたって人は」

緑谷は驚愕する。その言葉は球磨川自身が言うのだけはおかしいのだ。彼がつかんだ真相が正しければそのはずなのに。

『で、僕をいじめていた暗くて陰湿なヒーロー失格は誰なんだい？』
ぞわぞわと背筋に悪寒が走る。緑谷は今、まぎれもなく背中を向け

て逃げ出したいほどの恐怖に襲われていた。

(——でも、ここで背を向けちゃいけないんだ)

そして、我慢できなくなった他の生徒も真相がわかったならもったいつけるなど騒ぎ出す。教室にいるクラスメイトはむしろいつもより少ない……雰囲気が悪いからわざと遅刻ぎりぎりに来るクラスメイトも多いのだ。

「——まず疑われてたのはかっちゃんだけど、僕はそれは違うと思っただ」

それが始まり。かっちゃんはやっていないのに、なんで疑われなきやいけないんだと怒ったのが彼をほんの少しだけ他の皆より熱心にさせた。

『他ならぬ君自身がいじめられてたのに？　ねえ、いじめられっ子の緑谷君』

「だから、だよ。かっちゃんはあんなことしない。やるなら、絶対に正々堂々だ。こんな隠れていやがらせなんて絶対にしない。かっちゃんは正面から殴りに来るよ」

『それ、威張って言うこと？　殴られてたってことじゃん——虫けらみたいに』

「ごほん。それはともかく……僕はかっちゃんは違うと信じてる。だから、明らかにおかしいところに気づいたんだ」

『おかしい？　いじめはおかしくないのかな』

「……いや、茶々を入れないで黙っていてくれるかな球磨川君」

さすがにあらをつくばかりの言葉に流石の緑谷も“いいかげんにしやがれこの野郎”と思った。いや、確かに正論かもしれないけど。『やれやれ、そこまで言うなら緑谷ちゃんのために黙っていてあげよう。いじめを疑われている誰かさんとは違うからね』

とてつもなく恩着せがましいことと皮肉を同時に発する。

「誰のこと言ってるんだ、おらア！」

「悪いが君も黙っていてくれないだろうか、爆豪君。それで、おかしいところとはっ。」

飯田。クラスメイトの大半はまだ来ていないが、まじめな彼はいつ

も時間に大幅な余裕を持って来ていた。そして、爆豪もまた疑われているからこそいつも通りに行動するという意地ですでに来ていた。

「あ、うん飯田君ありがとう。おかしいのはカラスの事件だよ。あれ以降いじめが激化したけど——あれだけは“対象”が別だった」

「対象が別？ 入っていたのは球磨川君の机のはずだが」

「そうだね。でも、あれのせいで疑われる人がいたでしょう」

『ええと、爆豪君じゃないとすると轟君かな。お父さんにいじめられていたから炎を使ってヤンチャしてたんだよ、きつと』

ここでも球磨川はへらへらと滅茶苦茶なことを言い出す。もちろん、推測としては間違つてはいない。普通の放火事件だって、警察はまず発火能力者を調べる——爆豪や轟のような。

「確かに轟君も火を使えるよ。でもね、球磨川君。“それ”で疑われたのはかつちゃんだよ。だから、あの事件の本当の被害者は——」

「……ッそうか！ あの事件の本当の被害者は不当に疑われた爆豪君ともいえる——ッ！」

あの事件で爆豪が犯人だという空気が決定的なものとなった。生徒の多くは言わずとも彼が犯人だと確信してしまったのだ。教師陣の疑いは晴れたのと対照的に。そして教師がいくら違うと言おうとも、“真犯人は分かりません”では信じられるはずがない。

「そうなんだ、飯田君。カラスの事件だけは、被害を被つたのはかつちゃんだ。燃え後だけなら、マッチの一つもあれば無個性でも作れるんだから」

『へえ、面白い着眼点だね。でも、よくある捜査の攪乱じゃないの？』

ほら、自分が疑われないために爆豪君に罪を押し付けたのさ。そうすると火を使えない個性の人がやったってことに——何人いるのさ、それ』

「……球磨川君。おかしいのはまさにそのことなんだ」

そう、だから犯人に気づいた。それこそが決定的な過ち。疑いをそらそうとしたのなら、逆にそれをもって、そらす“前”の誰かを特定すれば犯人は分かるのだから。つまり自分から疑いをそらすために墓穴を掘った。

『誰かに罪を押し付けるのがおかしなこととは思わないけどね』

「でも、そんな必要はなかった。だって、あの時点で疑われている犯人はターゲットにされたかつちゃんだけなんだから。わざわざ押し付けるまでもなく、犯人が自身の疑いをそらす必要があったとは考えにくいんだ」

『じゃ、面白半分とか。きっと犯人は彼のことが気に入らなかったんだね。スカした態度で喧嘩を売り歩いて何様のつもりだって』

これも正論と呼べるだろう。だって、爆豪は体育祭の時に面と向かってそう言われたことがある。……球磨川は知らないはずだけだ。

「でも、疑いを逃れる人は一人だけいる。犯人と疑われてなくても、事件の中心にいて疑いをそらす必要のあった人物——」

『なるほど。では、犯人の名前を教えてもらおうじゃないか緑谷君。さあ、声高らかに発表したまえ』

大きな身振りで称えるような仕草をする。その気持ち悪さに緑谷は吐きそうになる。けれど——

(ヒーローは逃げない……ッ！)

だから、言葉に力を乗せる。ヴィランに立ち向かうように、堂々と。

「かつちゃんに並んで注目されていた人物。かつちゃんに冤罪を押し付けて嘲笑っていたのは、それは——君だ。球磨川君」

真実を突き付けた。

『……』

球磨川は気持ちの悪い薄気味笑いを浮かべて黙っている。

「君しか考えられないんだ。だって、そうじゃないとカラスの説明がつかない。それに被害者だから皆は君を無意識に犯人と結び付けられなかったけど——元々、君は全然こたえてなんかいなかったじゃないか。苦しみもせずへらへら笑っていた！」

『それは、経験からかな？』

「そうだよ、僕は苦しかった。でも君はいじめられているにしてはそれを何とも思っていない。なぜなら——君が自分でやっていたからだ！ カラスの死体を机に入れたのも！ 罍を仕掛けて腕を折った

のも！　すべて——君の犯行だ」

『……うーん。すごい説明だ。これが推理小説なら部屋から蹴り出されるぜ。なんとたつて証拠が何一つないんだから。君が虐められてどう思ったのか知らねえけどさ。僕はいじめられることには一言あつてね。これくらいじゃ眉も動かさないのさ』

推理小説だったら犯人がわめいて、コイツが犯人かと確信させるシーン。けれど球磨川は違った。反論でもなく——ただ探偵側の不備を指摘する。これは厳しい、だつて反論ならば潰すことができる。けれど、これはそういった類のものではない。9割犯人でも、日本の法律は逮捕できないのだ……10割でなければ。そこを突いている。「認めないつもり？　そもそも、いじめが始まったのだつて君が来てからだ。君が来る前は誰もいじめられてなんてなかった。それは、君が自分でやつていたことなら説明がつくじゃないか……！」

『そんなもの、偶然だよ』

けれど——球磨川のそれは言い逃れにしか聞こえない。“証拠を出せ”では反論にならないのは当たり前だろう。教室の空気は“何を適当にゴマかしてるんだ、真犯人”という疑いに染められていた。『そう、ただの偶然。ううん、僕が来る前はいじめがなかったなんて誰が言えるのさ。もしかして君は全知の個性でも持っているのかな？　いじめがなかったことを証明なんて、そんなことできるわけないだろう』

けれど、球磨川はへらへら笑っている。

『だから』

その笑みは、まるで奈落の底のような——

『僕は悪くない』

捻じ曲がるような過負荷^{マイナス}。オール・フォー・ワンのそれとは違う魔的な気配。悪ではなく、ただ純粹に悪影響を振りまくだけの……負完全。

「……なんで！」

『だつて、僕は悪くないから。被害者なんだぜ、僕はよ——』
「でも！」

『どうしてもって言うなら、証拠を出せよ。証拠をよ……証拠がなければ全部君の妄想でしかないだろ』

「……ッ！」

緑谷出久にはここまでだ。分析を得意とするタイプとはいえ、探偵でもなければ警察でもない。ヒーローをミステリーに出したところどころが限界だ。だが、ヒーローならば。

「なら、証拠があればいいのかい？」

ヒーローならば、仲間がいる。今は、頼れる先生か。

『オールマイト先生。いやですね、いじめですか？ ヒーキしてる子のためだからって、真実を捻じ曲げるなんて許されませんよ？』

「君に真実がどうのを言われるとはね」

『——やだな。かよわい一生徒を囲ってぼこぼこにするなんて』

「そうやって惑わすのが君の手管かな。なら、私はさっさと行ってしまおう。……これに見覚えはあるね？」

カラスの死体。

『もちろん。僕の机に入れてあったものですね？ まったく、犯人もひどいことをするものだよねえ。同じ人間として恥ずべき思いですよ』

この期に及んでぬけぬけと言つてのける。

「——君の指紋が検出された。指紋が残るような場所になかったのは流石だが、警察を舐めるなよ……若造！」

『なるほど』

球磨川は天を仰ぐ。

『ああ、そうですか——確かにそれなら証拠になりますね。あの時、それに触れられなかったのは失敗だったな。驚いたふりして掴んでおけばよかったかも』

一瞬だけ、表情が消えて。

『——また勝てなかった』

そう言う彼は、どこか救いを求める子供のように見えて。

「——球磨川君？」

一瞬で間違いのようにへらへらとした笑いが復活する。

『でも、やっぱり僕は悪くない。ねえ、オールマイト先生？ 今、なにか持ってますかねえ。僕には全然見えないなあ。証拠なんて本当にそこにあるんですかあ？』

目線がふらふらとゆれる。しかも滅茶苦茶なことを言い出した。誰もがそのカラスは見えているし、幻覚でもない。

「あるさ。ここに」

オールマイトは実物を掲げる。勝利のしるし。

『では、なくなってしまうたらどうでしょう？ 証拠がなければ犯人を証明することなどできはしない』

「まさか、球磨川禊。君は——」

『僕はあらゆるものをなかつたことにできる能力がある！ オールマイト先生も忘れたわけじゃないでしょう？ さあ、皆様。ご一緒に！』

It's all fiction!

最悪の過負荷、大嘘憑きが発動——

『……え？』

しなかつた。

「なるほど。君の力はやはり限界がある」

そのカラスの死骸はそこにある。消せなかつた。

『馬鹿な。なぜ消せない!? 確かに僕はカラスの死骸をなかつたことにしたはずなのに……!』

「球磨川君。実はね、“見る”だけで発動できる個性は少ないんだ。何かを飛ばしたり、触ることで因子を付着させたりすることが条件であることが多い。君の大嘘憑きはあらゆるものをなかつたことのできるそうだが、“触ったことすらない”カラスの死体は消すことができななんだね」

オールマイト。ワン・フォー・オールをなくしたとはいえ、平和の象徴の戦闘経験は健在である。個性をなくしたからヒーローじゃない？ そんな馬鹿な。なぜなら、彼こそがヒーローだ。

『……ッー!』

理解して、息をのむ。つまりは偽物だったから消せなかつた。本来ならただの死骸に偽物も何もないが、少なくともオールマイトの持つ

それは球磨川が触ったこともない『偽物』。本物は警察の証拠保管室にあつて、そのまま持ち出されていない。

「そう、これは私達が作った偽物だ。本物はまだ警察にあるよ。というか、証拠を持ち歩けるわけがないだろう」

そう、単純な事実。いや、推理小説では証拠をポンポン持ち出すのは割かしあることだが。それにしても普通は信用する相手だろうが証拠を外に持ち出させるはずがないだろう。金庫に入れておけば無くなるのだから。管理も楽だし。

『……そうか、僕の何の関わりもないただの死骸だから……！』

苦しむ顔。腕を折られたときですら、へらへらと笑うだけだったのに。何かが、球磨川の心と呼べなくもない何かに触れていた。そう、“理解されてしまった”。わずかな断片とはいえ、そのことが——
「無敵かと思われた君の大嘘憑き。けれど、万能というわけではないみたいだね」

ただの一面とはいえ『負完全』が理解されてしまった。それは彼の本質にひびを入れることに他ならない。理解不能、共感不可能こそが彼のパーソナリティであるがゆえ。

『——あは。あははははは。すごいですね、オールマイト先生。まさかそこまで見抜かれてしまうとは。本当に……すごい』

一瞬、割れた。仮面の向こうに隠された素顔——それが、少しだけ。「ありがとう。けれど、これは私だけの力ではないよ。……罪を認めしてくれるんだね？」

『つづ。あは——罪つて、何のことですか？』

けれど、それもすぐに消える。球磨川はへらへら笑いを取り戻して往生際悪く抵抗する。

「とぼけないでほしいな。君はいじめの主犯じゃないか」

『主犯？ そんなのおかしいですよ——だって、被害者がいないじゃないですか』

「——あ。君は、犯人であると同時に被害者だから」

『そう。靴にミミズを入れたのも、机にカラスの死骸を入れたのも、不注意で階段から落ちたのも！ すべては単なる冗談ですよ。ちよつ

としたイタズラです。被害者である僕自身は被害を主張しない。ほ
ら、いじめだつて色んな犯罪と同じで親告罪でしよう?』

「た、確かに……!」

犯罪というからには犯人と被害者が必要だ。だが、この場合は犯人
と被害者が同一人物。裁く以前の問題となつてしまふ。

「でも、かつちゃんは君のせいで疑われたじゃないか!」

「緑谷少年……!」

『はあ? いつ僕があいつが犯人だなんて言つたんだよ。他の人が勘
違いして言つてただけじゃないか。彼を犯人扱いして傷付けたのは
あくまで僕”以外”の誰かさだよ。悪いのはみんなだ。僕のせい
にするなよ』

「……でも、君がそうなるように仕組んだんじゃないか! 君のせい
で——」

『それでも、僕はやってない。だから、僕は悪くない』

「あああああああああ!」

「待て、緑谷少年」

ワン・フォー・オールの100%を発動しかけた緑谷の肩を掴んで
止める。

『やめてよね。今度は君が僕がいじめるつてわけかい? そうだ、
知ってるかな。親に虐められて育つた人間は、実の子供を虐めるらし
いぜ。なら、君はどうなるのかな緑谷君。友達に虐められた君は、友
達をどう扱う人間になるんだろう』

「……球磨川ア! かつちゃんを悪く言うな!」

「落ち着くんだ、緑谷少年。ヒーローは私情では動いてはならない!」
暴れだす緑谷をうまく抑える。増強系……フルカウルを使う彼を
無個性のオールマイトが。

『ねえ、それでしよう? オールマイト先生』

「いや、ここまでの騒ぎになっているのは事実。名誉棄損、公務執行妨
害くらいは確実に付けられる」

『それもどうでしょうね? いえ、逮捕するには十分な根拠でしょう
ね。でも、それつて銃刀法違反と同じく胸先三寸——カッターを持つ

て外出して、捕まる人間と捕まらない人間がいるように。所詮はそんなもの、どうとでもごまかせる。そして、僕にはお友達がいるんですよ』

「……ね」

オールマイトは口を塞ぐ。根津校長——脅されている彼がそちら側につくのなら、確かに立件するのは難しい。そして、校長の名前を口にすることも許されない。彼の側に寝返ったなど、生徒に知られるわけにはいかない。

『今回は僕の負けです。だから、お友達を頼ることにします。新しいお友達にね——』

結局、オールマイトと緑谷のコンビは勝利をつかんだことは事実だろう。この期に及んで球磨川が勝ったなどと思う人間は誰一人いない、球磨川本人とて敗北を認めている。

けれど、それでも。

“状況が良くなった”なんて欠片も思えないのはどういうわけなんだろう——

第10回 忍び寄る過負荷

『——やあ、お茶子ちゃん。お茶しない?』

そう言つて、球磨川は気持ち悪く笑つた。

「……へ?」

麗日お茶子も無警戒だったわけではない。いじめ事件の真相は学園中に知れ渡り、球磨川は学園の敵という認識が出来上がった。……にもかかわらずそれ以前と全く態度の変わらない球磨川に対して警戒を抱かない人間などいない。ヒーロー以前の人としての危機感の問題である。

『うん。悲しいけど、僕は嫌われちゃつたみたいだね。皆に無視されるのは階段から落ちるよりもこたえるよ』

まったく傷ついた様子のない顔で笑う。この段になれば気づかなかつた——彼の異様な雰囲気こそが学園を暗くしているのだと。というか、雄英学園は実はAクラス以外にも色々あるマンモス校だ、たった一つのクラスのいじめが学園全体にああまで悪影響を及ぼすはずがない。……球磨川こそが元凶だと、真相が明らかになることできるよう皆が気づいたのだ。

「……なんで?」

なぜ、ここにいるのか。麗日は球磨川のことをマークしていたわけではないが、二人きりになるのを許すほど愚かでもない。1対1になるような場面を避けるよう行動していたのに、と。

『おいおい、僕は君が一人でいたから声をかけたただけだぜ。別に、君の大事なあの人たちをどうにかしたわけじゃない』

「……ッ! デク君に何したの!?!」

一瞬で激昂する。あのとき、やりこめたのは彼だから恨みを買つていてもおかしくない——そう思つて。

『いや、言ってみただけだよ。けど、ふーん……』

「何が、おかしいの……」

球磨川が嫌らしく笑う。嫌な予感が止まらない。

『いや、君の大事な人って緑谷君なんだって、ね——』

「……あ。あなたって人は！」

失敗した、と思う。今この場では乙女の恥ずかしがりな感情よりも、ヒーローとしての義憤に燃えていた。何かするなら許さない、そんな思いを込めてにらみつける。

『いやいや、本当に緑谷君はどうだっついていいんだ。まあ、君みたいなかわいい子に想われてるっつてのは、ちよつと嫉妬することもないわけはないけど——』

「デク君には手を出さないで！」

構えを取る。触りたくも——というか相對したくもない気持ち悪さだが、好きな人のために勇気を奮い立たせる。

『もちろん、出さないさ。でも、皮肉だよねえ。僕じゃなくてほかならぬ君自身が愛する彼を窮地に陥れていただなんて、さ。ちよつと聞いたけど、腕とか足とかぐちやぐちの潰れたトマトになったんだっつて？』

「——へ？」

愕然とする。けれど、理解していた。この男が言うなら、それは本当だ。こいつは人を墮とすときは酷く真摯な男なのだ——

『ま、でももう安心だけだね。ヴィラン連合なら檻の中だからもう緑谷君には手を出せない』

「……あの、何の……こと……かな……」

けれど、やはり意味は分からない。——もはやヴィラン連合は過去の事件だ。それを、ここで引き合いに出されるとは。

『うん、ヴィラン連合の事件だよ。ほら、さ。僕の転校する前のことだけど、ワイドショーでたくさんやっていたから僕でも知ってるんだよ』

「いや……うん。それは、そうなんやろうけど」

それが今更何の関係が？ としか思えない。麗日、お茶子としては。それはAクラスの誰もが共通する思いだろう。だからこそ、球磨川は君だけは別だとあざ笑う。

『なんで、ってそりゃ——先生たちの探してた、内通者が君だからだ』

「え？ えええ？ ちょっと待つて。なんで、うちが——」

『もちろん、君が自覚してやってたことじゃない。悪いのは君のパパとママさ』

「父ちゃんとお母ちゃんが、何か——」

『第一の事件、これはマスコミに門を破られた件になるのかな。でも、これは関係がない——敵に転移の個性を持つヴィランがいた以上は内通者がいなくてもどうにでもなったよね』

『でもね、第二の事件USJ襲撃事件。これはオールマイイト先生が狙われていたのに、当の本人はいなかった。君も知らなかったよね』

けれど、こいつは転移能力者がいようが関係ない。もちろん盗聴を仕掛ける役には立つのだろう——けれど、そんなことをすれば尻尾を捕まえることができた。盗聴器を置いて行って、それを見逃すほど雄英は甘くない。だからこそ、残る手段は誰かに聞くしかない。

「それは……！」

『第三の事件、君は知っていただろう？ なんせ、当事者なんだから。詳細までは知らずとも、それでも襲撃をかけるには十分な情報はあった。なにせ、学園だからね——学園側は生徒に知らせる義務がある』

「でも……それで、うちの仕業だなんて——」

『そうだね。君以外のクラスメイトにもできた。けれど、君以外にそんなことする必要はない』

「うちにだってない！ そんな理由……」

大仰な手ぶりで球磨川が言う。悲惨な事実を、へらへら笑いながら。

『君、貧乏だろ？』

「それが、何の関係——」

『でも、この学園で馴染んでいる。それはなぜなんだろうね』

「え？ それは皆が優しいからに決まってる」

『あはは。それは絵にかいたようなプラスの発想だね。現実とかけ離れた考えだ。だって、貧乏はマイナスで^{マイナス}あつて^負変わる^目ことはない。その緑谷君とやらが優しいかなんて関係ないんだ』

『だって、君はマイナスだもの。裕福を^{プラス}恨んだことは、ないかもしれな

い。それでも……羨んだことはあるはずだ。君がプラスプラスに居られたいのはそれが原因だ。はじめでたまらないよねえ、貧乏な自分が。きらびやかな彼らに比べて、ボロを纏う自分はなんと浅ましいことか』
『だから、君は本来ならここプラスになじめるはずがない人間だ。影がある限り、光とまともにはつきあえない。向こうが気にしなくてもこちらが気にする——家柄を。そして裕福プラスさを。そして、それを見下すことなく自分と付き合う彼らの光を』

「それでも、お父ちゃんとお母ちゃんはやってない……！ 悪いことをできる人じゃないんや！」

『やっているなんて自覚は必要じゃないんだよ。君の両親は善良らしい。でも、取材と言われたら娘の近況を聞かれては答えてしまわないかな？ ……そう、善意で情報を漏らしてしまったと考えることはできるはずだ』

「……え。いや、それは。でも」

『ほら、やつぱり。それにき。ひよつとして雄英に入ってから、やけに羽振りがいいときがなかったかな』

「……あー」

それは普通に裕福な周りの人間であればごくささやかなこと。けれど、自分を雄英に入れてお金に困っている両親にはできないはずのちよつとした贅沢——

『心当たり、あるようだね？』

「でも、でも——」

『そんな人じゃない？ それなら騙せばいいだけじゃないか。先生たちが探していたのはあくまで内通者。だから期せずして情報を流出させてしまった可能性までは考えられなかった。包囲網に穴があったんだ』

「でも、でも、でも——」

否定する根拠がなかった。心当たりはあつて……そして否定する根拠であった善性も、そんなものはヴィランにとっては騙せばいいだけだ。確かにお茶子自身も両親はいつか騙されてしまうのではないかと心配していた。……それが、最悪の形で実現した。

貧乏……お茶子が慣れ親しんだそれ。だが、雄英に入ってからはそのれを感じたことがなかった。いや、もちろんそれでも裕福さの違いというのは八百万どころか小市民的な緑谷にすら感じるが。それでも、以前の悲惨なまでの貧乏生活を今思えば、違和感は確かにあった。

ちなみに緑谷は持ち家もあつて、母は専業主婦で、という——富豪では決していないが裕福な類の家である。そして、雄英ではそれが最低基準。上は果てしなく。……つまり、新聞紙の味を知っている彼女とは違うのだ。

『ねえ、お茶子ちゃん。この間、君を見かけたけど——きれいな服を着てたね?』

つぎはぎのないそれ。普通の家なら当然でも、外ならぬ麗日の家では……

「……うわ。あぁー」

そして、それが雄英の情報をヴィランに流していたからとするなら。しかも、ただ“騙されて”。お金をもらう? 取材だからと言われれば違和感は持たないだろう。もともと人の嘘を疑うような人格ではない。そして、機密と秘密の区別がつく人でもなかった。言っていないこと、悪いこと——その境界を理解できる人ではなかった。

『ねえ、お茶子ちゃん。考えてみてよ。悪いのは——君だ』

「……あ」

『君が雄英に入りたいただなんて分不相応なことを言ったからこうなったんだ。ご両親は悪くない。だって、君がここに来なければこんなことにはなつてなかったんだから。ヒーローになりたいだなんて、君みたいなやつがどうして夢をかなえられるだなんて思っちゃったんだい?』

呪わしい球磨川の過^{マイナス}負荷は伝播する。麗日の心に生まれた黒い染みが急速に膨張する。彼の禍々しい雰囲気^{マイナス}に当てられて正気が狂気へ落ちる。

「あああああああああああ!」

認めてしまった。彼女自身もそれが“真実”なのだ。球磨川が語ったことが事実なのだ。

『でも、僕はそんなお茶子ちゃんを許してあげるよ』

「……え？」

『真実を知れば先生は君の両親を罰するだろうね』

「そんな！」

『仕方ないだろう？ 気づかなかつたとはいえ、罪は罪だ。ヒーローが犯罪を隠すものじゃない。たとえば、望まぬものだったとしても、さ——』

「でも、お父ちゃんもお母ちゃんも悪くないのに……！」

『そうだね。悪くない。でもさ、それで納得するかな？ 世間が』
「……ッ！」

爆豪に関する報道、そして雄英の言われようを見ていればそんなものを信用などできるはずがなかった。間違いなく世間は両親を連合にヒーローを売ったヴィランとみなすだろう。貧乏な家がささやかな贅沢をできるだけのお金、別に大した金でもないのに。

『でも、大丈夫。黙っていてあげる。僕がなかったことにしてあげる。大丈夫さ、もう事件は終わったんだから気づく人なんていやしない』
「——あ」

そして、それは最悪の選択肢だ。もつとも、二つの選択肢はどちらも最悪。

罪を告発するなら、ヒーローとしての義務を果たしても両親を売ることになる。もちろんそれがヒーロー失格ということになるわけでもない。たとえば親でも悪ならば斬る、正義として間違っではない。それでも、やはり両親を裁くのは人の道に外れることだろう。

一方で両親をかばえばヒーローとしての道を踏み外すことになる。悪を裁いても傷付く人しかいない。誰も救えない——それでも、ヒーローとしては悪を“見なかったことにする”など許されてはいない。誰かを守るヒーロー、ではなく社会に認められるヒーローであるためには。

『——君のせいだ』

そして、お茶子のひび割れた心を球磨川が解体にかかる。

「……」

第11 巡回 過負荷、江迎 怒江

「ち、遅刻だー」

道路を爆走するのは緑谷。

「まったく、久しぶりに帰ったからって母さん起こしてくれないんだもん……」

ちよつと恨み言を。まあ自分で起きろと思わなくもないだろうが、彼も高校生。しかも実家に帰宅したばかりなのだから母親に甘えなくなるのもしようがない。なんといつても、久しぶりの実家。気を抜くに決まっている。

「——でも、まいったな。通学距離が延びちやったなんて……まあ、寝坊した僕が悪いんだけどさ……」

フルカウル、使うか。とつぶやいて首を振る。まあ法的にもヒーロー的にもセーフの範囲だろうが、どうにも遅刻を免れるためだけに使うのは気が引けた。

そう、彼が寮生活から実家に戻ったせいで遅刻しかけているのは——これはもう当然ながらというべきか、球磨川のせいだった。

あの事件を受けては寮生活を続けさせるなどリスクでしかない。カモを一か所に集めるような愚行だ。もつとも、当の球磨川自身は根津校長のフラインプレーによりホテル生活をしていたわけだが。口八丁で寮は満杯だとかそういうことを言って遠ざけたのだ。それにも限界があるために、実家に戻すのは時間の問題だったわけだ。

生徒たちを実家に戻すこと自体は簡単だった。親御さんたちもヴィラン連合の事件が終わった以上、いつまでも実家から離れさせておくことに抵抗があったからむしろそれは歓迎された。なんといつても、彼らはまだ高校生なのだ。

もつとも、結果から言えば最悪な行動だったといえる。もちろん、後から結果を見て好き勝手言った場合のことだ。それこそ“後からならなんとでも言える”。けれど、やっぱり——それは失敗だっ

た。

「——え？」

「——え？」

曲がり角、人影が見えて。

「きゃあー」「うわあ」

ぶつかった。古典的といえれば、少女漫画にでもありがちな話——パ
ンでもくわえていたら完璧だった。まあ、緑谷の幸運、もしくはスケ
ベ度が低いために胸に突っ込む形にはならなかったのだが。

「ええ!? お、女の子——ごめんなさい!」

だから、ぶつかった相手が女の子だったとわかったときには赤面し
て慌てまくる。

「あいたーっ! ちょっと、あんた馬鹿じゃない!? なんで突っ込ん
でくんのよ!」

女の子のほうは怒る。まあそりやそうだ。

「本当にごめんなさい! 立てますか?」

手を差し伸べて——

「……え？」

それが、人生で初めてのことから女の子——江迎 怒江は驚いて
しまう。嫌われ者でなかったことがない彼女にとっては心ときめく
少女漫画の世界がリアルになったようなときめきで。

「……?」

心配させないよう、笑顔で。ヒーローの、なによりオールマイトの
教えとして安心させるための笑みを浮かべる緑谷。その姿はまるで
白馬に乗った王子様。

(ひよっとして、これが恋……?)

そんなことまで思ってしまったって、もう彼のことから目が離せない。

「あの、どうかしました?」

手を取って、立ち上がらせる。痛みが走ったような気がしたが、そ
れを気にするような緑谷ではなく。そういう性分だ、自己の怪我に関
心がほとんどない。

(あれ? そういえば、この子——緑谷出久? 球磨川さんの言っ

いたAクラスの！　そう、あの人は言っていた）

一方で、江迎の方は彼のことを知っていたことに気づく。

『緑谷出久はただの狂人だよ。エリートどころか、その本質はロウソクに向かつて飛ぶ夏の虫だ。彼は自分を壊すのが大好きだからねえ』
『だから、彼のことを気にする必要はないよ。取るに足らない、エリートになりたいだけの“普通”。いや、身の丈に合わないエリートの真似事をする凡人だ。どっちにしても、すぐに壊れてしまうさ』
『彼、あまりに弱弱しくてかわいそうだから』

『会ったら仲良くしてあげるといいよ』

（そう言っていた。仲良くしてあげたらいいって——応援してくれました。きつと私のこと応援してくれたんだ）

（だったら私、がんばらなきゃだ！）

決意を固めて。

「あ、あの！　出久くん！　私、江迎　怒江っていうんだけど！」

少女らしく、ほおを紅潮なんてさせて。

「子供っ！　子供は何人ほしい？」

言った。

「私は三人欲しいな。女の子がふたり、男の子がひとりね。名前は緑谷くんが決めてあげて。私ってあんまりネーミングセンスないから。えへへ、どっちに似ると思う？　私と緑谷くんの子供だったら、きつと男の子でも女の子でも可愛いよね。それで庭付きの白い家に住んで、大きな犬を飼うの。犬の名前くらいは私に決めさせてね。緑谷くんは犬派？　猫派？　私は断然犬派だけど、あ、でも、緑谷くんが猫の方が好きだっていうんなら、勿論猫を飼うことにしようよ。私、犬派は犬派だけれど動物ならなんでも好きだから。だけど一番好きなのは、勿論　緑谷くんなんだよ。緑谷くんが私のことを一番好きないように」

「そうだ、緑谷くんってどんな食べ物が好きなの？　どうしてそんなことを聞くのかって思うかもしれないけれど、やだ明日から私がずつと緑谷くんのお弁当を作ることになるんだから、というか明日から一生緑谷くんの口に入るものは全部私が作るんだから、やっぱり好みは

把握しておきたいじゃない。好き嫌いはよくないけれど、でも喜んでほしいって気持ちも本当だもんね。体液なんていれないから安心して。愛情はたっぷり入れるけどね。最初くらいは緑谷くんの好きなメニューで揃えたいって思うんだ。お礼なんていいのよ彼女が彼氏のお弁当を作るなんて当たり前のことなんだから。でもひとつだけお願い。私『あーん』ってするの、昔から憧れだったんだ。だから緑谷くん、明日のお昼には『あーん』ってさせてね。照れて逃げないでね。そんなことをされたら私傷ついちゃうもん。きつと立ち直れないわ。シヨックで緑谷くんを殺しちゃうかも。なーんて」

「それでね緑谷くん、怒らないで聞いてほしいんだけど私、中学生の頃に気になる男の子がいたんだ。ううん浮気とかじゃないのよ、緑谷くん以外に好きな男の子なんて一人もいないわ。ただ単にその子とは緑谷くんと出会う前に知り合ったというだけで、それに何もなかったんだから。今から思えばくだらない男だったわ。喋ったこともないし。喋らなくてよかったと本当に思うわ。だけどやっぱりこういうことは最初にちゃんとやっておかないと誤解を招くかもしれないじゃない。そういうのってとても悲しいと思うわ。愛し合う二人が勘違いで喧嘩になっちゃうなんてのはテレビドラマの世界だけで十分よ。もつとも私と緑谷くんは絶対にその後仲直りできるに決まってるけど、それでもね」

「緑谷くんはどう？ 今まで好きになった女の子とかいる？ いるわけないけどもでも無理やりした女の子くらいはいるよね。いてもいいんだよ全然責めるつもりなんかないもん。確かにちよつとはやだけど我慢するよそれくらい。だつてそれは私と出会う前の話だもんね？ 私と出会っちゃった今となつては他の女子なんて緑谷くんからすればその辺の石ころと何も変わらないに決まってるんだし。緑谷くんを私なんか独り占めしちゃうなんて他の女子に申し訳ない気もするけれどそれは仕方ないよね。恋愛ってそういうものだもん。緑谷くんが私を選んでくれたんだからそれはもうそういう運命なのよ決まりごとなのよ。他の女の子のためにも私は幸せにならなくちゃいけないわ。うんでもあまり堅いことは言わず緑谷くんも少し

くらいは他の女の子の相手をしてあげてもいいのよ。だって可哀想だもんね私ばかり幸せになったら。緑谷くんもそう思うでしょう？」

それを一息で言い切られた緑谷は――

「うん。そうだね！」

(つて、何を頷いてるんだ僕は――ツ！)

「この子、なんだかよくわからないけどヤバイぞ。知らないけど普通の人は違う。ヴィラン？　そういう気配もないし、こんなかわいらしい女の子なんて心当たりがないぞ。いや、でもヒーローじゃないから知ってる範囲は広くないし。でも、僕にわざわざ近づいてくるなんてヴィラン連合の関係者かと疑うこともできるけど、ヴィラン連合は壊滅したはずで僕なんかにかまっている暇はないよね。そんなことよりも組織の再編、そして捕まった幹部の救出が最優先なはずで。やっぱりヴィラン連合はあり得ない」

「なら、普通の女の子？　この子が？　いや、これは勘だけどあり得ない。初対面でこんな長いセリフを言い切るはずがないし、そもそも僕にプロポーズだなんて奇特なことをする女の子がいるはずがない。そんなことがあるとするなら轟君とかのはずだ。そういうえば、この子の着てる制服がこの辺のものじゃないぞ。じゃあどこかというの知らないけど、確実に近辺の高校にこんな制服はないはず。残る可能性は、残る……可能性は――球磨川、禊……ツ！　彼の関係者。なら、この気配にも納得がある。この圧倒的な、捻じ曲がるような気配――」

フルカウル……今度こそ、先生なら誰でも緑谷含む問題児どもに何度も言い聞かせたように――逃走を選び。

「つあー。あああああ！」

包丁を両足に突き立てられた。さすがのフルカウルも初動の前に潰されたら意味がない。

「なんで逃げるのよなんで逃げるのよさつき手を取ってくれたじゃない。あれって好きってことでしょあれって好きってことでしょ私のこと好きなんだよね。私たちはもう恋人同士なのでしょう？」

はいつくばった体勢の江迎が見上げてくる。その姿は恐怖でしかなかった。

「な、なにこれ——女の子に好かれてるのに全然うれしくない！」

「あんたは私を愛するために生まれてきたんだしあんたは私を愛するために生まれてきたんだし——私に出会ったあんたはもう何もしくないのよいいんだから」

「う、わあ——ひい！」

刺されていない方の足で蹴った。けれど、その蹴りにフルカウルは乗っていない。恐怖のあまりに集中力が切れてしまった。

「つきや！ 何？ もう——照れ隠し？」

だから、その蹴りは彼女の体を少し揺らしただけで終わった。

「おい、てめえ——」

そして、第三者が現れて。

「何よ、私と彼の逢瀬を邪魔しないで——」

江迎はそちらを向いて。

「デクに何してくれとんじや、てめえ！」

BOOOOM! 爆発。

「……っがー」

つぶれた声。確実にダメージが通った。

「か——かつちゃん!？」

現れたのは爆豪であった。

「はん。なんか変なのに絡まれてるみてえだな。おい、デク」

爆豪は粗野で短気——確かにそういう一面が目立つが同時にクレバーだ。一般人に向けて個性を向けて放つなど決してしない。直情的に口は動かしても、動きは完全に制御できている。つまりは有能なチンピラと言ってしまったもいいが。

だが、この場合は江迎はヴィランであるかは微妙。そもそもにして個性を使った攻撃はヒーロー仮免を持っていない現状では犯罪行為であることも分かっている。なのに攻撃を仕掛けてしまったのは。

(このアマ……ヤベエ心配がするぜ)

彼女の危険度を肌で感じているためだった。一般人ではありえな

いほどの禍々しさを彼の戦闘センスが嗅ぎ付けていた。

「おい、デク。手えどうした?」

「え? 痛っ。これ……腐って、る?」

緑谷は手を見る。治療は十分可能だが、痕が残りそうなほどの――腐敗。

「なるほどな。腐敗の個性か」

爆豪はちらりと見るだけで向き直る。

「あは。そんなプラスと一緒にしないでくださいよ。私の過負荷は無意味で 無関係で 無価値で――何より無責任☆ それが私たち過負荷ですから」

起き上がる。これこそ過負荷。目にしていたくもないという嫌悪感。

「はん。だからどうした? まとめてぶっ潰してやるよ」

だが、それは爆豪には通じない。

「私の荒廃^{ラフラフラレシニア}した腐花を爆弾くらいで何とかできるとは思わないでくださいね――」

それでも、足は震える。緑谷など、完全に戦意をくじかれている。もつとも、江迎はヴィランとは言えないために立ち向かったらそれこそヒーロー失格、個性無断使用の罪で将来を閉ざされていたかもしれないから幸か不幸か。

「か、かつちゃん――」

逃げよう、と袖を引く。

「……ち。この雑魚が」

睨み付けて、舌打ちをもう一つ。

「なんですか。諦めでもつきましたかあ?」

「あ? 馬鹿にすんなよ、右を見てみる」

「うん☆」

言われたのと逆に左を向いて。

「馬鹿が。敵の言うことを真に受けんじゃねえよ」

「……嘘か!」

距離を詰められた。わざわざ横を向いて隙を晒してくれたには突

く以外にない。不思議なことではない——過負荷はもともとひよわでかよわい……その表現が正しいかはともかく、ステータスが低いことには変わらない。その上で隙をつく。対応などできるわけがない。「くたばれ！」

けれど、常に不利なのがマイナスだ。敵の必殺技を食らう？ 当然だ。防ぐ？ そんなことができたなら、そいつはマイナスではない。だから。

「私の愛は負けない！」

選んだ選択肢は“耐える”だった。喰らってなお突っ込む、それを選択してしまったからこそ。

「残念だったな！ 『スタングレネード』」

爆発的な光と音に江迎の身体が強制的に停止させられる。意思とは関係ない身体の反射だ、ビビらずとも動きが止まる。

「てめえなんざ眼中にねえんだよ、くそ女！ 『爆速ターボ』」

そして、緑谷をひつつかんで逃亡に移る。そう、ここでは戦闘そのものが悪手だ。なぜなら、緑谷も爆豪も仮免を持っていない。ここで江迎を再起不能にして——それで？ ヒーローの道が絶たれるだけだ。

この事件を受けて爆豪は権力側、まあ先生サイドか警察かはたまた経営層かは知らないが、球磨川はそういうところに繋がりと見抜いていた。

“ だからこそ戦闘はできない”。

「……くそが！」

まあ、それでも感情の面では納得できるものでもないが。しかし、ここで逃走を選べるのは紛れもなく爆豪の強みだった。敵の狙いを嗅ぎつける戦闘センス、プロですら持っている者が少ないそれを自然と身に着けていた。

「か……かっちゃんか逃げるなんて——」

「ああ!? 俺は逃げちゃいねえ！ アレが罠だと見抜けもしねえボケにやわかんねえよ」

実際、あれは偶発的遭遇だったが彼にとっては罠ともいえた。あそ

ここで戦闘を回避したのは紛れもなく英断だった。あそこで戦闘したが最後、球磨川ならばその材料をどうにでもできたのだから。

「……ああ、それもそうか」

緑谷も納得する。そういうことであればわかりやすい。自分に惚れる女の子がいた、なんて別世界のような出来事よりも。

「——で、お前どうすんだ？」

「どうって……」

「ターゲットにされたろ、あのヴィランっぽいのに」

「ええ……と。ど——どうすればいいと思う？ かっちゃん」

「俺が知るか」

「だよねえー」

重い沈黙。やはり、これもまた何かを達成できたとも思えない。
ブルスウルトラ さらにむこうへとは裏腹に。

第12回 襲撃の過負荷

そして、放課後。いつもの日常——球磨川という異物は挟まっていた、それは常にプレッシャーを与えてくるけれども、それでも貴重な日常だ。友がいて、競い合う仲間がいる。それはうらかな春のように心を癒す貴重な瞬間。

……その時間は唐突に終わりを迎える。

「こんにちは☆ 今日皆さんに殺し合ってもらいます♡」

朝の女……江迎怒江が現れた。禍々しい雰囲気——過負荷^{マイナス}。その暴虐的な悼まじさが世界を侵食して、暖かな日常を薄汚い絶望に塗り替える。

「……てめえ、どういうつもりで——」

切島が叫ぶ。彼はまだ心が折れていない……この日々悪くなっていく空気の中でまだ空元気を出していた。他の皆の“学校生活など通過点に過ぎないからやりすぎせばいい”などという消極的な空気を換えようがんばることができている。

「ええ、仲間で争うのは悲しいことだものね。でも、仕方ないのよ。これはヒーローとして通らなければならぬ道……」

彼女はさも悲しそうに見えるように顔をうつむける——うつむいて見えないその顔には笑みが浮かんでいた。けれど、経験が浅い彼には気づけない。女性経験があるようなチャラチャラしたヒーローの卵はここにはおらず、悪と対峙した経験も少ない生徒たちに気づくことはできなかつた。

「通らなければならぬ道……だとツ!?」

その言葉に動きを止めて。一番後ろの席にいる球磨川がニヤリと笑って。その視線が周囲を睥睨する。動くかと思われたその瞬間。

「くだらんな、そいつはいいことを言っただけだから本番だろう」

包帯が球磨川を捕らえた。

『ぐ——相澤先生。あなたは、死んだはず……!』

さしもの球磨川も驚いた。……いや、驚いたように見せかけたの

か。どちらかわからない、しかし何かの思惑が隠されていることが明白なその白々しさ。捕らえた本人、相澤はその馬鹿馬鹿しさに不安を抑えることができないが——それでも影など一切見せず。そうとも、ヒーローが不安がつてどうして人々を安心させるなどできようか。

「いや、授業が終わったから職員室に帰っただけだからな」

油断なく。捕らえた？ 拘束した？ だからどうした。その程度でどうにかできるようならば、とつくにどうかできていた。油断なく構える——が、油断しないからと言ってその首を折れないのはヒーローの限界か。殺しはもちろん、駄目押しすらもできやしない。無抵抗を殴ることはできない欠点。^{プラス}

「……球磨川さん！ 今助けます……！」

ラフラフレシアが牙をむき。

「お前の個性もどきは接触しないと効果がないと緑谷から聞いている」

その過負荷を発言する手に一切触れず、一瞬で組み伏せた。そうとも、これがヒーロー。殺せない？ それがどうした、殺さずに無力化するからこそヒーローだ。

「……うそ。この、私が——」

悪くすれば自分の腕が折れるほど力を込めてあがいている。なのに、“自分に巻き付いた包帯に触ることすらできない”。触れたのなら、多少自分の肉が腐るのと引き換えに脱出できたのに。

「プロヒーローを甘く見るなよ小僧ども。おもしろ手品だけのさばることを許すほど俺たちはお人よしじゃない。なぜ、こんな博打に出た？ 実を言うとお前ら、戦闘が得意なわけじゃないだろう」

過負荷に頼る江迎と、個性を一つの手段としてしか利用しない相澤の実力の差だった。

『先生は——テトリスやりますか？』

球磨川はピンチだ。窮地のはず——増援を呼んだはずが、一瞬にして己ともども組み伏せられた。ただの悪人ならもう完全にあきらめてお縄につく頃合いだ。けれど球磨川はずっと薄気味の悪い笑みを張り付けている。まるで、全て計画通りと言っているような……

「暇つぶしの定番だな。連鎖をつなげて一気に消すのが合理的で、俺は好きだな」

『そうですか。僕はちよつと違いますね。僕はですね——ごちゃついている断片が一気に消える瞬間にこそ、心を奪われるんですよ。チマチマしたプレイなんて性に合わないんです』

「我慢が利かない奴だな。だから、切り替えたと」

『ええ、そういうわけです。実はですね……爆豪君を皆にいじめてもらって、心を壊してもらおうと思ったんですよ。そこまでいかなくても彼にヴィランになってもらうだけでも十分、雄英にヒーローを育てる資格はなくなります。あーあ、いい感じに集団いじめが発生してたと思ったのにな』

「……恐ろしい計画だな。だが爆豪は堕ちなかつたし、お前が言うほど空気も悪くない——そう、貴様が計画したほどにはな。これではまだ雄英を堕とすには足りないだろう?」

『はい。だから、面倒くさくなって——この方法はやめちゃいました』
へらりと笑う。自分で腕まで折って罪をかぶせた割にはあつさりとその作戦を諦めてしまった。普通は代償を払ったのならば取り返そうとあがいて失敗を重ねるものだが、気味が悪いくらいあつけなく全部放り投げてしまった。

「だとしたら典型的な失敗例だな。ちよつと盤面が悪くなつたらすぐに投げ出して突発的な行動に出る。ヴィランとしてはスタンダードだよ」

もつとも、それが無策だとは思えないのが球磨川の怖いところ。いや、考えというか——彼の行動すべてが回り回って周囲の人間すべてに災厄を及ぼすような。

『あはは、耳が痛いなあ——。ところで相澤先生。あなたは個性に頼り切ったヒーローじゃないって話ですけど……実は僕もオールフィクションなんて面白手品に頼ったことって意外と少ないですよ』

そう、オールマイトにやりこめられたあときも、能力だよりで良ければさつさとカラスを消せた。狙いを外すのに二度目はない。負け惜しみでも驚かせるくらいはできただろう。それをしなかつたの

は……単にそんな手オールフィクション品に重きを置いていないだけだ。

「拘束を消したところで、お前は能力を使うときに隙ができる。強大な能力を持つ者の宿命だな——狙いを定めるのに一瞬が必要なら、この距離で使わせはしない。攻撃を食らいながらも発動するなら更なる拘束を重ねるだけだ」

けれど、相澤先生の方だつて現場にはいなくても話を聞いた。推測をもとに対策を立てるくらいのことにはやっている。イレイザーヘッドは凡百の能力だよりのプロヒーローではないのだから。

『で、ところで先生。包帯を通して僕に触れていますね？ 見せてあげますよ、僕の持つもう一つの過負荷を——』

「……はったりだ」

球磨川がニタリと笑つて——

「っが！」

吹っ飛ばされた。球磨川ではない。どころか江迎ですらない——
第三者。

「甘いですね、相澤先生。そんなだから——」

机を投げ飛ばした。ただそれだけだが、拘束が解けてしまった。生徒を疑えないという心の隙。そして、過負荷に対して抹消の個性は意味がないから使っていなかった。そして、もう一つ。

「相澤先生でもすぐに対応はできませんか？ 私の過負荷マイナス化した無重力の個性——」

抹消で直前に個性を消しても意味がない。なぜなら、“それ”は能力を切ることよつて発動する必殺技……否、ただの暴力。麗日お茶子——ついにAクラス生徒が過負荷側として参戦した。

『マイナスと言うのは関係性が本質だ。仲間に引き込むのだから、立派な過負荷なんだよ。ま、名前なんてないけどね——』

そして、自由になった球磨川は歪み切った笑みを浮かべる。

「さあ、まだ行きますよ——」

麗日は椅子を投げる。——あんぐりと口を開けて、信じられないと目を見開いているだけの何もできない口田甲司に。まったく関係ないともいえる彼。もちろん、関係ないから狙ったのだ。別に彼が特別

相澤先生に気に入られているなんて事実もない。本当に手ごろだから狙っただけ。

「……え？ 僕……」

そんな哀れな犠牲者の彼は、誰にも聞こえない声で呟いて。ただ茫然と迫りくる凶器を見つめることしかできない。よりにもよってクラスメイトがなぜ？ と、疑問が渦巻く。状況がつかめなくてどんな顔をすればいいのかすらわからない……

「ぐあつ……ッ！」

そして、相澤先生に当たる。身を挺してかばった——無重力にしたものを投げるなんて使い方、今まで使っていなかった。できるできないで言えば可能だったが、制圧力よりも殺傷力が高いためにヒーローとして使うわけにはいかなかった技。

もちろん、当たりどころが悪ければ死に至ってもおかしくないのだ。無重力で高速で打ち出し、OFFにしてスピードをそのままに重さを取り戻した机は凶器と呼ぶには十分すぎる。

そして、それは——“必殺技”ではない。人を殴るときにはそれ以上で自分の心が痛むなどという言葉があるだろう、これは真逆。すべての責任を放り出して、“知ったことか”と嘲笑う暴力の本質。倒すも何も、それは偶然でしかない過負荷^{マイナス}。己の手で倒したという実感を何一つ得られない無責任の極致。

「……麗日、お前が何でそんなことしてるのか俺は知らねえ。だけど——そんなこと、二度とさせねえよ」

“凍り付いた”——轟焦凍、半冷半燃の個性。氷であらゆるものを床につなぎとめてしまえば、投げるものはなくなる。彼とてヒーローとしての誇りを持っている。そして、自分の個性は捕縛には最適……ならば使わないわけがなかった。

『轟君、君が父親と同じ道を志す理由なんか知らねえけどさ。だけど、そいつはさせないぜ』

氷が消えた。オールフィクション、さらに皮肉も忘れない球磨川。

「轟君、助けて！」

麗日が叫ぶ。彼のもとへ飛び込んだ。何言ってるんだ、コイツとしか

思えないような言葉。しかも手にはナイフ。＼助けて＼という言葉に轟は思考停止してしまつて彼女を氷で拘束どころか、ナイフから身をかばうことすらできやしない。

「――逃げろ轟！」

相澤先生が怒鳴る。けれど、大半のクラスメイトはやっぱり何もできなくて。

「ぞけんなー！」

爆破。爆豪がやった。この混沌とした状況で、相澤以外で状況判断というものをやっていた、ただ一人の生徒。

「つぐ、爆豪君か！」

無重力では爆破を防げない。壁にたたきつけられる。

「死ねや裏切者オ！」

「っあ！　が――」

追撃。過負荷相手に手加減は無用。気絶するまでぶん殴る――すぐに沸騰する精神回路、そしてその裏では冴えわたる戦闘センスが最適解を弾き出す。爆豪は原石としてすでに完成している。ゆえに地力が劣る麗日ではもはや打つ手がない。当たり前前に気絶して確保するまで殴られるだけだ。

「――舐めるなよガキども！　これで破ったつもりか！　死んでもこの拘束は外さねえぞ！」

相澤先生が雄々しく叫ぶ。キャラではない……が、こうでもしないと意識を保っていられない。彼の個性は防御力に全く寄与しない。その状態で10 kgはある机を叩きつけられた、骨の一本や二本は折れている。

《おやおや……これは》

「これで――詰みだ！」

血とともに言葉を吐いて。拘束をさらに強く。切り札であったはずの三人目すらも制圧は時間の問題。もはや、球磨川に未来はない。そう思われた――が。

『――あ』

彼の唇が紫色に染まる。顔色が土気色になる。

「……ッ！ 貴様と言う——マイナスが！」

思い切り腹を蹴りつけた。捕虜虐待じみたその光景にAクラス生徒は息をのむ。

『ひゅー……ひゅー……』

虫の息。誰が見ても末期だった。そう、主犯……球磨川禊は死ぬ。虫のように。

第13巡回 過負荷来襲

「——ち」

舌打ち一つ。わずかながら真実を悟った相澤。その吐き気のするような真実に悪寒が止まらない。……もつとも、それでさえ真実の断片に過ぎないのだが——

(毒を飲んだか)

球磨川が死にかけている状況はこういうことだった。蹴りつけたのも飲んだはずの毒を吐かせるため。虐待どころか治療行為なのだ——ドライアイの死んだ目がそんな善良な行為をやっているように見せないだけで。

『あー。うー』

うわごと。焦点が定まらない目。間違いなく球磨川がここで息絶える。そんな風に思わざるを得ない状況。ヒーローの生命力なら帰還は可能だろうが彼の体力のなさでは……

(……馬鹿な。なぜこんなことを——ッ！)

対応できるのは彼だけだ。いや、ここはヒーロー養成校、対応できるだけのプロヒーローは他にも何人かはあるが……逆に言えばその人以外の先生に來られても邪魔になるだけだ。

——こんな口封じの真似をするような悪意に満ちた凶悪ヴィランの相手など、相手できるような強靱な精神力を持ったプロは限られてしまう。

「病院の手配を……いや、江迎の処置が先か……!」

とにかく行動を起こす。こんな混迷にあって即応できるようなヒーローは彼くらいのものだ。ましてや、生徒など——騒ぐかうろつくかで邪魔にしかならない。

「……ういふ」

江迎がほほ笑んだ。彼女もまた死にかけだ。コイツも毒を飲んだかと思いつつ足を踏み出して……相澤の足が崩れ落ちる。

「——な、こっ?」

意味が分からない。目を盗んで歯に仕込んだ毒を飲み下すならまだしも……毒薬を盛られるようなヘマはしてないはず。そう思うが——視界が反転する。大きな音が響く。倒れた自分が机を蹴倒してしまったのだ、と後から認識して。

さらに机の倒れる音が連続する。人の倒れる音。絶望感とともに錆の浮いたような感覚がする首を無理やり回してそちらを見る。

生徒たちもまた……毒を受けていた。

(……毒ガスか！)

球磨川、そして江迎が毒を飲んだと思ったのは勘違いだった、吸っていたのだ。毒ガスを散布……やられたと思うしかない。

目を白黒させて、なんで自分が倒れているかさえ分からない有様で倒れている生徒たち。酩酊感、吐き気、悪寒、世界が回る——最悪なのが嘔吐だ。それを見抜いた自分と違い、生徒たちは何の覚悟もできていない。嘔吐してしまえば気道が詰まって、窒息死すら考えられる。

(だが、発生源はどこだ……？ 毒ガスなど、そうそう手に入るものでもないはず。そして、それを使わせるような隙など見せていないはず)

それが疑問。そもそも問題として——これは自爆だ。毒ガスが教室に満ちたことはどうでもいい……閉め切れば最近の建物はガスが充満するだけの気密性はある。少し漏れることはあるだろうが濃度が薄まるほどではない。逆に言えば幸運にも被害はこの教室でとどまるということだが。

だが、自爆……そんなものを選ぶ精神性がこの場合は問題となる。ちよつとやそつとの大物ヴィランでは選択肢に上げることすらできない悪意が過ぎた代物。使い捨ての顔も知らない下っ端じゃないのだ。ひとつ前の社会では宗教で“それ”をやらせたという話だが、それは一種の社会的狂気だろう。歴史が醸成し、宗教が火をくべ、国家単位で煮詰まった絶大な域に達した“悪意”。

ゆえ、ただの集団一つがそれだけの悪意を実行したとなれば——
(恐ろしい。恐ろしい奴らだ。ここで奴らを拘束しなければマズいこ

とになる……！)

ゆえに相澤は気力のみで物理的限界を超える。化学物質によって力の入らなくなった足を叱咤して無理やり立ち上がる。震える小鹿のような足、だがそもそも毒に侵された体で立ち上がることはできないはずなのに。

「球磨川——貴様はあの“ヴィラン連合”すら超える悪だと理解した。……潰す。絶対に、ここで——ッ！」

それを支えるのはもはや狂気とすら呼べる領域の決意。殺すことすらためらわない。この悪魔を社会から断絶させることができるのならば。

『あは。必死ですね、ねえ相澤先生——』

立ち上がる。虫の息だったはずなのに……なにも影響を受けていないかのように。そして、拘束の緩んだ江迎、相手の爆豪が倒れた麗日も立ち上がる。

「それがオールフィクションか……ッ！」

回復——だから毒ガス作戦ができた？ 最初から死ぬつもりがなかったから実行できただけ？ 安全は確保していたから実行できただけで、ならば脅威は薄い……

(そんなわけがあるか……ッ！ むしろ、危険は天井知らず。“知った”上で自爆作戦……！ そんなことをさせるだけのカリスマ。死柄木 弔は完成には程遠かった。だが、こいつは……ッ！)

仲間に自爆をさせるだけのカリスマ、それは絶対値で言えばオールマイトすら上回りかねない。様子を見れば騙していたなんてことはなく、覚悟を持って臨んでいたことは分かる。そんな団結力。

『あは。一転して窮地ですね。その有様じゃあ他人をかばうことすらできませんよね？』

へらへらと笑う球磨川の手には螺子が。明らかに倒れた生徒を狙っている。相澤はほとんど死にかけてと言ってもよく、押せば倒れそうになっているのにも関わらず。狙ったのは虫の息の、偶然近くにいただけのクラスメイトだ。

「貴様、どこまで——ッ！」

『やだな、どこまでなんて言われたら——最期までやつちやいたくなるじゃないか』

「やめろ！やるなら、俺を狙え！」

『立派ですね。そんな立派な人に手を上げられるはずないじゃないですか——』

うなりを上げる螺子が倒れ伏せる生徒を狙って。

「……やらせねえ」

螺子が氷に止められた。轟焦凍……彼が動けたのは単に身体強度の問題だ。幼いころからヒーローの訓練を受けていた彼は毒の苦しみの中でもわずかに個性を使えた。

『へえ、君誰だっけ？　すごいなあ、あこがれちゃうなあ。こんな、いつ誰が狙われてもおかしくないような状況で目立つなんて——まるでヒーローだね』

そして、彼がやったことは一目瞭然。細く伸びる氷の道が主を指し示す。そして、その一撃は最後のあがきのようなものなのだ。少し体が丈夫だから動けただけで、だから少し動いただけで当然のように気力を使い果たして動けなくなってしまう。

「轟君だよ。クラスメイトでしょ」

『そういえばそんな名前の奴もいたっけ。なんか燃えてるけど、これ建物燃えたりしないの？　麗日ちゃん』

「さあ？　知らないけど、それで燃えたのは見たことないな」

『へえ、そっちを使っていればなんとかあったのかもしれないね？』

ニタニタと笑う顔。そして、その言葉は轟の心を鋭く抉る。彼は個性と身体能力は強いがメンタルが弱い——少なくとも教師はそれが共通認識。実はその言に反論はいくらでもできる。というか、炎がこの状況で何の役に立つ？　毒ガスを燃やして無害化なんて連想ゲームじみたトンチキ、〈個性〉では不可能だ。

けれど——

「……………ううう……………！　うう——」

涙が落ちる。メンタルが弱い——良くも悪くも素直だから敵の言葉をまじめに受け取ってしまう。“氷一本でN.O.になる”という

決意にして現実逃避、緑谷の本気の言葉を聞いたことで改善の兆しは見せたものの、手がかり程度ではトラウマに直面したときには意味がない。

ああ、やはり炎がなければどうにもならないのか。それほどまでに俺は弱いのかと涙を流し——毒による気分の悪さで指先一本すら動かせやしない。動けるうちに炎を使っていればなんとかかなったかもしれない、そんな考えが毒のように心に侵食する。

炎を使ったところで、毒ガスが引火性だったら爆発して大惨事になっただけなのに。

「さよなら、ええと……思い出した。NO. 2ヒーロー、エンデヴァーの息子だったね。炎使つてないから忘れてたよ、君なんて。ええと——世間は彼のこと次期NO. 1だのと言ってるけど、息子を守り切ることもできない男じゃ2番すら危ういかもね」

覚えてるじゃないか。あの男の足を引っ張れるならそれもいいか、と一瞬思いかけて。それがさらなる自己嫌悪を引き起こす。轟は何もできない状況で無力さを嘆くしかない。限界を突破できるだけの気力があるわけもなく。

「させるものかー」

立っているのが奇跡の状況で相澤は立っている。けれど、だからと言つて“そこ”で立てるような強者^{プラス}にマイナスが配慮するはずもなく。

「ラフラフレシアアー！」

江迎の腐食の手が襲う。防御も何もかも、すべて腐り落ちてしまえと。

「邪魔はさせないよ」

さらには投げたロッカーによるバリケード。麗日ならば人の手には動かせないような重量物でも数十kmの速さで投げられる。5mはある荷物を満載した鉄の塊……江迎の腐食の手を避けられたとて、この馬鹿でかい鈍器は彼女ごと殴り殺す。

「——ッあああああー！」

絶望。もはやどうしようもない。万策尽きた相澤は吠える——も

はや気力による覚醒というバカげた手段でしかどうにもできない。しかし、ギャグマンガではないのだ……そんな都合のいい超常は個性社会にあってもありえない。

『堕ちろ。正義を謡う無力な秀才^{プラス}』

堕ちるときはすぐそこに。絶望は至近距離から顔を覗いている。もはやどうしようもないというやるせなさを噛み締めるしかなく

……

「……私が来た！」

静かな声が均衡を破った。

第14旋回 オールマイルト登場

『だが遅い……!』

よくある悪者のセオリー、人質を処分しようとしたところで声が響くと思わず手を止めてしまう——現れた敵に対応するわけでもなく驚いて、アホ面とともに隙をさらす。そんなお約束は知らぬとばかりに球磨川は螺子の速度を落とさない。

「まあ、君はそうだろうね」

だから、現れたオールマイルトは球磨川の持つ螺子を弾き飛ばした。

『つな!? 遠距離攻撃? 個性は失ったはずじゃ……!』

さらに窓ガラスが割れる音が連続する。ドアが大きく開かれた。これだけで毒ガスは瞬く間に換気されてしまう。毒ガスを無効化するのに、“無毒化”などといった大仰な個性など必要ない、ただ換気してしまえば毒は散って無害なレベルまで濃度は落ちる。

「はは。個性じゃないよ。ただ石を投げただけだ」

こともなげに言う。もつとも、球磨川が受けた攻撃はただ石を投げただけではなかった。まったくもって訳が分からないが、さすがはオールマイルトと言う他ない。“それ”が昔、武術などと呼ばれていた技であることはこの個性社会では誰にも見抜けない。

そう、それはただの技術だった。実践的武術ならどこにでもある技だった。しかし、そもそもバトルに関しては“個性をどう使うか”という話になるので話題に上がることすらない『それ』をオールマイルトが復活させた。

「……でも、ロッカーがある!」

「そちらも、何とかしといたよ」

空飛ぶロッカーは何も轢かずに黒板に突き刺さる。軌道を変えられた——無重力状態ならわずかな力でもできるが、まさか来る前から知っていたとでも? その手品の種が扉を開いた瞬間に状況を理解して適切に行動した、なんて単純ゆえの無理難題などと想像することもできない。

オールマイトがただ単に最初の一瞥で何が起きているか理解して最善の行動を取ったからこの状況があるだなど、敵どころか見物客にだって分からない。だって、常識的に考えて最善の行動を起こすなら考える時間が必要だ。緑谷を見れば分かるだろう、彼の分析能力は幾度となく戦況をヒーロー側に有利にしたが……考えを整理するため時間は無防備を晒していた。その一瞬があれば間に合わないはずだった。

これが“今”のオールマイトの戦い方。正義の象徴としての膨大な戦闘経験、己をNo. 1まで導いた生来の戦闘センスにより未来予知じみた戦術を実行できる。純粋な戦闘経験の積み重ねと磨き抜かれた戦闘センス——はたから見ればまるで魔法だ。

「——来て、くれた。オールマイト……！」

誰かが言った。

それがもたらすのは希望だけではない。空気が変わったただけで本当に状況は逆転されてしまった。今転がっている生徒の命を脅かしているのは実は球磨川よりも吐き気だ……幸いまだ吐いていないが、依然として吐しゃ物をのどに詰まらせて窒息死の可能性は十分ある。そして、“そう”なれば治療行為は難しい……動けるのは相澤一人で敵は三人、見逃してくれるほど甘くもなかった——今までは。

それが希望が見えたことで“気分がよくなった”。病は気からと言うように、効果は絶大だ。もちろん生徒を狙った攻撃も奴らはするだろうが——

「形勢逆転だ……！ ガキども」

相澤が睨み付ける。気力で立っている。足が震えている。けれど、毒ガスが無効化された以上はこの誇り高いヒーローは動く。——毒ガスの影響もなかったことにできるわけもないのに。

『あは。何かやり遂げられたようにお感じになっっているようですけど——いいんですか？ 毒ガスを無制限にばらまいて。100のため——に1を切り捨てるのは強者の特権でしょう』

毒ガスの中にはわずか一滴で何千人と殺せるレベルのものがあつた。それが漏れたとなれば学園どころか都市レベルの災害だ。

「心配はいらない。その江迎少女と言ったか。彼女の腐らせる個性……いや過負荷だったかな。それで空気を腐らせたんだね。ならば拡散してしまえば無毒化するよ。化学兵器ではないのだから」

「……っなんで！」

さすがに江迎も驚く。朝に緑谷に会った時に能力の一端を知られて、それが彼にまで伝わっているのは、まあ当然だろう。

しかし、それでもなお——その真実にたどり着くのは難しいはずだ。そもそも過負荷は理外の力、予測することすら無意味なはずなのに。

「……は？ 空気を腐らせるって、トンチですか」

そう、空気は腐らない。空気の主成分は窒素と酸素。あとはごくわずかに含まれる二酸化炭素など。それはただの気体だから何億年放置したところで変化しない。あくまで自然界における“腐る”とは餌となる炭化物を必要とする。

——そんなもの、都合よく空気中にあるはずなのに。

「まあ、それが個性と過負荷の違いなんだろう。君の個性でも消せないしね」

こともなげに言うが、巷で“先入観を捨てろ”とか気軽に言われるのはそれが無理だからだ。できっこないからこそ、我が物顔で“先入観があるから失敗するんだよ”と言える。失敗したから失敗したんだよ、みたいな意味のないアドバイスな故に使う場所を選ばない。聞いてしまえば簡単かもしれないが、思いつくのはほぼ不可能に近い——

「……ッ！」

相澤、イレイザーヘッドとしては「なんだ、その理論」としか思えない。自分の能力は異形系には通じない——ならば江迎のそれは何らかの異形としての個性と考えるのがこの個性社会にあっては当たり前というのに。

「さあ、やろうか。麗日少女にはヤンチャしたおしおきだ！」

——マッスルフォーム。絶大な威圧感が敵を襲う。そう、個性を使えなくなつたからと言って全てが無為に化すわけではない。これを

前にしてはオールマイトは依然と何ら変わっていないと思わざるを得ず……

「……うう」

麗日は目をそらす。叱られた子供の様に。

「——ち[♯] ちよつとした手品でお茶子ちゃんはともかく私まで騙せるなんて思わないでくださいね☆ 私は一人でプロヒーローくらい束でやつつけられちゃいますからあ——」

逆に江迎は駆け出す。

「中々イキがいいじゃないか。だが——」

「腐っちゃえ。元No. 1ヒーロー！」

その巨体をただなのでかい的としか思わない彼女が触れようとしたその瞬間。

「寝ていたまえ」

腹に拳が突き刺さっていた。全く見えなかった……否、超スピードではなかった。視界には映っていたはずなのに、全然反応できなかった。

「……」

その一瞬で江迎は完全に意識を断ち切られてしまった。オールマイトはそんな彼女を振り捨てることなく優しく床に寝かせる。

『まだオールマイトのヒーロー伝説は終わっていないってわけですか？』

球磨川は負の情感を煮込んだような、まさに“腐った”目で彼を見る。光^{プラス}など許さない、一切合切滅んでしまえと怨嗟を奏でる。

「さて。マスコミはもう終わりだって言ってたね。案外そうかもしれない——けれど、助けを求める人がいるのなら、私は手を差し伸べる。それは、私がヒーローであろうとなかろうと関係ない」

『“立派ですね。そんな光^{プラス}が僕は許せない。あなたみたいな人がいるから、”やればできる”などと勘違いをする人が出てくる。そいつらは自分でやることなど考えない。人は自分で頑張るほど高尚にできてない。あなたの言葉は、人の世に出れば”やらせればできる”などと押し付けに変わる——弱者を押し潰す強者の理論に』

「そこまでやって、何の意味が——」

オールフィクションは無敵の回復能力という一面もあるはずなのに、それを使わずに立ち上がる姿は痛ましく、そして何よりも気味が悪い……何か、重大な見落としをしているような。

むしろ、観客の方がオールマイトの方を止めたくなくなってきた頃。コン、と小さい音がした。誰もが息を飲む、殴打音を除けば静寂に満ちた空間だからよく響いた。

その正体を悟ったオールマイトは叫ぶ。

「……相澤君！ 生徒たちを捕まえろ！」

その声と同時に、教室が崩れ落ちた。江迎のラフラフレシア——そして、オールフィクションがまさか“気絶”までなかったことにできるとは、と驚愕とともに戦慄が走る。もうなんでもありだ……

「オールマイト……くそ！」

その中で相澤先生はできるだけのことを行う。持っていた拘束具で生徒の安全を確保する。危険なのは墜落、そして上から落ちる破片。救助に特化した個性でない以上は破片を受け止めるのは不可能だ。ゆえに生徒をまとめて、拘束具の端をどこかに繋いで落下速度を落とす。幸いハリウッド映画でもないのだ、落下距離はそれほどでもない。雄英は高層建築ではないのだから。少しスピードを緩めてやれば怪我もしない。

「……あとは私が！ テキサス・スマッシュ！」

瓦礫を砕いた。ワン・フォー・オール今だ健在といえればよかったのだが、今のオールマイトでは当たり前前に威力は劣る。相澤先生がまとめてくれた生徒たちの上に落ちる破片だけを砕く。

悲鳴——それだけのことをやっても全てが無事などあるわけがなく。災害現場じみた地獄が現出する。

幸い、二人の尽力によりリカバリーガールの協力を仰ぐ必要もない程度のけがに収まった。もちろん、“生徒は”の話だが。

「だが、逃した……か」

二人、生徒には見えないように暗い目をする。完膚なきまでに撃退した、と言える状況ではあるが——それでも「もつとやりようがあつ

たのでは「という思いが黒い炎のように胸を焼いた。

第15回 恐怖した者たち

その後、生徒たちは病院へと搬送された。幸いにも後遺症はなく、日帰りはできるが——すぐ治る体の傷とは裏腹に心の傷はとても深い……

だが、中には心の傷など全く感じさせられることなく苛立たし気に周囲を睥睨する生徒がいた。

「……ち」

つまらなそうな舌打ち。だが、それですら覇気に見えるほどに生徒たちの心は弱っている。悪態をつく相手もなく、ただ苛立ちを募らせていく彼……爆豪。

「あなたは——なんで、“そう”振舞っていられるの?」

蛙吹が声をかけた。彼女の傷は深く……それゆえにおちこんでいる他の生徒とは違う。始めから絶望を感じていたためにさらなる絶望に叩き落されようと、もう“慣れてる”。人間とはプラスにもマイナスにも慣れてしまう生物であるがゆえ。

そして、初めから立ち上がる気力をくじかれていた故に“立ち上がれない己の弱さ”を自覚して死にたくなることもない。それはもうすでに通り過ぎた道だ。

「ああ? てめえらこそ、何を諦めてやがる。江迎が使う腐敗の個性がいくら強かろうと、麗日の奴が個性をいくら強化しよう——対策はできんだろ。殺せない相手じゃねえ」

つまらなそうに言い返す。チンピラゆえのいさぎよさと言ったところか——マイナスのマイナスたる由縁、『向き合いたくもない気持ち悪さ』を無視して強さと言う一つの物差しで測る思考停止。これが案外過負荷にはまる。まっすぐ行つてぶっ飛ばすはよく効くのだ。

「……強いわね、爆豪ちゃん」

それがわかったからこそ蛙吹は憧憬とともに感心する。“ああ、すごいな”それが偽らざる感想——あんなものに向き合える強さを羨ましく思うと同時に、それはなんて悪夢だろうと背筋が寒くなる。

強さのみを理由とするなら、例えばオールマイトをその強さだけしか見ていないことになる。その想いや祈り……そう、言ってしまうば“災害救助”などに目を向けることもできない。それはとても悲しいことだと思つて。

「その強さの秘密、俺に教えてくれないか……？」

自身に理由なく、ただ個性と言う生まれによつて闇を抱える常闇踏陰がその鬱々とした会話に参加した。彼もまた闇に耐性がある一人。完全に諦めてしまったゆえ、ただ打ちひしがれるだけのその他Aクラスとは違つて行動することはできる。

「——は。そんな理由、ねえよ。“俺は俺だから強え”。そこに才能だの個性だのと言つた小賢しい理論なんて要らねえんだ。一つ言うなら、努力つてことだな……クズどもは努力は裏切らないとかほざくが、それは違え。考えろ、スマートにやれよ。努力するための努力ほど馬鹿らしいものはねえよ」

ただ言い切る。それができるのが彼の強さの本質であるのだが——それを彼が気付くことはない。

「……お前はお前だから強いか。なあ、爆豪——お前は……なんだ、その。言いにくいだが、本当にオールマイトになれるのかと思つているのか？」

「どういうことだよ、そりゃ」

「オールマイトはNo.1ヒーローだ。彼を超えるようなヒーローは現れないと世間は言う、俺もそう思う。いや、個性を失つた今は分からないが——だからと言って、今の彼を超えたからオールマイトを超えたかと言えばそういうことでもないだろう」

「……」

無言で聞く。あの戦う姿を見せられたとはいえ……やはり個性社会において育まれた先入観は消せやしない。個性を失つたオールマイトを軽んじる雰囲気は確かにあった。それで彼の偉業が色あせることはなくとも。

「全盛期のオールマイト。空を飛び、地を割り——あらゆるヴィランを叩き潰す。全ての民の希望の象徴……そんな彼を超えられると、本

気で君は言うのか？ ——子供の憧れでは済まされないのだぞ」

それは人類社会のゆがみと言えるだろう。偉大な先人がいる——だから目指すなどと言ってしまえば「お前ごときが身の程をわきまえるよ」と指をさして笑われる。超えられると思うことは一種の“不敬”なのだ。しかも、自分がどうのと言う類ではなく、無関係な他人が何も知らずに嘲笑うような。

「なるさ。俺がNo. 1だ」

迷いなく言い切ったその姿に。常闇、そして蛙吹は。

「……」

呆れるしかなかった。本気で言っているのは分かる。けれど、それは常識的に考えて世迷言と言ったものだろう。小学生がプロ野球選手だのアイドルだのになると夢を見ているのとは違うのだ。もう高校生——夢だけを見る時期は終わっている。

「俺はためえらみてえな雑魚とは違う。お前たちには無理でも、俺にはできるんだよ」

絶大なまでの自信。そこに理由はない……物心ついたときにはすでに“^{スペシャル}特別”で、今までも——そしてこれからも特別であることに疑いなどない。それは己の生き方を肯定し続ける^{プラス}強さ。

「……」強いわね”、爆豪ちゃん」

それは最初の言葉と同じ。けれど、意味は180度違ってしまっている。ヒーローとしての強さではなく、理解できない強さ。それは方向性が違ってもマイナスと同じ……”外れた”強さ。

「それが貴様の歩む道だと言うのか」

ゆえにこの会話に意味はない。爆豪に得ることは何一つなく、そして蛙吹と常闇は爆豪のそれを真似できず、してもいけない強さであると認識した。だからこの話は終わり。

爆豪は爆豪でしかなく。そして、蛙吹はその諦観を強めた。常闇もそれを参考にするには意味がないと見切った。ただ、常闇には気になることはあって——

「聞くことがねえなら俺は行くぞ」

もう用は済んだだろ？ ——と言わんばかりに背を向けて歩き出す爆

豪に常闇は声をかける。

「——切島はどうなのだ？ お前の言う強さは他人を必要しないものと理解した。だが、だからといって彼を見捨てていいのか。彼の友情は、真実……一方通行であったのか？ 答えろ、爆豪。他人は不要か？ 俺たちはいい。卒業したら忘れてもらって構わない。だが、あいつは」

「……あいつのことなんか知らねえ」

そのまま別の場所へ行ってしまう。まだ帰宅は許されてはいないが、辛気臭い場所のごめんだとばかりに振り返りもしない。

「……」

「常闇ちゃん？」

後姿を睨みつける常闇に蛙吹は理解できない感情を抱いて——それでも、何かが始まりもしない。ただただ後味の悪い砂を噛んだような苦さがずっと後を引いているだけだった。

そして、たつぷり30分は経ったころ爆豪はこそこそ戻ってきていた。

「……おい」

切島に声をかける。

「……」

だが、彼は無反応だ。他の生徒と同じくショックなら何やらで、鬱々と負のスパイラルが渦を巻いてひたすらにネガティブな方向に考えが行っている。一言でいうならそれは無駄だ。対策を考えることもなく、ただ己の無能を責めるのは楽だろうが……そんなものはただの自慰と変わりはない。

「おい」

もう一度言っつて缶を頬に押し付ける。

「——うひゃあー！」

変な声を上げた。

「大声出すな馬鹿。ほれ、受け取れ。前なんか奢ってくれただろ。借りは返した」

ひどくぶつきらぼうに、子どもがすねたみたいな態度である。

「……爆豪、お前——」

「バカやろう！ 俺はテメエを心配なんかしてねえからな！ 単に借りを返したただけだかなー！」

「——つく。ふふ。あはは——」

「何がおかしいんだ、テメエ！ ぶつ殺すぞ！」

「いや、お前はお前だなと思ってよ」

「意味わかんねえ。いつでも俺は俺だろうが」

本当に心底理解できないように言う爆豪に、切島はなんだか安心してしまつて——

「いつもの調子が出たんならもういい！ 俺はもう行くぜ」

「ああ、ありがとよ。爆豪」

「俺は何もしてねえよ」

正義では弱者マイナスに立ち向かえない。大多数と言う正義は少数の弱者マイノリティを踏み潰す、しかし“それ”マイナスを直接目にした時——その悼ましさプラスに立ち向かうことができなくなつてしまふ。

それを克服するには正義すらも光として超越するしかない。現にオールマイトが戦えているのはそのためだ。強迫観念とも言える、しかし明らかにそれを超克した信念、光の意思を彼は持っている。

けれど、もう一つ道があるのなら——今ここで爆豪と切島が描いたように“友のため”というプラスがあるのかもしれない。

第16 旋回 戦う気概を取り戻そうとする者たち

「——緑谷君。少し話せないか」

飯田が話しかけた。

「うん、僕で良ければ」

すでに毒は抜けている。それでも確認の意味もあつて帰宅できない緑谷はノートに敵の特徴を書き連ね、対策を考えていた。その手を止める。

「それは……」

「うん、対策を考えられないかなつて」

「——すごいな。アレを前にそんなことを考えられるなんて。さすがはあのオールマイトの後継者候補だ」

「……いや、飯田君。それは違うから」

照れたように顔をうつむける。自慢したいことではあるが、そこは完全にオールマイトの言いつけを守ることが優先で、ばれてしまったかと焦るばかりだ。

「誤魔化す必要はないと思うがな。確かに羨ましい事実だが、それは君の手で捕まえたチャンスだろう？ いや、経緯は全く知らないが……それがコネとか権力だとかいうものでないことくらい、見ていれば分かるさ。オールマイトは自分の意思で君を選んだんだ。誇るといい」

「——いやいや、それは違うつて。あと、僕がオールマイトの後継者だなんておこがましいにもほどがあるつていうか……」

指をツンツンと落ち着かなげに、目はきよときよとと挙動不審だ。

「勘違いしないでほしい。オールマイトの後継者は君に譲るが——N O. 1の座まで譲った覚えはないのだから」

「……え？」

考えて。彼の言葉をやつと理解して。

「うん！ 僕も負けないよ！」

につこりとほほ笑んだ。

「——さて、話は変わるがあのヴィランたちの個性について話し合いたいのだが」

「あ、そうだね。誰かに話すことでまとまる考えもあるし」

未だに彼らはマイナスのそれを個性と勘違いしていた。もつとも、それも無理からぬこと——先入観と言うのはぬぐえないからこそ先入観だ。

「あの江迎と言う少女の個性は恐ろしかった。そして同時に意味が分からない——空気が腐ることはないと言うのは中学校で習う常識だ。そもそも、空気が腐るとはいつたいうことなんだ？」

「——それは、分からない。でも、きつと空気の中に腐るものがあつたんだと思う。それがとても少なくとも、ほんのわずかな量で人を死に至らしめる毒の個性と言うのもあるから」

「なるほど。個性に関しては君の独壇場だな。そうだ、匂いというものがあるだろう？ あれは微量な物質が飛散して鼻に入るから感じるらしい。つまり、匂いがあるところには窒素や二酸化炭素以外のなにがしかの物質が存在すると言うことであり」

「そうか！ その微量な物質が体内に取り込まれて毒の症状を発症したのか！ つだとしたら納得がいく——けど、そんなわずかなものに干渉できる個性なんて」

「だが、轟君の個性は空気中に存在するわずかな成分を氷として結晶させる。それを考えれば納得できないか？」

「なるほど。そう言った考えもあったね」

無論、全ては無駄だ。江迎が以前言ったようにマイナスは理解不能——起こった事実をあれこれ後付けすることはできる……けれど、それはどこまで行っても無関係なのだ。過負荷は過負荷、対策などできやしない。

「」

議論を重ねる。そうやって時間を無駄にする。なによりも球磨川の個性……マイナスについて何も触れないことが良い証。全てをなかつたことにする——などと、どうにかしようと考えてること自体が難

しい。

だって、そうだろう？ 人間は無駄な努力が大嫌いだ。あんなもの、どうしようもない——それが分かりきっているだけに考えたくもない。オールマイトはかの大嘘憑きを見切ろうとしたが、それは並大抵どころかヒーローであろうともできることではないのだから。

「そう言えば、敵に回った麗日君の個性が強くなっていたな」

ついにそれに触れてしまった。考えたくもない球磨川と違い、仲が良かったと思っていたクラスメイトとの決別。

「……それは」

うつむく。仲良くなれたと思ったのに——と後悔する。そこで他人を責めずに自分を責めるあたりが緑谷たる由縁だが、まったく何もわからないだけに己への責め方もどこかの的外している。

「あ、すまない。君は特に仲の良い様子だったから……」

「ううん、きつと……そう思っていたのは僕だけだから」

「それは——」

“それは”を繰り返すのは飯田の番だった。

これこそがマイナスと戦うと言うこと。正義を胸に抱いて悪と戦う——それはなんと気分がよく楽な戦いなのだろう。正しいからこそ、否……相手が“悪い”^{ヴィラン}だからこそ迷わない。では、相手が仲間^{プラス}だったなら？

「……」

胸に痛い沈黙が下りる。繰り返すが、悪い奴をぶっ飛ばすならなんと楽なことだろう。けれど、彼らは確かに弱くて、だからこそ悪いことをして——それは罪と言えるのだろうか？

いや、悪いことなのだ。

麗日お茶子もまた、あの襲撃に参加した。もはやヒーローどころか罪人でしかない——

「緑谷君、もし彼女が君の前に現れたとして——戦えるか？」

「……」

その問いに答えられない。緑谷が目指したのはオールマイトのよ

うに誰かを助けられるヒーロー。でも、彼に並び立つ存在はいない。彼のような偉大な存在になつてくると、関係者が関わってくるなら被害者としてしかありえない。“敵”というレベルではないのだ——あらゆるものが弱すぎて。本人の事情から見ればただの大間違いでも、これは他人から見たオールマイトの話だ。

だからこそ、友……もしくは仲間との死闘など“常識”の範囲外だ。オールマイトならこうするという指針が全く立たない。だって、オールマイトのそれは仲間であつても対等ではないとファン^{観客}は見る。だからこそ、沈黙するしかない。

「緑谷君。彼女はきつと、また僕たちの前に現れる。球磨川禊の配下として」

「……」

聞こえないふり……にも見えるが聞こえていないはずがない。飯田も聞いていることを前提に話を進める。

「球磨川禊を倒すにあたって、一番の障壁は彼が灰色ということだった。ヴィランとして認定できるか微妙な線で、実際に彼がヴィランであると認められることはなかった——今考えてみれば先生方もやりにくいようだったな」

二人とも純粹な性格だ。ゆえに球磨川が上層部と繋がりを持つていることなど想像もできない。とはいえ、悩む雰囲気くらいは分かるが。

「——しかし、今回のことは話が別だ。あのいじめ事件では罪が問えるほどではなかったが、Aクラス襲撃事件……言い訳も何もなく確実に黒。これでヒーローたちが大手を振って討伐できる」

「……」

確かにその通りである。球磨川の厄介なところは立場的には一般人と同等であつたところ——灰色だ。その灰色が黒になった以上は。

「緑谷君。僕は君は麗日君と戦う必要はないと思つている」

「……ッ！」

うつむいた顔を上げた。

「無論、それはこの僕も。Aクラスの皆もそうだ。プロヒーロー達が

何とかしてくれるはずだ。今日の事件を乗り切ったのだから、もう球磨川禊の方にも僕らに手を出す余裕なんてなくなるはずだ」

「そんな……」

どっちの意味だったのか。麗日お茶子が捕まえられてしまう方か。それとも事件の中心に関われなくなってしまったことだったのか。それは本人にもわからない。

「だから、僕たちはもう何もしないべきだ。先ほどのように情報をこね回してみるのはいい。おそらく、何らかの参考にはなるだろう。けど、もう首を突っ込むべきではない。君も、忘れるべきだ」

「忘れるだなんて！」

「一人落第した……それだけのことじゃないか。もともとからNo. 1ヒーローに皆でなることなどできはしない。ライバルが一人減ったと、そう思えば——」

肉のぶつかる音。

「……緑谷、君」

殴られた飯田は椅子から落ちる。

「そんなこと、できるわけじゃないじゃないか！ 麗日さんは僕たちの仲間だったんだ！ それを——」

「すまない、そんなつもりではなかった」

本気ですまなそうに言う飯田にそれ以上言うことはできなくなつて。

「う——」

「落ちて着ごう。時間はあるんだ。僕も、頭に血が上っていた」

「それは……僕のほうこそ、ゴメン。殴っちゃって」

「いや、それは僕が悪い。すまなかつた」

立ち上がって、90度の謝罪をする。

「……ごめん」

緑谷も、もう一度。

「……」

そして、後は会話は続かない。負のループ。これこそが球磨川の残した置き土産。いじめを自演している最中もそれだけをやっていた

わけではない——空気を捻じ曲げ、卵を腐らせる。
卵たちは孵化できないまま朽ちてゆく。球磨川禊の負完全に汚染
されて。

第17旋回 生徒会選挙

——生徒会選挙が行われる。

新生が入ってきて、前期の中間試験が行われた辺りの時期……相応しいといえばそうだし、別の時期でやる学校とてあるだろう。そして、それは新生が慣れたあたりにやろうなどというものではなく、単に学校側の都合だ。

そもそもが雄英においては生徒会長は生徒が選ぶものですら、ありはしない。

というか、基本的に雄英の生徒、しかも3年生となれば忙しいものだ。言ってしまうえば就活の時期である3年の時分に時間があるものなどそうはいない。ゆえに、というわけでもないが生徒会長の仕事はない。そもそもが学校なんでものはサービス業で、サービスを受ける^{生徒}側に運営側の仕事を回せるわけがない。

そう、生徒会長なんてものは雄英が選んだ“首席”と言うことだ。だからこそ、立候補の形式は取っていても学校側が選んだ生徒に立候補させて信任投票を問うような形になっている。

そして当然、一位を取ったのならご褒美があるのは当然だろう。何が“おいしい”のか。それは目立つことに他ならない。実際、プロヒーローというのは人気があるものをいう商売であるのだから。直截に言ってしまうえば、それは記者会見でプロになるにあたっての決意表明ができるという特典だ。

「皆さん！ 初めましての人は初めまして！ 違う人はこんにちは！ 僕の名前は通形ミリオと言うんだよね！」

全校生徒の前で演説を行う。生徒会長に続き、副会長、書記、会計、庶務——5人がそれぞれ発表する。

これは立候補の演説だからテレビ放映はされない。だからか、教師陣の中では球磨川も何かやらかしはしないだろう——仮にやるとしても、騒ぎになる前に終わると安心する雰囲気強い。過負荷の襲撃

事件……あれは強引にもみ消したが、消しきれるものではなかった。もう球磨川に影響力はほとんど残っていない。

——もつとも、それはイコールで“上”からの権力が弱まっていることも示す。シーソーではないのだ、“どっちも落ちた”結果として球磨川の権力はほとんど残っていない。上からではどうしようもない……学園として、そして卒業生の評判を考えたら最悪ともいえる警察の介入を除いては。

そして、ミリオはそんな上の権力闘争を知らず、しかし雄英の暗い雰囲気吹き飛ばそうと頑張る一人。

「——さて、僕はヒーローに絶対欠かせないと思っているものが一つあるんだよね」

一つ、息を吸い込む。注目を集めておいて。

「それこそ、POWERRRRR!」

する、と上着が落ちて同時にポージング。筋肉を見せつけるが……「いやいやパワーって言うんなら筋肉で上着破れよ」と空気をすかさずかき飛ばす——

「おや？ 上着がどつかいっちゃったんだよね」

なんて首をかしげるものだから……誰かが吹き出した。

それが連鎖するように伝わって行く。大爆笑とまでは行かなかったが、皆が唇に弧を描いている。暗いことばかりだからか、なんだか急にほっとしたような感触が広がっていく。

「——さすがだな」

「そうだね、やはり彼は素晴らしい。サーが気に入るのも分かる気がするよ」

オールマイトと相澤。オールマイトがいるのは当然だが、絶対安静のはずの身体で気を張っている相澤は誰よりも球磨川の危険性を分かっていた。

「後継者候補でしたっけ」

「はは。それはサーが言っただけだよ。でも、本当にいい子だ」

「ヒーローは敵を倒すだけの獣じゃない。人々を安心させることが第

一条件。知ってはいても、実践できる者は少ない」

「そして、それを行動で伝えることができる者もね。本当に、お手本としてこれ以上ないね」

ミリオの素晴らしい理解できる。だが——それだけに二人には球磨川が恐ろしい。輝く光が大きいほど漆黒の影は深くなる。影響力が落ちた？ 他の先生方はそれで安心してはいるようだが、そんなことでどうにかなる球磨川ではないと知っている。

『——異議あり。彼は生徒会長に……いいや、ヒーローには相応しくない』

ここに、極大の過負荷が堕ちる。無責任で無価値で無意味な笑みを浮かべながら、全てを台無しにする悪意の権化が舞台上上がる。

「……ッ！」

そして、ヒーローの欠点。先制攻撃はできない——テロリストに対して何もやっていない時点で攻撃して叩きのめすと言うことができない。このように、息を呑んで相手の出方をうかがうだけ……

『なぜなら彼は己の両親を殺している』

その衝撃的な言葉に生徒たちはざわついて——

『——と、いうのはもちろん冗談なんだけど』

後ろの波動ねじれ、天喰環が詰問する前にネタばらしをする。

『あはっ！ 今信じた馬鹿どのくらいいるー？ 駄目じゃないか、尊敬するべき偉大な先輩を疑うなんてさー』

その禍々しさに生徒たちは黙り込むことすらできない。蛇に睨まれた蛙の方がまだましだろう。これこそが本来の負完全、球磨川禊——爆豪をいじめているときの手加減していたそれとは違う。

「——君は、何を？」

ゆえにN.O. 1になると目されるミリオですら飲み込まれる。いくら実力が高くとも——実戦経験が少ない。いや、今現実としてN.O. 1になったエンデヴァーですら同じだ。なぜなら強大であろうとも、真に凶悪なヴィランなどAFOくらいのものであり……彼を倒したのはオールマイイトだ。だからこそ負の極致に対しては誰も免疫

がない。

『ミリオ君。駄目じゃないか、君はこの雄英に通う資格を持っていない』

『どういうことだい？』

『だって、君は無個性だから。知ってるかい——無個性にヒーローになる資格はないんだよ。努力とか、勝利とか……そんなものは全く関係ない。生まれで決まる大前提だろう？ 誰でも知っているんだ、“それ”がヒーローになれないことくらい』

「……………は？」

理解できない。いや、だって、ついさっき個性なら使ったではないか。透過の個性で上着をすり抜けさせた。それがなんだって無個性だなんて話になるのか。

「……球磨川禊！ 貴様ア！」

『おや？ あなたには分かりましたか、相澤先生。ええ、全ては僕の過負荷。そう——大嘘憑オールフイクンきで君の個性をなかつたことにした！』

「——え？」

ミリオは言われても呆然としたままだ。そもそも過負荷だなんて聞いたことがない。

「そこを動かすなよ。……殺してやる！」

『はは。駄目ですよ、ヒーローが殺すなんて言っちゃうなんてさあ。あ、それと他の先生方……すみませんが彼を抑えておいてくれます？』

ほら、暴漢に襲われる可哀そうな少年を見捨てるなんて“ヒーロー失格”ですよねえ』

相澤は取り押さえられる。というか、暴れてよいような体でもないのだ。簡単に、かつ優しく取り押さえられる。そもそも今の身体は激しい運動が、そのまま冗談ではなく死につながるのだから。

さらに言うならば、球磨川の発言は心配ではなくただの脅しだ。個性と言うのはアイデンティティそのものと言っていいほど大きな割合を占める重要な“身体機能”だ。しかも、それを活用して飯を食っているプロヒーローとなれば、もはや命よりも大事なものと言える。大体、仕事が命よりも大事なんて、成功者なら珍しいことではないの

だ。

彼の言うヒーロー失格とはつまり、「個性を消して無個性にしてやるよ」との脅しだと、気づかないような鈍いプロヒーローは雄英にはいない。個性を失えばヒーローではいられない。

『あは。でも、たった一人の候補者が資格を失つちやえば困りますよねえ』

歪んだ笑みを浮かべ。

『だから、代わりに僕がやってあげますよ。ほら、立候補者は他に居ませんし?』

生徒たちを睥睨する。もはや個性をなかったことにする大嘘憑きなど関係なく、彼の前に出ること自体が恐怖だ。正史でAFOに対して緑谷が立ち向かえなかったように、全校生徒が球磨川に対して立ち向かうことができない。

——否。

「なぜかは知らないけど、確かに僕は個性を失った。けれど！ ヒーローの資格がなくても！僕は依然としてルミリオンド！」

一步を踏み出した者が居た。

『おやおや、ヒーローでない君が人に拳を振るったら犯罪だぜ?』

「残念だったね。個性を振るって人を傷つけるんじゃないんだ。無個性なら大した罪じゃないよ！それに、君はヴィランなんだよね！」

『ヒーローじゃない? ああ、そうだね。後ろを見ない君は確かにヒーロー失格……ぐあー!』

殴り飛ばされた。あつけなく。

「——え?」

けれど、後ろを見てみると——そこにあつたのは怯える仲間の顔だった。

「……環? ねじれ?」

怯えて、顔を横に振っていた。

『——この僕を殴るなんて』

そして球磨川ははらはらと涙を流していた。

『なんて素晴らしいヒーローなんだ。意味の分からない能力を持つ凶

悪なヴィランに立ち向かうなんてことができるヒーローいるなんて
思いもしていなかった！ あのヒーロー殺し、ステイの主張は間違っ
ていた。なぜならここに真のヒーローがいるからだ！』

『ああ——もしかしたら僕はこんな風に僕を叱ってくれる人をずっと
待っていたのかもしれない』

『そう、僕の間違いを命がけで正してくれる人を心から待っていたん
だ』

『本当になんて嬉しいんだ——これで改心したぞ。ありがとう！』

本当に感動したように見えるが——だからこそ気味が悪い。背筋
が寒くなる。吐き気がする。 “なんだ、この言いようもない最悪は”
と目を覆いたくなる。あらゆる災禍の前にも恐れず人を助けに駆け
つけることのできるミリオですら。

『だから、この痛みの恨みはルミリオン君に迷惑をかけないように君
じゃなくて君の友達で晴らすとするね』

「…………ツ！」

後ろにいる二人の怯えが酷くなった。そして、候補者の残りの二人
は耐えられないとでもいうように目をそらしていた。

『——なんて、ウソウソ。冗談！ ねえ、仲良くしようよ。ほら、少年
漫画じゃ一発殴られた後にへらへら仲良くなるのはよくあることだ
ろう？』

手を差し伸べた。

「……………」

ミリオは自らの手を見つめる。殴られた直後に殴られた側が手を
差し伸べる？ それはどんな悪趣味な冗談だ——そいつは一切改心
なんてしていないのに。というか、ヴィランの改心などヒーローの仕
事ではない。

だが、その手を払えるか？

敵がただのヴィランで、そいつが自分の命を狙っているなら払え
た。恐怖はもちろんあるが、それを踏み越えてこそだ。だが、“それ
”が仲間の恐怖であるなら？ それは仲間の心を踏みにして先に
進むと言うことであり——

「——あ」

ゆえに進めない。行く先が自分の地獄ならよかった。だが、行った先にあるのは仲間の犠牲。それでも墮落というものを自分に許せるような男でもなく。

「ううう……！」

行くことも退くこともできずにその場にとどまるしかなくなった。

『さ、のいて』

ゆえにミリオは壇上から優しく押し出される。

『僕が——否』

どこからともなく4人が現れる。そのうちの二人は相澤とオールマイトにすら正体不明。蝶ヶ崎蛾々丸と志布志飛沫。そして言うまでもなく江迎怒江と麗日お茶子だった。

『僕たちが生徒会だ』

ここに凶悪極まる宣言をした。

第18旋回 予期せぬ一撃

『あ、そうだ。ヒーローじゃないミリオ先輩なんてどうでもいいや』
素晴らしいだの何だの言っておいて即座に否定する。彼が壇上に立つ——物理的に距離が離れているのに心が凍える。これが5人揃った過負荷の凶悪性。立ち向かいたくもなくなるような悼ましさの発露。

『いい機会だからマニフェストを発表しなきゃ!』

などとうそぶく。もはや彼が良いことを言うなどと思えるようなお花畑がいるはずもなく——体育館を覆うのは絶望以外にあるはずがない。

『えーと。まずは授業及び部活動の廃止』

『直立二足歩行の禁止』

『生徒間における会話の防止』

『衣服着用の厳罰化』

『手及び食器などを用いる飲食の取締まり』

『不純異性交遊の努力義務化』

『奉仕活動の無理強い』

『永久留年制度の試験的導入』

『以上八点の実現に向けて一生懸命頑張ることをここに誓います! みなさん応援して下さい!』

だが、これほどまでとは誰が想像できたか。思い描く最悪のさらにその下——負完全。多少の自負やポジティブなど誤差にしかならぬい闇の極致。

というか、そもそも生徒に校則を作る制度など存在しないものは生徒なら誰でも知っている。というか、新しい校則を作る道筋そのものが存在しないのだ。雄英は自由な校風……何か縛りを作るなら先生が個人的に強制する。

『何かありましたら遠慮せずにも何でも言ってください。24時間365日、誰の意見であろうとも無視させていただきます』

もちろん、これも皮肉……もしくは社会風刺とでも呼べるものだろう。ヒーローは人の話を聞かない。助けを求める声は聴いても、ああしろこうしろだのと言った意見は受け入れられない。「点数にならないことはやめろ」と言われて、人助けをやめる奴などヒーローではない。」……ッ……」

誰も、生徒も教師も言葉が出ない。こいつは本当に頭が終わっているのだと心の底から理解して——

「……………」

そう、黙るしかない。個性が消されると言うのが絶対の恐怖であるがゆえ。そしてもう一つ。ヒーローらしからぬことだろうが群集心理と言うやつだ。これだけいるのだから、誰かが何とかしてくれるだろうと言う責任の委譲。

「球磨川アア！ 貴様は本気で言ってるのか！ この雄英を終わらせるのか!？」

声。

『もちろん』

答えた。“ 答えてしまった”。声が出せたのは正義の発露ではなく、何とかできるなどと思ってしまった思い上がりのためであるがゆえ——この暗い絶望の中でも尻込みしなかった。

「かかった。止まれ！」

叫んだ。そう、“ 個性”だ。むしろ自らの個性に対する劣等感があるからこそ動けた。だがそれは自分の能力に対する過信というものだろう。忌むべき能力と置いていたからこそ、それを過大に評価する。どうにかできると思ってしまふ。それが銃にナイフで立ち向かうような愚行とも知らず。

彼は心操人使……彼の問いに答えた者は支配される。それこそが彼の恐ろしい個性。

『…………』

そして、球磨川は言われた通りに止まってしまふ。大嘘憑きの弱点——封印。死亡なら、すぐになかったことにできる。けれど、封印は違う。死亡はただの死亡だが、封印はRPGで言うところの石化や時間停止

などバリエーション豊か。なかつたことにする因果を見定めることが難しい。

『……』

だからこうして止まっている。もう首を飛ばしたくらいでは復活しているだけの時間は経っている。もちろん永遠に封印するのは無理だ——が、この選挙を収めるだけの時間は稼げる。と、思った……瞬間。

「しつかりしてくださいよ。球磨川先輩」

「ああ、エリートを皆殺すんだろ？ あんたはこんなところで終わるタマじゃねえだろ」

机に中身の詰まった肉を叩きつける音がする。そして、骨が折れる嫌な音。新顔の二人が球磨川の腕を折った上にその勢いのまま壇上に額を叩きつけた。常人なら死んでいた。けれど、このときばかりは“生きていた”。

『うん、世話かけちゃったみたいだね。ありがとう』

額が割れて血がとめどなく溢れる。腕がぶらんと揺れて完全に折れているのを主張する。それでも立つし、生きている。その不条理こそが球磨川だ——“スプラッタ”だから“死なないという逆説。生き返ってしまったら腕をぶらぶらさせながらしゃべれない、と言う頭のおかしくなるような虚言を現実にする。

『まったく、人を操るだなんて精神を疑うよ。君ほど人を人だと思わない人間は見たことがない。他人には心がないとでも思っているのかな。人間性が腐ってるんじゃないの？』

客観的に見れば仲間に腕を折られてへらへら笑ってる方が異常者だ。しかも、そいつは額から血を流すスプラッタ。どこからどう見てもそんなことを言えた筋合いではないことを平然と言っただけのける。

「……ひー」

だから、当然——心操は後ずさる。理解できない過負荷を前に、小鹿のように震える足でやつのことで立っている。

『ねえ、どんな気分？ 人を操る気分ってのはさあ。世界の頂点に立ったような気分がするのかい。人をゴミクズのように見下せるな

らそれはさぞ気分がいいことだろうねえ』

その吐き気のような冒流的な過負荷を前に。

「——わあああああ——」

逃げ出した。

『やれやれ。とんだ邪魔者もいたものだ。ああ、そうだ。彼みたいな人に迷惑をかける奴が居たら僕たちに相談してほしい。なぜなら、人に迷惑をかけるような輩をこらしめるのがヒーローなんだからねえ』
そう、彼のやったことは全て無駄。ダメージを与えたところで球磨川がどうにかなるわけでもなく、ただ無駄に過負荷の過負荷らしさを皆に伝えるという悪手……では“ない”。

「——雄〓鋭〓塾。塾則第五十九項、塾頭解任請求ニ関スル項目」

一人、声を上げた生徒。以前は過負荷に対して震えるしかなかった彼。彼が作った時間は無駄ではなかった。反撃の機会は訪れる。

『何を言っているのかな、緑谷君。というか、雄鋭塾って何さ?』

「この学園の前身となった雄鋭塾におけるリコールのルールだ。塾頭——つまり今でいう生徒会長に解職を請求する場合、塾頭側と請求側の決闘をもって次期塾頭を選出するという内容だ」

短絡的に考えるなら妙手と言うべきだろう。必ず負ける過負荷に對して決闘を挑むのは間違っていない。勝負に負けて歪みを植える——それが球磨川だ。ゆえに、一回で勝負を決められるのなら勝つのはヒーローだ。

「当時は防具を付けずに互いに日本刀を持って5つの役職を奪い合ったらしい。だから、それに準じる形での決闘を挑む。生徒会長になりたいのなら、僕を倒してからにしろ。球磨川禊——お前は一度、僕に負けているじゃないか」

そして、勝負は純粹に人間強度を競うもの。ここで陸上だのと一人で記録を作るタイプであれば楽だったのだが、そうはいかない。決闘とは、残酷な血の香りがするからこそ惹かれるものだ。

『……そんな文明開化以前に定められた野蛮な決まりごとが現代で通用すると思うの? 塾則なんて手続き上たまたま撤廃されてないっただけのルールでしょ? そもそもここは雄英じゃないか』

「……うぐ」

つまる。緑谷はそこまで頭がいいわけではなく——というか、この世界には居ない黒神めだかと緑谷だけでなく他の誰かを比べるのはかわいそうというものだろう。人間らしく、すぐに答えは出ない。

「塾則第五十九項には過去三度の適用実績、前例がある。そもそも、君だって生徒会長になる資格があるわけでもないだろう。確かに君はこの学生だが、慣例となっている指名を受けられたわけではない」
だからこそ飯田が援護する。仲間がいる。

『……オツケー！ なるほどオールマイトの後継者は違うね。まさかカビの生えた塾則まで押さえているとは恐れ入ったよ。というか、別に普通に投票して選挙とか別の手もあったと思うんだけどね』

そして、皮肉を忘れない球磨川だ。

「……あ」

そして、緑谷がそれを言わなかった理由は簡単だ。——思いつかなかった、それだけ。

『まあいいや。戦いたいっていうなら戦ってあげよう。いや、本当は嫌なんだけどね？ 戦いなんて野蛮なこと。痛い思いもするのも、させるのも心が痛むよ。けれど、君がそうしたいっていうなら付き合っ
てあげよう。いわゆるヒーローのお仕事は人を殴ることだからね』

「何とでも言うがいい。僕たちは悪に膝を屈することはない！」

飯田が叫ぶ。

「——テメエごときにビビるかよ、ボケが！」

今まで啖呵を切るタイミングが見つからなかった爆豪が親指で首をかき切るしぐさをする。

「うん、そうだね皆。——生徒会戦拳だ！」

そして、緑谷もまた啖呵を切る。これ以上好きにはさせないと決意を込めて。

第19 旋回 人吉瞳、参戦

「——貴様ら、とんでもないことをしてくれたな」

とある教室の一室で緑谷、飯田、爆豪の三人が正座させられていた。相澤の凶眼はもはや殺意の域にまで禍々しさを増している。

「え、ええと……でも、こいつらだつてよくやってくれたと思いますよ。だつて、あのままだつたら——」

切島がかばう。彼だけは“戦つてもいいかな”などと中途半端に思う——否、戦わねばならないと思う自分の心から目をそらすことをかろうじて堪えている。もはや“諦めている”他の生徒と違って。

「馬鹿を言うなよ、切島。お前もまとめて除籍処分にしてやろうか。確かにヒーローは危険地帯に突っ込むのが仕事だが、自殺志願者になつていいものじゃないんだよ。”それ”は自分ではなく仲間を殺すぞ」

この場合、やってやったのになどと思うことなく感謝すべきだろう。どうでもいいのなら怒りもしない——特攻どころかただの自殺行為に対してここまで“怒ってくれる”のだから。“他人の想いを汲む”なんて、誰もができていればヒーローに居場所はないが。

「……ッ！」

そして、生徒たちはその言葉の抜身のような本気にビビつてしまう。仲間の死、それを本気で“考えさせ”られ……

「まあまあ、相澤君。それくらいで。不甲斐ない大人に変わつて、よくやってくれたと思うよ、私は」

なだめるオールマイト。だが、生徒4人は「あんな危険なことをするなんて、きつちり叱りつけてやらねば」「まあまあ、オールマイトは褒めてやってください。あそこでやれなければヒーローとして終わっていた」「だが、それでも危険すぎる……!」「だから、俺がきつちり締めます」「それだと君が悪者に……」「飴と鞭です。合理的に行きましょう」などというやり取りがあつたことは知らない。

「だが、俺はお前たちで勝てるとは——いや、勝負に勝つことはできるかもな、そういう手合いだ。だが、本当の意味で倒すことなど……打

ち負かすことなどできはしない。勝利の代償を払い続けて自滅するだけだ」

ふう、とため息をついて“それ”を告げる。

「——終わりだよ、全て」

今度ばかりは本気どころか完全な諦観だ。その絶望感マイナスに生徒たちは息をすることすら忘れて——

「それは——やってみなければわかりません！」

緑谷が大声を出した。

「いえ、やらなくても分かるわね」

見知らぬ声。……女の子——そう聞こえる。

「……ああ!? ガキが何の用だよ！」

爆豪がキレた。単純にうつぷんが溜まっていたのが爆発しただけだ。特に何の意味もありはしない。

「いや、それはないだろう爆豪君。お嬢ちゃん、迷子かな？ 小学生が

学園に入ってくるようなイベントはなかったはずだが」

「——あらあら、元気のいい子たちね」

その女の子はにこにこ笑っている。無邪気に笑っているとしか見えないだろう——その無邪気さはただの偽装……実のところはサラリーマンのビジネススマイルとやらなら変わることはない。子供を診察するために身に着けた、“子供に共感させるレベルの無邪気さの偽装”でしかない。ゆえ、それを見破れる者など、ヒーロー多しと言えど相澤……イレイザーヘッドくらいのもだろう。

「まあ待て、その人は……」

「でも。ママ、口の悪い子は感心しないかなっ！」

ポシエツトからごそごそと何かを探って、取り出したと思ったら本人ごと姿が消える。

「……つむぐー！ ぐ——」

そして爆豪が口を物理的に閉じられた。目にも見えぬ早業……一瞬で拘束具を直接縫い上げた。ゆえに外すことなどできはしない、鍵などどこにもついていないのだから。

「……馬鹿な、早すぎる！ まさか“加速”の個性——」

「いや、それだと拘束具の説明がつかない。布……糸でできている!? ならば、ベストジーニストの“ファイバーマスター”みたいな繊維を操る系統の個性か……?」

「どちらも違う」

相澤がため息をつく。生徒が不甲斐ないとかではなく、“よくもまあ”というため息。ヒーローでなく個性すらない人間がこの戦闘力とは、と。

「そうよ、私は第二世代だもの。個性なんて持ってないわ」

そして、衝撃発言。二重の意味で。

「個性を持っていない……それであれだけの早業を!」

「待って、第二世代って、それ——お母さんと同じ年代の人!」

「初めまして! 人吉瞳、42歳です!」

ノったのか、ニコつと笑う。

「むぐ——もが——!」

「よ……よんじゆう、にさい——ツ!」

「そ、それって——おばさん!? 全然見えない!」

「み、緑谷君。それはさすがに失礼だろう」

「飯田君だつて驚いて……あ、いや。ごめんなさい」

「きちんと謝れる子はおばさん好きよ。それに、そんなに気にしなくてもいいわ」

「え……あの——」

空気が停まった。ところで。

「で、どうでしたか。人吉先生」

「——先生!」

「ああ、私は元心療外科医なのよね——元だから、普通に名前で呼んでくれればいいのにね。相澤君」

勤めていた箱庭病院が廃墟にされた後、彼女は生き残って……人知れず生きてきた彼女を相澤が引つ張り出してきた。

「人吉先生。あなたは勝率をどう予測しますか」

「もちろん、0よ」

ためらいなく言い放った。

「……ッ！」

純然たる驚きに息を呑む。対して切島は一人目を伏せた。

「断言するわ。このパーティで過負荷に挑むなんて格安自殺ツアーを組むようなものよ」

静まり返った。さしもの爆豪でさえ反論することなどできはしない。ヒーローにとってはヴィランは倒すべき敵に過ぎないが、精神科医にとっては患者だ。叩き潰して終わりのヒーローとは、向き合ってきた時間が違う。そこには確かに重みがあった。

「……けどよ。そんな言い方はねえんじやねえか。俺はともかく、こいつらは——その、諦めてなんかねえんだしよ」

他人事のような切島。実際に過負荷と向き合うことを真剣に考えていないような……けれど、それは当然のことだ。一般人というものが日々物事に真剣に当たっていると、できない自分は死ねばいいとまで思っているなんてことはありえない。“その他大勢”としては当たり前前の思考だ——他人事は。

「……いい子ね、切島君。でもね、それが命取りになるの。こと、過負荷との戦いにおいてはね」

重いため息をついて。

「そうね。なんて言えばいいのかしら、過負荷を相手にすると言うことは——そう、いたいけな女の子に生々しいセックスを見せつけるようなものなのよ」

——皆、引いた。

「あれらが見せつけてくるのは見なくてもいいもの。命を育むのは大切な行為だわ、早い遅いはあるとしても。……でも、過負荷は直面しなくていい現実を見せつける。それを考える必要なんてないの。真面目なほど壊れてしまう」

「だって——犠牲は、救われなかった人は必ず出る。ヒーローは、“それでも一人でも多く”と頑張るけれど、けれど誰もが見ない社会の深淵に直面したら壊れてしまう。人々が逃れられない現実で生きていけるのは、いつだって目を逸らしてきたからなのよ」

重い沈黙が落ちる。そこで、人吉瞳はお茶を一口飲んで。

「てつきり、過負荷の来襲があると思ったけれどなかったわね」と、軽い調子で漏らした。

「——そいつはどういうことだ!？」
噛みついてきたのは爆豪。

「君たちはあの過負荷の敵になったのよ？　なら、襲ってくるのは当然というものでしょう。ま、それを警戒して相澤君は少し離れた教室にあなたたちを呼んだみたいだけれど」

彼を見るところなづいた。

「あなたたちは4人。なら、2人消せばあちらの勝ち——違うかしら？」

過負荷と敵対した実感がわいてきたのか、顔を蒼くしている4人。
(そう、ここまで時間が経って襲撃がないと言うのはおそらく相澤君とオールマイトを警戒してのこと。あとはこの子たちが一人になった隙を狙うとかそういうことのはず——)

彼女は余裕そうな顔をしている。が、それはただの演技だ。自分が怖がる姿を見せると悪い方へ思考が誘導されてしまうから。しかしその内心は焦燥感に焦がされていた。

(問題はない。問題はない、はず。向こうの取りうる盤外戦術に対して対策は取っている。そう、過負荷^{マイナス}思考で考えなければ……!)

教師二人、そして元女医は生徒たちと教室に帰る。とりあえず、カバンを持ってこさせなければ帰らせることもできないから。

第20回 マイナスの戦略

教室に帰った彼らが見たのは血の海に沈むクラスメイト達だった。そこに立っている者らは一様に歪んだ笑顔で——そして、球磨川が口を開く。

『自分より強い敵と戦うにはどうしたらいいか考えたことはあるかな。もちろん、相手より強くなればいいだなんてトンチキはなしだ……だって、そんなの始めは手加減してたっただけの話じゃないか』
螺子から滴る血の雫が床に落ちて破裂する音がする。

『しかも、それが5回戦だとしたらどうだい。偶然に頼ってラッキーパンチが出てもそんなギャンブル性は回数を重ねるうちに均されてしまう。考えてみても、どうにも実力の高い方が有利らしい』

彼の着る学生服もまた、血に汚れて見るも無残な有様だ。

『じゃあ、どうしよう?』

なのに、その服には不思議と傷は何一つない。それは圧倒的な実力差による虐殺をどうしようもなく示唆してくる。

『——考えに考えて出た結論はこうだ。敵は四人なんだから、不戦勝の一勝を大事にしようって。まず一勝を得ることを考えなきゃ、だって僕らは弱いから』

血の凍るような緊張感。まるで出来の悪いホラー映画の世界にみせられているよう。現実感がどこか希薄なのは目をそらしたいからか。

『だから、これは君のせいなんだよ。考えなしに4人で5回戦に挑むものだから、これはもう5人目をそろえさせなくなる他ないじゃあないか。僕に他にどうしろって言うんだよ』

ああ、なんて悪い冗談だと現実逃避をしたくなる。倒れているのはクラスメイト達。寝食を共にし、笑い合った仲間たち——

『どう考えても、これ以外になかった。考えに、考えて——僕にしては珍しく10分も考えてたんだよ? あれ、ジャンプ読んでたっけ。まあ、いいや』

誰一人としてこの災厄を逃れた者はいない。呼び出された四人以外は例外なくここで血の海に沈んでいる。

『ともかく』

その中で、場違いなまでにへらへらした笑顔。当事者感のまるでない、誰かを助けるための笑顔とは真逆の――

『僕は悪くない』

その言いようのない過^{マイナス}負荷に戦慄した。

「……球磨川アアア！」

ワン・フォー・オール、フルカウル。緑谷が殴りかかる。

「あなたの相手は私だよ、緑谷君」

腐食の手、江迎が襲い掛かる。いくら隙を突いたうえの奇襲だとしても、緑谷はそれをどうにかするだけの反射神経は身に着けている。むしろ迎撃を考えて――しかし相手が見知った女子であることで躊躇する。結果は泥沼、足止めに引っかかって動けなくなる。

「……緑谷、君――ッ！」

「お、おい。こりゃ、どういうことだよ……ッ！」

飯田、そして切島はどうしても動きが遅くなる。それはよく言えば慎重と言うことだが――

「あなたたちの相手は私がしてあげる」

切島に声がかけられる。ナイフのギリリとした輝きが見えて、反射的に硬化を使う。その程度、できなくて何が雄英――だが、卵だ。

「……う、わー」

ナイフは刺さらない。けれど、その手が押し込まれる。摩擦が無くなったかのようにふんばりが意味をなさず、体重によるブレーキすらも無効。そう、これは無重力の個性。

「甘いよ。切島君の個性は知つとるから」

まるで巨人に投げられたかのように勢いよく射出される。このまま無重力の個性を切られたら、重力が復活してまともに壁に叩きつけられる。ゆえに。

「硬化を切ってくれ！ 切島君」

飯田が受け止める。もちろん、麗日は狙って飛ばしている。そして、切島もそんな飯田を信じて硬化を切る。切っていなければ飯田は戦闘続行は不可能な程度のダメージは喰らっていた。

「……大丈夫か」

「問題ない」

言いつつ顔をしかめる。人間大の岩球を喰らったわけではないとしても、湿布が欲しい程度のダメージは入った。

「すぐにおねんねさせてあげるよ。飯田君、切島君」

彼女、麗日お茶子は怪しい笑みを浮かべる。壊れかけたような、泣き出しそうな——そんな笑顔を。

「いいや。縛に着くのは君だ」

だから彼ら二人は決意する。目の前の敵が机を並べた相手であるものだから。

「これ以上、お前に誰も傷つけさせねえ」

絶対に救って見せる、と。

「……おやおや、私たちの相手は貴方がたですか。そちらの偉そうな教師面した人はさておき——もう片方は見覚えがあるような気がする」

片眼鏡と燕尾服。執事らしきいでたちに思えるが、その本質はまるで真逆。偉そうなものを目の仇にするという幼児性が服を着て歩いているような男。その笑顔はまるで責任感のないガキの残酷なそれだ。

「奇遇だな、蝶ヶ崎。実はあたしもだぜ」

対してこちらの女子は見る影もないほどに改造した制服を着ている。言うなればスケバンだろうが、服の方向性は仲良くつるんでいるように見えて真逆だ。もつとも、こちらは暴力性と言う幼児性をむき出しにしている。その笑顔はいかにも夜に学校に忍び込んで窓ガラスを叩き割りそうなそれだ。

——正体不明の二名の過負荷。対するは。

「過負荷だか何だろうが、これ以上好きにはさせせん」
笑顔の消えた相澤。

「さて、私は貴方たちみたいな生意気そうな面したガキなんて知らないけど」

優しいお姉さんのように見える笑顔。しかし、それもすべては上辺だけの“医者”。

「あなた偉そうですね。何様のつもりですか」

「はっは。相手があのイレイザーヘッドとか、かよわいあたしが勝てるわけねーじゃん。だから燃えるぜ。……来いやー!」

凶悪無比な二つの過負荷に、過負荷も、過負荷に対抗する個性も持たない二人が立ち向かう。

「死ねや、ボケナスウウー!」

爆破。爆破爆破爆破爆破——息もつかせぬ連続攻撃。驚くべきは、それでも倒れ伏す者たちに攻撃を当てていないことだろう。被害は行っているが、それも許容範囲……死ぬほどではない。

『つく。罪をかぶせられた憎しみを力に変えるなんて、さすがはヒー……ぐあつ!』

さすがの球磨川も皮肉を弄ぶことができない。爆破は物理的に酸素を燃やし尽くし、そして彼の喉を焼く。衝撃が身体を揺さぶって、肺の中の酸素を強制的に絞り出す。

「なかったことにする力だア!? ふざけんじゃねえ。なら、俺はてめえをぶっ殺し続けるだけだア!」

容赦なく苛烈に火傷を刻んでいく。過負荷に対峙するにあたり、最も厄介なのは“立ち向かう気にもならない”と言う気持ち悪さ。だが、爆豪はそんなものを気にしない。闇がどうだの社会がどうだの關係ない、強いのは俺だという自負だけが全てだ。

『いい気になるなよ。そうやって弱さを見ないのが、君の弱さマイナスなんだから』

死角を突く。実のところ、球磨川が真に頼りにするのは弱さを見抜く観察眼。いくら爆豪が生徒の中では完成形に近いと言っても、それは精神の話だ。戦闘スタイルは粗削り……球磨川ならいくらでも隙を見つけられる。だが

「——おらあ！」

ぶん殴る。爆豪の拳がめり込んで球磨川の頭をラグビーボールのように床に叩きつける。そうだったのは妨害があったからだ。

「悪いが、2対1だ。卑怯とは言わないだろう？」

オールマイトが横から球磨川の攻撃を逸らした——ただそれだけのこと。

『いや、言うけど。ずる——』

後はもう、爆破の連続。いくらでもある隙の内、球磨川が狙えるのは限られる。そのすべての行動はオールマイトが潰す。

どう考えても、球磨川が降参しないのがおかしい状況だった。

「——君は、どうして……！」

「どうかしましたかあ☆ そんな楽しそうな顔して」

やはり、ここでも江迎の腐食の手は外れまくる。というか、腐つても過負荷——本気でよける雄英生、しかも実戦経験豊富な緑谷に攻撃を当てることはできない。

「どうして、こんな……酷いことを！」

「どうして、だなんて変なことを聞くんですね。そんなこと聞く前に殴ってくる人がほとんどです……からあ！ あうっ」

恥も外聞もなくスカートがめくれ上がるのにもかかわらず果敢に突進して……結果、辺りの机にまともにぶつかったり、床の血に足を取られて転んで自爆ダメージばかりが積み重なる。

「分かり合うことはできないの……ッ!?!」

「あはは☆ あなたに私の何が分かるんですかあ。私のこと何も知らないくせに、分かり合おうとか言わないでくださいよ♫」

そして、初めて緑谷が反撃する。いくら痛みを気にしないようにしても、体の反射行動まで無くすことはできない。江迎の身体が打たれた衝撃に反応して勝手に丸くなる。……わずかに動きが止まる。

「知ってる」

だから、わずかにできた隙に言葉をねじ込んだ。

「……………」

「僕は、君があのととき本気で幸せになりたがってたって、知ってるんだ！ だから、君はそんなことしちゃいけない！」

その言葉は本気だ。敵を言葉でどうしようとか考えていない、本気で救うためだけの言葉。

「……」

江迎が反射行動が収まるよりもわずかに長い時間、動きが止まっていた。

「僕と一緒に来てほしい」

その差し出された手を腐食の手で払う。

「……わかったような気にならないでくださいよお。私たちは酷い目に遭ってきた。だから、他人をひどい目に遭わせるのが楽しいんです。皆、好きでしょ？ やり返すのつてさあ——」

顔に消えない傷跡を刻む手が伸びる。

「——う」

“それ”の痛みは先ほど知った。払われた手は腐食で焼けただけで激痛を発している。それに、いくら男で、しかもファッションとか興味のない緑谷と言えど二目とみられぬ顔で生活していく未来など、想像すらしたくない。

「わあああああ！」

女の子だから攻撃しなかった甘さが、ついに恐怖の前に振り切れた。目の前の恐ろしい何かを叩き潰す。

「あは♡ やつとやる気にな……った、つうぐー」

叩き込まれる攻撃。江迎の視界はグラグラ揺れて、ただでさえ当たらない攻撃の目測がさらにずれる。

「……こうなったら、もう意識を刈るしか——」

緑谷は嫌な気分を飲み下しながら拳を振るう。けれど、女の子の柔らかい身体に振るうそれは全力など出せなくて。無意識で手加減するがゆえに、決定的な一撃を繰り出せない。相手を気遣うがゆえに、ただ痛みを重ねて行くだけのリンチじみた拷問になってしまいういう皮肉。

「……ッ！」

もはや口を開くこともできなくなつて。なのに、立ち向かつてくる江迎。その虫じみた痙攣するあざだらけの体を引きずつて、無意味に何度も立ち向かうその姿は筆舌に尽くしがたく——ただひたすらに気持ちが悪かつた。

「ああ……！」

虫けらのように飛ばされて。

「うわ……！」

それでも体を引きずつてくる。何度も。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も——

「ああああああ——」

悪夢の光景の前に心が呑まれた。ついに、ワン・フォー・オールの制御が完全に外れて……100%の力が江迎に突き刺さり、ぴくりとすら動かなくなる。どす黒い血を大量に吐き出して倒れ伏す。

「——ひ——」

“ つい、やってしまった”。緑谷の心境を表すならそれで事足りる。女の子の肉を潰し、骨を折り、内臓までひしゃげさせた——生々しい肉の感触。しかも、自分の拳にはそれほど痛みはない。岩と豆腐、殴つた時にどちらが痛いかなど言うまでもなく、わざわざ個性で治すほどでもないダメージに収まつた。

一方、江迎が大量に吐き出した血はどす黒かつた。それは内臓まで損傷したことを示す。重症の中でもかなり重い傷だ。

「……ああ。ああああああああああ——」

その後は、何も覚えていない。後で聞いたことによると球磨川達は倒れた江迎を連れて逃げ出したらしい。

第21旋回 毒蛇の巣窟

「——凶化合宿、やってみる？」

集められた4人にかけられたのはそんな言葉。人間心理を知る人吉瞳にしてみれば、心を守る術に通じているなら、壊し方を知っているのも当然のこと。

「よくわからない人がよくわからないものを遺していったのよね——そのデータすらもう廃墟の中で消えているだろうけど」

やれやれと首を振る。もちろん、ここにその何者かが誰なのかを知っている人はいないけれど、彼女がよくわからないという者など、一体どんな“もの”なのだと思える。

「まあ、私ですら誰が何を考えてこんなものを作ったのかさっぱりわからないけど。それでも、精神外科医の私から見れば方向性くらいは分かる。過負荷に対抗できるような精神性の獲得……まあ、単なる拷問の一環かもしれないけど。知ってるかしら？ 社会がこうなる前は殴るとか歯を抜くとかの肉体的な苦痛よりも、精神的な苦痛を与える方へ拷問術が進化していったみたいなのよ」

まあ肉体に痕が残ると捕虜の扱い云々で大変なことになるからだろうけど。と、付け加える。有効性と言うのは“そのもの”よりもむしろ状況がモノを言うのはいつだって同じだ。ルールがあれば抜け道を見つけようとするのもまた同じ。今となっては個性があるからそんなことをする必要が薄いだけだ。

「——で、やる？ 私としてはもうこれくらいしか考え付かないわ。前回の戦いは撃退したように見えて、単に相手の方は目的を達成した後だっただけよ。今のままじゃほぼ全敗すると考えて間違いない」

そう、有効な“個性”の撃滅——確実な一勝よりもそちらを優先したのは間違いないと踏んでいた。試合である以上、過負荷はそれだけで不利だ……なぜなら、いつも負けるのが過負荷なのだから。

(ま、爆豪君の精神性なら試合形式でなら簡単に勝利を拾えるだろうけど、それは言わないでおくわ)

お茶を飲みながら言う彼女。だが、自分の力不足は先ほど体感したばかり。あのマイナスな戦略を見抜けなかったばかりだ。自分の推測が当たっているとも思えない。

「――受けます」

緑谷が言った。飯田も静かにうなづいている。爆豪は言わんでも尻込みなんざするかボケと反抗的な視線を投げかけている。

「……なら、最初の書記戦は棄権ね。単純に時間が足りないわ。4戦の中で3勝しなきゃならないけど、過負荷を相手にする以上はこっちの方が勝率は高いはずよ。丁度一人いないしね」

「……」

緑谷は神妙にうなづいて、爆豪は態度悪く舌打ちする。切島はそんな二人を心配していて、どこか他人事。

「――それは」

だが、飯田は。

「納得できません。彼らはそのために僕たちのクラスメイトを襲った……！ 奴らの思い通りになんかさせてなるものか……ッ！」

机の上を叩きはしないけども、その代わりに手を垂直に伸ばして直立する。

「でも、これが勝率が高い方法なの。それに、むしろ過負荷と言うのはそういう勇気や善性といったものを突いてくる。あなたの友情は綺麗だけど、奴らはそれを貶める」

「――それでも」

「大体5人そろってすらいないのに……」

「それでも、僕は嫌だ！ 僕が戦う！」

譲らない。決して。子供らしい直情さ？ 確かにそう言えるだろうが、それは違う。これは勇気と言うものだ。悪を許さない正義の心と言うのだ。

「あなた、本当に戦えるの？ 相手は――」

だが、正義の心があれば過負荷と戦えるかと言えばそうではない。奴らがよって立つのは暴力などではないのだから。暴力には立ち向かえても、過負荷と言うねじれに相對するには必要な資格はまた別

の——人でなしの素質だ。

「相手が恐ろしいことは知っている。けれど、我慢がならない。ここ
で引くようなら、僕にヒーローになる意味はないんだ！」

その正義の心は大人に言わせれば間違っではいるけども。

「飯田君」

緑谷が肩に手を置いて。

「任せるよ。後は、僕たちが2連勝する。そうすれば5人いないのな
んて関係ない。ね、かつちゃん」

「——うるせえ、糞デクが！ この俺が負けるわけねえだろうが！」

「勝って。勝って見せるから、この、力……で……？」

「どうしたんだ、緑谷君？」

「つか……えない……個性が——」

後で人吉先生に聞くとところによると、それはよくある奇病らしい。
奇病にしては発症率は高く、日本にも両手の指に勝る患者がいる。そ
して、それは増え続けていると聞いた。

トラウマの一種、だそうだ。普通はもつと幼児期に発症する。例え
ば、個性が暴走して母親を傷つけるなど——心的原因で使えなくなっ
てしまう。トラウマが原因と聞くともつといそうな気もするが、個性
は身体能力の一部なので完全に使用不能になるのは珍しいらしい。
トラウマで目が見えなくなる例などほとんどいないのと同じだ。

だが、この段に当たった個性使用不可……笑いごとではなかつ
た。過負荷のおぞましき能力には個性で対抗するしかないと言うの
に——

そして、庶務戦当日。

「それでは定刻になりましたので始めさせていただきます。
まずは皆様、ご多忙の中こうしてお集まりいただきありがとうございます
ます」

どうにも自分に目隠しをしている格好だが、実際には彼の眼は見え
ている。まあ、ヒーローによくあるかはわからない、意味があるか不
明の装束だ。

「わたくしめは僭越ながら今回の生徒会戦争を管理させていただく2年C組長者原融道と申す者にございます。ほんのひと夏の間ではございますが、どちら様もよろしくお願いいたします」

「この『平等』の個性にかけて公正な審判を進行いたす所存にはございますが、至らぬところがあれば遠慮なく仰ってください」

頭を下げた。

『んー。至らぬところねえ。いきなりそんなこと言われてもな——』

ペこりと頭を下げ返す緑谷に対して、球磨川は逆に上を向いて頭をポリポリかいている。どこまでも対照的なリーダーの姿だった。

『……ッ！』

そして、出し抜けに螺子を取り出し攻撃を仕掛け——

「これはどういった趣向でございますか？ 球磨川さま」

その螺子は長者原の指先に受け止められていた。

『いや、なに。君に資格があるか試してみただけなのさ。そして、不満なく合格だよ。よろしくね、長者原くん』

一つ頷いて視線を戻す。平等の個性——感性そのものがずれている。そのあたりがA組にいない理由なのかもしれない。それはともかく、彼は自らの命が危険に晒されようが友が地獄に堕ちようが関係なく、公正に戦争を進めていく。

「では、庶務戦を務めるお二方。前へ」

「僕だ」

意気揚々と飯田が前へ出る。

『僕だね』

ただ足を進めただけなのに、どこか薄気味が悪い——というか、普通はボスキャラは最後に出てくるのがお約束だろう。強烈な違和感、そして予測不能。

「——なぜ、貴様が!？」

『おいおい、相澤先生。僕は昔から庶務になるのが夢だったんだぜ？』

人の夢を馬鹿にするなよ』

「貴様に、夢などあるものか……!」

『酷い言い草だね。でも、そうかもしれない。僕には夢なんかなくて』

——だから夢を追いかけられるエリートに“それ”は恵まれてることなんだと、分かってもらいたいだけなのかもしれないね』

『どうせ、貴様のそれも嘘だろうが……!』

『うん。きつと、そうだね』

相澤と睨み合う球磨川の肩に手を乗せて振り向かせる。

「お前の相手はこの僕だ。最初に出てくれるなら好都合！ この僕が戦拳を終わらせてやる!」

『……いや、君が勝つても5回戦なんだから、ここで決着なんてつかないと思うんだけど』

「何とでも言うがいい！ さあ、長者原さん。ルールを教えてくださいませんか!」

自信に満ちた——という空元気に近い。元々人の話を聞かないところはあつたけれど。

「では最初に球磨川さまに試合形式を選んでいただきたく存じます。今回の選挙戦に当たり、十三の決闘法をご用意いたしました。球磨川さま、ここに伏せられた十三枚のカードより好きな一枚をお取りください」

「……待つてほしい! ルールを選ぶと言うことは、それは球磨川の側に余りにも有利すぎないか!? それでは、とても公平とは言えないと思うのだが!」

「なんでも先達は偉い、と限ったわけではないのですが——“一番”というのはそれだけで意味を持ちます。なので、両者を公平にするための枷と置いていただければ」

「なるほど。質問に答えていただきありがとうございます!」

『ええと。僕、選んでもいいのかな』

『お願いいたします』

『じゃあ已だ。縁起を担いで蛇で行こう』

「——では」

選ばれたカードの裏側、ルールは“蛇の巣”。

「庶務戦の形式は『毒蛇の巣窟』に決定いたしました。これは我々の用意した13の決闘法の中で最も残酷なルールで行われる選挙でござ

います」

そして、場所を移動する。

「それでは皆様、右手をご覧ください。縦10m、横10m、深さ10m。この深き闇こそが生徒会選挙庶務戦の舞台となりましてございます」

そこにあつたのは穴としか言えない。グラウンドに垂直に掘った巨大な穴だ。これだけ巨大な穴となれば、個性でも掘れはしまい。

「この穴の中で戦うのでしょうか!？」

ビシリと手が天を突く。

「どうしてもと仰るのであればそれも考慮いたしますが、飯田さま。しかし、わたくしめといたしましてはあまりお勧めできません」

そう言われて穴をのぞき込んで見ると。

「……な!? これは」

過負荷とは違う純粋な生理的嫌悪で足が下がる。

「これは……へつつ……蛇いっ!？」

「はい、蛇——正確にはトカゲ目クサリヘビ科のハブにございます。賢明なる皆様には申し上げるまでもありませんが猛毒の種類にございます」

「——この中で戦えと? 毒耐性の個性もないのに……」

こんなところで戦ったらすぐに死んでしまう。——それも、両方だ。おぞましい想像に身震いして。

「ええ、その件でございしますが実はこのリングはまだ未完成でして——おやおや? どうやら丁度良いタイミングの様ですよ」

何人もの黒服がでかい金網を運んできた。

「……金網、か——ッ!」

それがはめ込まれる。そう、はめ込まれたただけだ。固定するための螺子などどこにも見当たらない——

「決戦舞台『毒蛇の巣窟』。これにて完成にございます」

これで、完成。この、不安定なままのリングが——

「飯田さまと球磨川さまには穴の底ではなく、この金網の上にてバトルを行っていただくことになるわけでございますね」

「ルールを説明しますと飯田様がお巻きになっている仮章、それを奪えば球磨川さまの勝利——守り切れば飯田さまの勝利となります。奪取または取得に当たって、いかなる手段を用いようとかまいません。また、特に制限時間は設けておりません」

「攻防や時間の経過によつて金網は沈むことになるわけでございますが、そこに達すれば両名とも獯猛な毒蛇の餌食となるわけでございます。この場合は両者失格となりますので悪しからずお願いいたします」

「ちなみにルール上ギブアップは認められております。その際はその旨を申告していただければ、その時点で決着と致します」

これで、ルール説明は終わり。十三のルールのうち、最も残酷と言われるのにふさわしい真綿で首を絞めるような命と心を削るルール。「こちら側に勝利条件がないのは、あまりにも不利すぎないだろうか」「そうは言われなくても、答えは前と同じなのですが。それに、飯田さまの条件は球磨川さまに『まいった』の一言を言わせることになりますね」

とりあえず、これ以上は反論をやめてリングを見る。

『ねえ、飯田ちゃん』

球磨川は肩に手を置く——まるで友人のように。

『この庶務戦なんだけどさ』

『僕、わざと負けてあげよっか?』

にたりとした笑み。飯田はそちらを見てはいないが、それを容易に想像できるようなねっとりとした声。

「……ッ!？」

だが、その言葉にはさすがに驚いた。まさか、負けてもいいとは——ヒーローには想像もつかない思考だ。

『なんか選管の皆のノリが思いのほかよくて若干テンションが下がっちゃったし』

言い募る球磨川に侮蔑すべき嫌悪を感じて、振り払う。

「球磨川くん、君って奴は……どこまで——」

『あは！ なに怒ったの？ やーだー!』

へらへらと笑う。いつものように。

『忠告してあげる。そうやって僕を不快に思ってるうちは百年かけてもきみには僕を止められない』

そして、その笑顔のまま足を踏み出す。

『受け入れることだよ』

そのまま踏み出していく。

『飯田ちゃん』

その薄気味の悪い笑顔のまま。

『不条理を』『理不尽を』『嘘泣きを』『言い訳を』

『いかがわしさを』『インチキを』『墮落を』『混雑を』

『偽善を』『偽悪を』『不幸せを』『不都合を』『冤罪を』

『流れ弾を』『見苦しさを』『みつともなさを』『風評を』

『密告を』『嫉妬を』『格差を』『裏切りを』『虐待を』

『巻き添えを』『二次被害を』『愛しい恋人のように受け入れることだ』

彼は続ける。

『そうすればきつと』『僕みたいになれるよ』

躊躇なく毒蛇のリング上に足を踏み入れた。

第22 巡回 毒蛇の巣窟

生徒会庶務戦『毒蛇の巣窟』のルールはハブの上、固定されていないリングでのバトル。しかも、あの球磨川を降参させる必要があると言うのだから――

「正直、棄権すべきだと思うわよ。飯田君。それは決して恥ずかしいことじゃないんだから」

人吉瞳に言わせれば何一つ勝ち目のない戦いだった。

「それでも、僕は彼が許せない」

震えながら、足を踏み出す。

「ヒーローが諦めて、誰が悪を倒すと言うんだ！」

こちらもリング上に足を踏み入れた。

――実のところ、危険度で言えば……ただ状況と飯田のステータスを見比べるならば、という条件ならそうでもなかったりする。というか、危険度のレベルで言えば普段の授業と同じくらい……決定的な失敗でもしない限りは命にかかわらない。

それも当然の話なのだ。垂直な穴の底、なんて言っても実は凸凹が無数にある。機械を使って均したわけでもなければ油を塗っているわけでもないのだ。普段の飯田であれば凸凹を足場に登ることは可能だし、もしダメならターボを使って無理やり自らを押し上げればそれでいい。

“そう、普段ならば”。

人間とは不思議なもので、命の危険があると普段はできていたことが急にできなくなる。冷静な判断ができなくなるくらいならまだ良い方で、悪い時には手が震えてものを握ることすらまともにできなくなる。本当に整備不良でもない吊り橋からだって、落ちてしまう。それが人間らしさというものだ。

ヒーローならば恐怖など克服していると言うだろうか？ 確かに、本物のプロヒーローならばそうだろう。けれど、このヒーロー社会においてには玉石混交だし、飯田に至ってはまだ生徒だ。

毒蛇の巣窟、その上に居るといふことは否応もなくストレスを感じてしまう。

『さーて。それじゃ早速おっばじめよつか。生徒会庶務戦！　と言ってもいきなり仮章を奪っちゃってもつまんないし』

『最初はちよつと遊ばせてもらうね飯田ちゃん——』

ストレスを微塵も感じていない様子の球磨川は躊躇なくリングの上を走る。

「……ヒーローは——恐れない！」

一喝。そして、蹴り飛ばした。球磨川は上空でぐるんと一回転してべしやりと落ちる。

『い、ったーい』

だが、それしきでこの男が止まるわけがない。

『うわー右腕が動かないー。呼吸もなんだか怪しいぞー』

気色悪い動きで立ち上がる。ダメージなど微塵も感じていないよ
うな、一瞬先には死んでしまいそうな重傷者のような矛盾した気配
過負荷。

『鎖骨が折れて肺に突き刺さったかなー。一生後遺症が残るなーこれは！　あー、でも痛くなくなってきた？　直る兆しかなー。それとも壊死する兆候かなー』

見る者を奈落に突き落とすがごとき過負荷^{マイナス}性。観客が居たら黄色い声援どころか、黄色の救急車を呼ばなくてはならないところだ。

『まっ。どっちでも似たようなもんかあー！』

螺子でもって特攻して。

「っらあー！」

対する飯田は顔面狙い。水平に靴裏を叩き込んだ。

「——すごいわね。完全とは言わないまでも、戦いになるくらいには恐怖心を克服している。貴方の仕事ね？　相澤君。医者として絶対安静を申し付けていたはずなんだけど」

「俺だけ休むなど冗談じゃない。飯田にはいくつか合理的戦略を仕込んでおいた」

「どうやったの？」

「奴らは見るだけで心を折られる——ならば合理的解決手段は目をつむればいいだけのこと」

「……そんな、ことが」

「もちろん、この一週間は目の見えない戦い方を仕込んでおいた。丁度、そのやり方は開発済みだね。俺の個性は『抹消』……目を使えなくなつた際の対抗手段を用意しておくのはプロとして当然だ」

「そんな簡単なことで対策できるなんてね——けれど」

「ああ、金網の上でのバトルはさすがに怖いらしいな……幾度も蹴りが入っているが、下向きに向けたものはない。ダメージが入る蹴り方じゃないな」

（それだけじゃないのよね……過負荷相手に戦えるというのは、少し……致命的ではないかしら……？）

そうしている間にもバトルは進む。

『それで、僕を——』

「……そー！」

蹴る。そう——

「そして、こいつは奴の口八丁を封じる手段でもある。飯田は声の方向を蹴るだけだ。内容なんてどうでもいい。機械的に！ 合理的に！ ただひたすら悪を倒すだけだ」

それこそが相澤の仕掛けた戦術。声など、ただの合図——その内容など気にしない。ゆえに、飯田はこう吠える。

「僕は君のことなど眼中にない！ 事情とかそういうのが色々あるのだろうが——そういうのは裁判官にでも話してくれ！」

目を閉じたままのファイティングポーズ。気合十分……過負荷に対する気持ち悪さを今は忘れている。

『やれやれ、目の前にいる僕を無視するなんて酷いなあ。これはジャンプだったら規制されかねないじめの描写だよ』

立ち上がる。

『——でも、そんなんで過負荷を克服したような気になるなんて、それこそ現実から目をそらしているようにしか思えない』

けれど、それこそが隙だ。本当の意味で暗闇を克服するなどヒー

ローにすらできたものではないし、極論として目が二度と見えなくなつた場合に立ち上がることが出来る人間が居たら、それはヒーローですらない超ノットイコール越者だろう。

「……そこだー!」

飯田が蹴りを繰り出して。

『つぐはー!』

あつけなく飛んでいく——だが、飯田も苦い顔だ。だって

「痛……いい! だが、目を開けるわけには——!」

そう、足が抉られた——カウンター攻撃だ。痛みにも目を開けそうになるだけではない。足を傷付けられたということは機動性が落ちることということ。しかも、足を怪我した状態ではこの穴を這い上がる事が多少でも難しくなってくるために焦りも出る。もちろん、この程度の傷だけで登れなくなるわけではないにしろ。

『君は怖がっている。この僕も! そして、この蛇の巣窟すらも!』

その弱マイナスさを見逃す僕だと思つたかな? ねえ、相澤先生!』

ニタリと笑う。それは——勝機を感じたから。球磨川だって、負けるために戦っているのではない。むしろ、逆……ちゃんと勝つためにさまよい続けてきた男だから。

「——ツチ! 飯田、気を取り直せ! まだ金網はほとんど沈んでいない! 過負荷の脅威はむしろルール無用の虐殺、ルール外の一手だ。ルールのある戦いではお前が有利だ!」

「——はい!」

相澤の激励の声に飯田はファイティングポーズを取り直した。

(けれど、それもルール次第よね? ルールがあること自体が過負荷にとつては致命的……相澤君はよく気付いたけど、それでもこの『まいったと言わせた方が勝ち』というこのルールは……)

人吉瞳は慎重に状況を見定める。言つては悪いが、冷静なのは戦っているのが息子でもなんでもないからだだろう。

「……黙つたか!」

しかも、球磨川は次なる戦略に出た。黙る、簡単だが痛い——方向が分からなくなる。

「だが、そこだ！」

タツクル。機動性を殺されないよう、足をかばって体ごとぶつかっていく。

「見えなからうが聞こえなからうがお前の気持ち悪さは肌で感じるぞ！ 球磨川アアア！」

そもそも、人は居るだけで呼吸音や体温などいくらでも気配を発している。はつきりとした位置は分からずとも——タツクルならば関係ない。

『つぐ。う——それ、で……』

球磨川はなすすべもやられる。タツクルによって足を狙うこともできず、ぼろぼろになっっていく。

「これで！」

フィニッシュの一撃。

『——君は負けるんだ』

カウンター。先ほど攻撃を受けた足が“また”。偶然ではなく球磨川はその一撃を狙っていた。狙い澄ましていた。その攻撃が来るのを——いくら足をかばおうが、最期の全力を振り絞った一撃は利き足で来ると見抜いて。

「つむーく……！」

飯田は後ろに下がる。非力な球磨川の攻撃ごときでは完ぺきなカウンターも勝負を決めるほどではない。まだ、戦える。少なくとも、身体の損傷で言えば。

『痛いだろ？ すぐ治療を受けなきゃ腐って二度と使えなくなるかもしれないぜ？ 足は大切なんだろ？ だから、さあ——降参しちやいなよ、飯田ちゃん』

ニタリと球磨川は笑う。

——けれど、なんだかその笑みは普段と違った。そして、それに最初に気づいたのはなぜかオールマイトだった。

「球磨川君。君は……」

そして、次に江迎。

「あれ？ なんだか球磨川さん。嬉しそう……？」

純粹な疑問。

「まあ、当然でしょう。敵は足を使って戦うタイプ。利き足を潰したのだから勝ちも同然。まずは一勝——我々の悲願に近づくのですから球磨川さんだって嬉しいに決まっています。幸先もいいですね」

「ま、確かに勝つのは嬉しいしな——もちろんあたしも嬉しいぜ。球磨川さんが勝つのはさ」

そう、球磨川は勝つために戦っていた。過負荷らしく、勝負前に言っていた“負けてなお悲惨な勝負にしてやるよ”なんて言葉は忘れ去って。

『さあ、降参したまえ。飯田くん』

這いつくばる飯田を見下ろした。

「——」

だが、それでも……と降参の声は出さない。そんなことを口にするなど許せなかった。

『もう君に勝ち目はないぜ』

そして、球磨川の傷が治っていく。よほど飯田より重傷だったその傷は痕すらない。

「……ッ！」

努力が無駄になり、飯田は打ちひしがれる。また、一から……しかも、やつても無限に回復されるいちごっこ。自分の足は酷く鈍痛を発していて、熱すら持っているのに。……立ち上がれもしない。ただ、そこに座って何かを口にも出せず。

「——飯田！ 約束だ。降参しろ！」

「相澤君?!」

人吉瞳が驚く。

「対策を教える代わりに条件を付けた。治療が必要な傷を負ったら即座に降参する、と。最初のアレで降参してもよかつたくらいだ。……ツだが、これはもはやどんな言い訳も聞かん。降参して治療を受けるんだ！」

生徒を想う心は本物。しかし。

「——それでも、ヒーローが諦めれば悪は滅びない！」

立ち上がった。" 立ち上がって" しまう。それが彼の強さで……
欠陥。^{マイナス}

「飯田ア！」

やめさせたい、心から。

「まだ戦うさ。貴様も、降参などしないんだろう？」

『当然さ。勝てる勝負を諦められるほど、僕は幸せ者^{プラス}じゃない』

向かい合う。共に勝利を目指して。

「——行くぞオ！」

『来いよ。君はこれからこの僕に^{最弱}負けた初めての人類として歴史に名を刻むんだ』

目をつむっている上、利き足は引きずっている。その有様では速度など出ない。それでも球磨川以下はあり得ないが、" 見えない" 以上は当たり前前に状況を把握しきれない。球磨川が狙う場所が分からずただ突進して——

「そこまでだ」

球磨川の頭を第三者の蹴りが打ちぬいた。

『つか。は——』

あまりにも研ぎ澄まされた蹴りに球磨川は意識を絶たれた。

「さて。長者原君。ルールには規定されていなかったが、これは明らかにルール違反というものだろう。こちら側の敗北だね」

オールマイトが落ちていて長者原に確認する。

「ええ。そうなりますがオールマイト様。しかし、このような運営に支障をきたす行為は今後控えていただきたく——」

「分かっているさ」

オールマイトは飯田をお姫様抱っこして、リングの外へ連れ出す。

……リングはひらりと飛び越えられる程度にしか沈んでいなかった。

皆が集まり、飯田の無事を喜ぶ。

そして、過負荷たち。

「よくやってくれたぜ、大将」

こちらは平然と金網の上で球磨川を抱き起している。

『でも、勝っても“これ”じゃちよつと格好がつかないかなー、なんて』

照れた様子でそんなことを言う。

「何言ってるんだよ。それこそあたしらしいだろう？ あんたでも勝てるって見せてくれた——大将はやっぱり過負荷の星だよ」

「——あの！ とつても、かつこう良かったですう」

江迎が抱き着く。

『江迎ちゃんの勝利の抱擁だなんて、嬉しすぎて調子に乗っちゃうじゃないか。……蝶ヶ崎ちゃん？』

「――」

彼は無言で手を挙げた。

『……っふ。言葉は要らない、つてことだね。ジャンプのお約束だ』
パァン、と高らかに手を打ち鳴らした。

第23巡回 冬眠と脱皮

「皆様、一週間の御無沙汰でございました。それではこれより生徒会選挙書記戦を始めさせていただきますたく存じます」

生徒会戦拳、二戦目。ヒーロー側は初戦を敗退で飾った以上、負けられない。

「前回と同じく、まずは試合形式を決める運びですが。それに先立ちましてオールマイトさま、少々前に出てきていただいてよろしいでしょうか」

黒服がオールマイトの周りを囲んだ。

「オールマイト様は戦拳遂行に支障をきたしかねない危険行為が目立ちますので、我々選管により監視させていただきます。異存はありませんね？」

「……ああ、問題ないよ」

特に驚いた様子もない。なにかあればまた“やる”な、などと長者原は思うがゆえに油断しない。それでどうにかできるとも増長できないが。

「では、時間も押してまいりました。志布志さま、十三枚のカードの中から好きな一枚をお選びください」

「……『巳』のカードがあるけれど、その裏側は庶務戦の時と同じく『毒蛇の巣窟』なのかい？」

素朴な疑問。

「いえいえ、まさか。庶務戦と書記戦では性格が違いますので。『巳』のカードのみならず十三枚のカードの裏側を我々は総とつかえしております」

「じゃーあー考えんのめんどくせーし、あたしも球磨川さんと同じ

『巳』でいや」

『『巳』のカードでございませぬ。わかりました。『毒蛇の巣窟』を知りながらこのカードを引くとは、志布志さまの度胸にはこのわたくしめ、ただただ感服するばかりでございませぬ」

カードを引く。

「書記戦の形式は『冬眠と脱皮』に決定いたしました。これもまたやはり！　今回、我々が用意した十三の決闘法の中でもっとも残虐なルールで行われる選挙でございます」

「またもや、もっとも残虐などという言葉が出たが——まあ、それはいつも言っているからなどではなく、戦拳における“蛇”と言う札にそういう性質があると言うことだろう。」

「——今回もまた蛇を利用するのですか！　そんなことをしたら沖縄からハブが居なくなると思うのですが!?!」

「負けたくせに元気な飯田だ。」

「いえ。今回は実際の蛇は使いません。蛇はあくまでモチーフでございませぬ。相手の身包みをすべて剥いだ方の勝ちとなりましてございます」

『おいおい、いい加減にしなよ長者原くん。苦言を呈さずにはいられないよ』

怒る——この段に至っては、そういう風に見せかける気まぐれが発動しただけだと誰もが看破しただろうが。

『そんな芸者遊びみたいなふしだらなルール、神聖なる学び舎で行っていないわけないだろう』

とはいえ、言っていることはまとも。まあ、正論を言つて茶々を入れる機会を逃さないのがこの男だから……というか、正論が言えなければ虚言を弄するから、どちらにしても茶々は入れるのだが。

「いえ、球磨川さま——妄想たくましくされているところ申し訳ありませんが、そんな色っぽい試合にはならないと思いますよ」

『えっ?』

そして、案内されたのは極寒の部屋。

「学食を提供してくれる皆様が使用している巨大冷凍庫、零下48度——南極さながらの極寒空間、この倉庫全体が書記戦の舞台となりましてございます」

ガチガチに凍ったコンテナ、凍り付いて貼り付いた棚に収められている箱が並べられている。この霜に覆われた世界でふしだらなこと

に考えを及ばせるのは相当に難しいと言わざるを得ないだろう。肌を晒せば、即座に凍る。

まずは赤くなるだろう。しかし、それも一瞬のこと。次は白くなり、腫れ、水泡ができ——大した時間もかからずに黒い革のようになってしまう。そんな病変に欲情できるやつがいたとすればそれは大変な変態だ。球磨川でさえそこまで変質者^{マイナス}ではないだろう。

「僕の受けた毒蛇の巣窟もそうだが……冬眠と脱皮、これは——こんな中で身ぐるみはがされたらあつという間に凍死するぞ……！」

その空間では、そもそもそこに居ること自体が死因となる。防寒対策程度では死を防ぐことはできない——というか、無理やり電力を大量消費して普段より冷やしている。そのままですら凍らせた食材など、溶かしたところには放課後になっている。

「かつては氷室でバトルを執り行ったようです。ちなみに今回はギブアップは認められません。凍え^{こお}ようが、凍ろう^{こお}がどちらかがどちらかを全裸に剥くまで戦いは継続されます」

ギブアップは認められない——とはいえ、自分で脱いでしまえばいいだけだ。この空間でパンツ一丁になったら、何秒も持たずに凍死する。敗北条件を満たしたらすぐに選管が助けしてくれるだろう。……それより前はどんな介入も許さないが。

「言うまでもなく身ぐるみの剥ぎ合いは脱皮の見立てであり、極寒ステージは冬眠の見立てでございます。つまり今回は立候補者こそが蛇であり、この決闘は蛇同士の食い合いなのだ」とご理解ください」

もつとも残酷とは言い得て妙——むしろ死人が出ない方がおかしいルールだ。

「——では、この戦いに挑む立候補者様、前へ。ちなみにこの書記戦におけるオーダーは事前に伺っており、ルールが決まった後で有利な人選を行ったものではないことをご理解ください」

「俺だ」

爆豪が前に出る。極寒に対して爆発——ピンポイントに有利なところを突いてきたように思えるが、もちろん緑谷側がルールを知っていたわけではない。

彼の性格上、会長選に出ようとするだろうが……そこは最初の戦いで負けた以上、二連続で負けるわけにはいかない、この戦いは後に控える会長選よりも重要なのだと説得された。彼の人選は“彼なら勝てる”という信頼——まあ、それは生来の乱暴さからくるものだが、それでも過負荷に対して相性がいいのは変わらない。

「あんたか。あたしは女だけど遠慮することねえぜ。女の服を剥ぐのは紳士じゃねえって後で言い訳されても困るしな」

「ボケが。てめえ相手にそんな考えるわけあるかよ。速攻でマップにして晒してやるよ」

さらに、もう一つの利点。飯田や緑谷では決して志布志の服を剥ぐことなどできなかつただろう。だが、爆豪ならば。

「かつちゃん、勝って」

緑谷の真摯なお願い。

「……は、ボケが。クソナードに言われるまでもねえ——勝つのは俺だ」

この残酷なルールにも尻込みせず、凶悪な笑みを浮かべて見せる。『志布志ちゃん、先の庶務戦は僕が勝利した。でもね、やつぱりこれはチーム戦なんだよ。僕だけが勝ったところで、チームが負けてしまつたら敗北なんだ』

『だから、僕は真剣にお願いするよ』

言葉を切って。

「——勝って」

一瞬だけ、括弧格好付けるのをやめた。

「ひひひ」

志布志の顔に思わずと言った笑みが浮かぶ。

「無茶言うなあ、球磨川さん。あたしの弱さを知ってる癖に！ 勝つとか！ 99%無理に決まつてんだろ、そんなこと——」

扉の前に立つ。極寒の世界がこちら側に接続される。ただ漏れた冷気だけで体の芯まで凍えてしまう。

「だけど！ 1%でも可能性がある限りあたしは諦めない!!」
入る。

「クソが！俺より先に入るんじやねえ——」

爆豪も追って入る。勝手に入らなかったのは開始の合図を待っていただけ……この男はチキンレースは最後までブレーキをかけないタイプだ。

「さあ！ てめえをぶつ殺して、さっさと糞さみいところから出てやん……」

爆発を連続させながら入った爆豪は、その瞬間血を噴き出して倒れた。

「……ツかつちゃんっ！」

「ぼんやりしてんじやねーぞ、小僧。試合場に入った瞬間から既にバトルは始まってるんだぜ！」

頭を踏みにじろうとして。

「言われなくても知ってたんだよ。——糞スケバンがア！」

ただの売り言葉に買い言葉……ルール違反を問うようなことなくそのままバトルに移行する。そして、常にキレているように見えて、その戦闘思考は冷徹。一気にバトルを終わらせるべく靴を狙う。

「っちー！」

飛びのいた。さすがに靴をやられては動けなくなる。霜だらけの地面はただでさえ素足を切り裂き、しかも裸足は冷気に耐えるべくもない。むしろ上着よりも守るべきものだ。

「——APショットオー！」

さらに範囲攻撃ではなく収束した一撃。ただ“ぶつばなす”一撃は爆発の性質上、敵を温めてしまう。それで服を破ければいいが、そんな偶然に頼るギャンブルなどしない。

「っぐー！ は——」

そして、叩きのめされた志布志は逃げ出した。もちろん、冷蔵庫の外ではなく——みっともなく這いつくばって、必死に攻撃から逃げて隠れる。

「——は。隠れたところで無駄なんだよ！ どこに行ったかくらい、音で分からア！」

極寒の中、爆発と言う個性を持っていたら絶やさず使って寒さを和らげようとするのが一般的な感性だろうが……爆豪はそれを選ばない。個性の使用はそれだけで体力を使うし、何より爆発で音が聞こえなくなる。

「その辺だなア！」

さらに、音を聞くために爆破を使わなかったからと言って、その思考に己を縛ることもない。やるべきときにはやってしまう——コンテナの裏に隠れた志布志を爆破でもろとも吹っ飛ばす。

「よお。そろそろ降参したらどうだ？ その傷じや立ち上がれもしねえだろうよ」

「……は。馬鹿言うなよ。約束したんだ——あたしは這いつくばっても勝つてな！ 『致死武器！』」

その言葉通り、這いつくばったままで放たれた過負荷が爆豪をズタにする。

「——ッ！ くそ、が……」

膝をつく。もはや両者負傷により戦闘続行不可能と言ってもいい状況だが——

「ひひ。勝ってやる。あたしが、雄英のエリートに。……体育祭の覇者に！」

ずるずると身体を引きずって近づいていく。このまま爆豪を全裸にひん剥けば志布志の勝利だ。

（……くそが。なんだってんだ、あいつの個性——過負荷だったか？

発動条件……触ることじゃねえな。見るだけか？ いや、それだけでここまでのダメージを与えるなんて馬鹿なことが……）

爆豪は必死に考える。

（だが……くそ！ 分からねえ。あいつの能力は何だ？ 切り裂く能力——違う、服は傷ついてねえ。斬撃とかそういうものじゃねえが……だとすると何になる？ どう防ぐか……発動条件すらわからねえんじゃないとも……）

（生命だけに効くカマイタチ？ なんだそりゃ——つか、カマイタチだったら避けられる。脈絡もねえつつうのはおかしい。本当に、発動

させようと思うだけで発動するような……)

「——ひび。そうさなあ、ヒーローつうのは諦めないもんなんだろ？」
たつぷりと時間をかけているのにまだ半分も近づいていない志布志。それを思いついて、ニタリと笑う。

「じゃあ、念には念を入れとかねえとなあ？　もう一丁喰らつとけよ」
「つづ！　ぐあ——」

(分からねえ。今の一撃……何の拍子も、飛んでくる”何か”も分からなかったぞ！　魔法とでも言うのかよ——糞が！)

声が聞こえたような気がして——そちらを向くと。

「かつちゃんっ！　かつちゃん、返事してよっ！」

緑谷が騒いでいた。ウゼエと思つて。

「ああ。ウゼエ。ウゼエんだよ。テメエらも、糞デクも！　面倒くせえ——こうなつたら考えんのなんてヤメだ！」

身体の痛みなど無視して無理やり立ち上がった。

「ひび。そうこなくつちやなあ——食らいなあ！　『致死武器』」

「つが！　ぶっ殺す！　ぶっ殺してやる！」

血まみれになりながら前へ出る。

——これは皮肉と言つていい。なぜなら、凶らずも爆豪が使っているのは過負荷マイナスの戦略だ。もちろん、そんなこと爆豪は露とも思っていないが結果としてそうなっている。つまり、殺せないのを利用して過負荷に曝されながらも強引に突貫している。

元々志布志は『罪が軽くなるから、未成年の身で人殺しをすると損な気がする』というイカれた信念があるが——事情を無視して結果だけ見れば”人を殺すことができない”と言うことになる。そして、精密コントロールなんて過負荷にはそれこそ似合わない。足に集中させて機動力を殺すこともできない。

結果、爆豪はまだ動ける。動けないようになどできない。

「——だが、出血による意識の喪失ならどうかかな!?　人間は血液の30%を失うと死んじまうが、それ以下でも意識を失っちゃまうんだぜ。いくらヒーローでも物理法則まで無視できないだろ!？」

そう、どのくらい血を流せば気絶するかなど過負荷の嗜みとして経

験済み。ゆえに、殺さずとも動けなくすることはできる。

「なら、塞げばいい話だろが!？」

爆破。太い傷を焼き潰す。狂気の所業——焼け焦げ、二目とみられない傷跡を残しながら爆豪は進む。

「——そんな……」

「勝ったのは俺だ」

爆豪が志布志の服に手をかけようとして。

「ばーか。あたしの『致死武器』にはもう一つの使い方がある!」

そう、志布志の過負荷は、他人の古傷を開く。爆豪は予測することすら諦めてしまったが、実はここで言う古傷というのは2種類ある。

「この、トラウマを開く力……が——」

身体の古傷。それは怪我や故障だけでなく、虫歯だって筋肉痛だって古傷だ。アスリートの中でも最高峰にキツイ雄英生が喰らえばただではすまなかった。そして二つ目——精神の古傷。

「ウゼエ」

そして、爆豪は一瞬にして爆破で志布志の服を焼き消した。

——何が悪いかと言えば、志布志の戦略だろう。この一撃に効果があつたら、こんなあつけない幕切れにはなつてなかった。目の付け所が最初から間違えていた……なぜなら今のは爆豪にトラウマを克服するだけの心の強さがあつたからというのでは全然ない。そんな大したトラウマなんてなかっただけの話……塵も積もればという話があるが、しよせん塵は塵だ。

エリートが憎いとか言いながら、それを全然想定していなかったのは志布志の頭が悪いとしか言いようがない。だって、エリートは恵まれているからこそエリートだ。トラウマまみれの自分たちとは違う。

ああ、もちろん効いてはいる——爆豪の心はしつかり嫌な気分になつている。だが、それだけだった。

「生徒会戦挙書記戦は！ 爆豪勝己さまの勝利でございます!」

これにて、地獄の第二戦が終了する。

第24回 火付兔

集められたそこは植物園。本来なら緑で人々の心を癒す空間だが、すぐに血塗られたキリングフィールドに変わる。塗り替えられてしまう。血塗られた戦拳のステージへと。

「それでは皆様、会場に到着いたしましたところで江迎様を選ばれた『兔』の試合形式、『火付兔』のルールを説明させていただきますたく存じます」

——過負荷側はさすがに三連続で『蛇』を選ぶことはなかった。実のところ、江迎は元々ヒーロー側だった麗日に次いでまっとうな空気もある。もつとも、彼女は一端の過負荷……それが不気味なところでもある。

ともかく。

「さて、今回は候補者の他に各陣営よりそれぞれ一名ずつサブプレイヤーとして競技に参加していただくこととなります。形式としてはタッグ戦と言うことになるのでしょうか」

『質問。それは僕が出てもいいのかな?』

「その答えを最初に申しておきますと『否』でございます。球磨川さまはもちろん、競技に参加した方は出られませんし、この競技に出られました方についても以降の戦拳に参加していただくことは不許可になります」

「どういうことでしょうか!? 前回の戦拳で重傷を負った二人はすでに戦えるほどには回復しておりますが!」

「はい。ただでさえ苛烈な戦拳、短期間の位置に何度も経験されますと精神に不調をきたす恐れがあるからとご納得ください。もちろん、あなた方がどうかを言うわけではございませんが、必要以上に残酷になつてしまいますと教育機関として不適格の烙印を押されてしまいますので」

まあ、球磨川がいる時点で“そこ”は教育機関としては間違いなく不適格だろうが——それを言えるはずもない。というか、ルールだ。そこを変えると言う思考はヒーロー側にはないし、過負荷側も警戒さ

れていてはできやしない。

『そつか。まあいいや。じゃ、麗日ちゃん行つてよ』

「私……？　でも、それだと次の戦いは？」

『それは蝶ヶ崎ちゃんにやってもらうよ。大丈夫、当てはあるから』
「球磨川さん、確かに我々過負荷はぜい弱な集団——勝つ機会を逃すべきではないのは分かりますが、一体だれが私たちの味方になってくれると言うんですか？」

ひそひそと耳にささやく。そして、球磨川も向こうに聞こえない程度に声を抑える。

『それは違うね。僕たちに味方はいない——けれど、ヒーローに敵はいるんだよ』

「——は？」

『ま、見ててよ。失敗したら恥ずかしいから言わないだけどき——それに、江迎ちゃんと君が勝てば僕たちの勝利だ』

「あまり頼られてもご期待に添えられるか……」

『マイナスつてのはそういうものだしね。大丈夫。失敗も敗北も、全部僕がなかったことにしてあげるから』

そして、足を一步踏み出す。

『さあ、江迎ちゃん。そして麗日ちゃん。こいつはチャンスだぜ——なぜならヒーローとは本来、孤独なものなんだよ。オールマイイトに隣に立つ者がいないように。圧倒的な“個”が彼らの強さ。ならば——僕らは仲間と力を合わせるしかないだろう？』

『脆弱で、負けっぱなしな僕たちでも……力を合わせれば、きっと勝利を掴むことだってできるさ。——勝とう、江迎ちゃん、麗日ちゃん』
「——さすが球磨川さん☆。いいこと言いますね。麗日ちゃん、よろしくね」

その、差し出された腐食の手を。

「……」

一瞬、ためらつて。

「よろしく」

手を取った。激痛が走り、次の瞬間には消えている。手を離しても

痕なんて欠片もない。……オールフィクション。

さらに球磨川は江迎の肩を抱いて囁く。

『君の能力の本当の使い方を教えてあげる』

「——サブプレイヤーか。ならば、私が」

「オールマイト様は不許可でございます。第1戦の時の妨害行為を考えますと、競技としてなりたたなくなる恐れがございますので」

「……じゃあ、僕が——」

「緑谷少年は駄目だ。せめて個性が使えていたらよかったが、武器もなしに彼らと戦わせることなんてできない」

「——ぐ」

「俺が出てつて潰してやんよ！ 糞デクにや無理だろうがな！」

「いや、君でも無理だぞ爆豪君。競技参加者は出られないと説明されただろう」

「なら、俺が一人で出る！」

「いや、だからそれはルール違反で失格だつて。それに、あなた以外が出ても、それはそれで一敗が確定するしね——」

「でも、人吉先生——」

「ドクターストップなら反論できたけど、予防的措置じゃあねえ……ここに居る人間で戦うしかないんだけど……」

人吉瞳は出ない。彼女の心は折れている。支えがなかったために堕ちて、流れて——頼られたならばまた別の道もあったかもしれないが、ヒーローは望まぬ者を戦いに送り出さない。それは拒否する人間だけでなく、言われたらやろうかな程度も説得することはない。

「……俺が出るしかないだろう」

皆が驚く。なぜなら、彼は——

「駄目よ、相澤君。予防的措置なんかじゃなくドクターストップよ。私は外傷専門じゃないけれど、貴方の身体が戦える状態でないことくらい分かるわ」

「だが、ここは俺が出る以外に合理的解決手段は存在しない。それに、飯田に戦術を授けてなお負けたしな。雪辱としてはいい機会だ」

「——待って！」

「長者原。俺がサブプレイヤーだ」

「了解しました。では、球磨川さまのチームは江迎さまと麗日さま、緑谷さまのチームは切島さまと相澤さま。サブプレイヤーの兩名さまにつきましては、このブレスレットを装着していただきます」

「おいおい、えらく趣味の悪い腕輪じゃねえか？　これ」

渡されたのは、脈動するかのような禍々しい意匠が施された腕輪。血を吸うとか言われてもすんなりと納得できる。もつとも、“そいつ”が本性を現すときはそんなものでは済まされないが。

「はい、切島さま。端的に申し上げまして爆弾でございます」

そう、爆弾。ただでさえ人の命を奪うに足る代物だが——

「そんな……！　硬化のある切島君はともかく、相澤先生なんて爆発を受けたら……！」

「腕が吹っ飛ぶだけじゃないわね。腕輪の形状から見て、むしろ爆発よりも破片で傷つけるタイプ——要は手榴弾ね。そんなもの間近で喰らったら相澤君は……！」

元々病室で絶対安静にしていなければならぬはずの、その体で破片が重要な血管を傷つけるようなことがあれば。そうでなくとも爆発のショックで全身の傷が開くかもしれないのに。

「ええ。ですから急いで外して差し上げないといけませんね。それがこの会計戦のテーマでございます」

「江迎さまには相澤さまの腕輪の鍵、切島さまには麗日さまの鍵をお渡しします。どのような手段を用いても構いません——相手の持つ鍵を奪い、パートナーの腕輪を外してください。先にパートナーを救った方の勝利となりましたでございます」

「持つ鍵、または奪った鍵は肌身離さずよく見えるようにお持ちください。捨てたり隠したりするのはルール違反いたします。もちろん鍵の破壊も反則となりますので、特に江迎さまはその点お気を付けてください」

「即ち、この会計戦において留意すべき点は以下の4つ。1. 制限時間以内に　2. 鍵を守りながら　3. 鍵を奪い　4. パートナーを

助ける。ただそれだけの実にシンプルな競技でございます」

『質問、引き分けならどうなるのかな？ ほら、2勝2敗1引き分けとか、1勝1敗3引き分けとか。延長戦とかあるのかな』

「はい、その場合は球磨川さまの勝ちとなります。これも先行側の優位だとお考えください」

『そつか。ありがとう』

(このルール。想像以上に性質が悪いわね)

その悪辣さが最も理解できるのは球磨川を除いては人吉女医しかありえない。心理学を扱う彼女にしか。

(というか、球磨川くん……一々プレッシャーのかけ方がうまいわね。ここで引き分けをほのめかす——しかも、引き分けでも実質は向こうの勝利のようなものじゃない)

(即座に決着がつかぬなら、これはバトルに向けた人間が有利と言える。けれど、鍵を隠すことはルール違反でも人を隠すのはアリ——相手が強いなら逃げ隠れして時間を稼ぐのも戦略と言える。なにせ)

(この戦いにおけるプレッシャーは、仲間が死ぬかもしれない”というそれ。自分の死が近づいても冷静を保つのは心の強さと言える——けれど、仲間の死は……仲間が死ぬ直前さえ冷徹な心を保つのは、それは果たして強さと言えるのかしら？ むしろ、それは過負荷の領分……)

(仲間を案じる気持ちに仇となる。仲間が大切であるほどに心を刻む、このルール。誰が作ったのか知らないけど……なんだか、凶化合宿と似たような匂いが——)

「ま、その点で言えば大丈夫かしらね」

「人吉先生？ なにかおっしゃいましたか」

「いえ、オールマイト。相澤君と、ある程度とはいえ凶化合宿を受けた切島君。おそらく、勝負にはなるはずよ」

そう——相澤の命を心配して切島が暴走することはない。助けるため、暴走する——そんなまっとうな心を持っていては勝てないから、塗りつぶした。もつとも、人間の心理と言うのはそんな簡単にごうにかできるものではないが……本人の同意、というか施術者への信

頼があり、短期間の条件反射であればやってやれないことはない。

——それが、心優しい切島少年の心をどす黒く塗りつぶすものであっても。

「……彼の勝利を祈りましょう」

「ええ」

「だが、彼の命が危険なときは躊躇はしない」

オールマイトはためらいなく言い放った。

第25旋回 火付兔（2）

「……相澤先生」

「お前に俺の心配をしている暇があるのか？ 気を散らしていると死ぬぞ。ここはすでに戦場なのだど理解しろ。そして、俺が教師だろうとそんなものには構うな。やるべきことを見定めろ、目を逸らせば指の先から救えた命が零れ落ちていくぞ」

「分かりました。なら、敵を探しに行きますか！」

「……待て。何か、おかしい」

相澤が手を挙げ、切島を止める。二人とも花をめぐる趣味はなく、切島に至ってはこの植物園に足を踏み入れるのも初めてだった。もつとも、相澤の記憶にもここは全く残っていない。義務として見回っただけで、花を見たわけではなかった。

「何だ、手入れしてないのか？ 焦ると足を取られちまいそうだな」

けれど、それにしても——普段とは違うような。散々に蔦が伸びていて、客を迎え入れるような状況ではない気がする。

「それだ」

ゆえに、それは——

「——は？」

「ここはジャングルの救助訓練場じゃない。こんな、伸び放題の荒れ放題はおかしい——ここは“見せるためのアトラクション”なんだから……ッ！」

目の前を覆いつくす緑。気を抜いたら足を引っかけるほどに通路には蔓が無数に伸びている。明らかに異常だ。こんなことがあっていいはずがない——あまりにもあけすけなものだから逆にわからなかった。異常さを一切隠していない……

「これは……敵の攻撃？ 馬鹿な、相手の個性は腐食と無重力ですよ……こんなことが……」

異常が過ぎる——こんなことが可能なのか、という疑問がそもそも出てくる。少なくとも、切島の個性だったら自分にしか作用しない。

こんな、広範囲なんて——

「切島！ ボサつとするな！ 来るぞ！」

その一言で意識が切り替わる。異常事態——そんなものの解明などヒーローの仕事ではない。事故があつたとして、危険に晒されている人を助けるのがヒーロー。原因の究明は別の人間の仕事だ。

——ゆえに。

「……相澤先生！」

「ああ！」

突如飛来した大きな“何か”にも、ただ対処するだけだ。分かっているのは“それ”が人ではないと言うことで、ならば受け止める。いや……

相澤が包帯を投射する。弾速が遅くなつたそれを切島が弾き落す。何も真正面から受け止める必要はない。危険を対処できればそれでいい——し、そうでなければ対処できない。

「切島、気を抜くなよ。まだだ！」

「——はい！」

さらに、2つ目。3つ目。連続して飛来する、一度に一つなのが救いだが、それはまだマシと言うだけで、だからどうにかできるわけじゃない。

「……おおお！」

切島が雄たけびを上げる。常時硬化状態——制限時間はなくとも、当たり前前に体力が尽きれば個性は維持できない。さらに言えば、今もその岩のような肌がひび割れ続けている。飛来するのは巨大化した植物の種子、無傷で通すにはあまりにも硬い。

だが、忘れてはならないのは、過負荷が抹殺しようとしている“彼ら”はエリートだ。雄英という金の卵、そしてそれを育てる者。つまり、当たり前前に学習能力が高いのだ。このような単調な攻撃など、すぐに学習して予測して——敵の想像をも凌駕する。

「切島、行けえ！」

「……見つけたぞ！ 麗日ア！」

言うならばパチンコだ。もつとも、それはもう少し複雑——包帯の

巢を張り巡らせ、受け止めた衝撃を逆向きの推進力へと変換する。

「……はい？」

結果は射出と着弾だ。江迎がその理解不能の状況にコテンと首を傾げ。

「やってくれたね、切島君。でも、今のボロボロの君なら二人ですぐにやっつけてあげるよ」

麗日が迎撃する。そこら中に落ちている種子を拾い上げて投げつける。これが彼女たちの遠距離攻撃手段——江迎が植物を操り種子を生成、麗日が投げるコンビネーション。麗日の無重力で投げ、解除することで高い破壊力を得るやり方は相澤が以前経験したとおりだ。

「——根……性オオオオ！」

耐え抜いた。しかも、真正面から——少し体の軸をずらしてやればそれだけで多少は威力が落ちるのに……そんなことを考えるそぶりもなく。

「ラフラフラレシア 荒廃した腐花アアア！ 狂い咲きバージョン！」

次いで江迎も正気に戻る。敵がいるのだ——排除する以外にない。土下座するような体勢のまま植物を躍りかからせる。

「……んなもんが、今更効くかア！」

絡みつく植物を強引に引きちぎる。ペースを吞まれば過負荷は恐ろしい——だが、ペースを取り戻してしまえば彼ら本来の脆弱さが露呈する。問答無用で全てを破算にする球磨川がここに居ない以上……過負荷の命運は決まった。このまま順当に江迎を殴り飛ばして鍵を奪えばいい。

ここからもう一度盤面をひっくり返すのは不可能だ。

「……このー…このこのオー！」

手を変え、トゲをむき出しにした植物でバリケードを張るが——無駄だ。切島の硬化の前に文字通り歯が立たない……トゲがささらない。

「くううう……ッー！」

そして、江迎は腐食の手で迎撃どころか、立つこともできない。それには植物を操るためには常に地面に手を触れておかなければなら

ないから。

「負けん……負けられないんだよ。私はア！」

麗日が江迎の援護を無視して突っ込む。こちらには硬化がなく当たり前に全身に傷を作って――

「……な!?」

だからこそ、意表を突けた。さらに、江迎に向けて一直線に突っ込んだ切島の側面を突く攻撃。達人であろうとも切り返しは難しい。

「ふ――」

切島の身体を“回す”。格闘術――天地の感覚を失わせ、叩きつけて失神させる。そして、麗日はそれにマイナスの応用をしている。――頭から地面に叩きつける殺人技。

「あが！」

切島の眼が焦点を失う。体が力から抜ける――なにせ、紛れもなく殺人業だ。受け身を取れても、持ち前の根性がなければそのまま死んでいてもおかしくなかった。

「かつ――」

勝った。麗日は一瞬、そう思って――

「てねえよ」

切島がニヤリと笑う。

「あ――投げられたときに、鍵を！」

「……なあ、麗日――俺は、お前がそんな酷いことなんてできねえと思ってたぜ」

「え? ……なにを」

つまり、自分の硬化を信じていたわけじゃなくて、麗日なら殺さないと信じていたからこそ受けた――硬化が体ごと叩きつけられるような衝撃に対して、あまり効果がないのは当然麗日も知っているだろうからこそ説得力だけはあるのだが。……マジか。みたいなことを思っただけで麗日は動きが止まってしまう。

「――麗日ちゃん!? なにしてるの、早く奪い返して!」

「……あ!」

我に返る。だが――

「遅えよ」

「つが！」

腹に蹴り。今も変わらず仲間だと信じているからこそ手加減はしない。

「麗日、お前のことも絶対に助けてやるからな」

そう言つて、身をひるがえす。後は相澤の元まで行つて鍵を解除すれば彼らの勝利。

「させる……ものかアアア！」

木々が脈動する。マイナスが増大する。決定的な敗北感、そして筋違いな“裏切られた”という被害妄想が過負荷^{マイナス}を加速させる。

「麗日お茶子——あなたもしよせんはそっち側なんだね。なら、仲良くぺちやんこになつちやえええ！」

もちろん、麗日は本気でやっていた。鍵を取られたのも、呆けたのも、それは麗日の実力を切島が上回ったというだけの話だろう。マイナス化など、枷が外れて強くなったように思えて——実は奇跡を起こす力を放棄しただけだ。だって、勝つのはいつだってヒーローだから。諦めない者が諦めた人間に勝つのは当然だから。

「あ——」

「ち、こいつは……」

緑がうねる。もはや樹海どころか津波と言うのがふさわしい——四方八方から蔦が這い、枝が伸びて——覆われ、持ち上げられ……余りの密度により圧縮される。何が起こるかと言えば……巨人が両の手ひらで押しつぶすような圧死。

「もう……駄目だね。ごめんね……」

麗日が涙する。高度ならともかく、圧縮をどうにかすることなど彼女には不可能。

「——諦めんな！」

だが、道理を覆すのがヒーローならば、“ここ”にいる。心優しい、仲間を見捨てないヒーローが。

「守るって、言つただろ!？」

個性など関係ない。時間が尽きたのかひび割れ、欠けていく岩のよ

うな肌——だが、彼はただの人間の手でその圧壊から彼女を守る。

「——おおおおお！」

終わりなどない。この樹々は彼らが無慈悲にただの“もの”に変えるまで止まらないだろう——だが、それがどうした。仲間を守るのが彼の本懐ならば。トゲによって切り裂かれた腕から血が噴き出ようが、圧迫に骨が折れようと。

「守るんだ！・俺が！」

ただ、耐える。

だが、忘れてはならない。もう一人いる。

「……そこか！・隠れたくらいで私を倒せると思うなよ！」

「——は、ガキが」

江迎は近づく相澤を察知していた。枝に種子、いたるところに散乱したそれを踏まずに近づくのは不可能だから耳をすませば分かる。それでも、互いの顔が見える位置まで無音で接近したのはさすがと言える。

「病人が、その様で戦うことなんてできないでしょうが！」

ついに切島に接近された時ですら離さなかった手を地面から離す。腐食の手——まともに当たっただけで死に、時間をかけても腐食した空気が相澤を殺す。それほどまで体は弱っていた。

「壊す気か？・……こいつまで」

絶対に全ての攻撃は避けなければならないし、さらに短期決戦でなければ勝利も命も危うい。だというのに——相澤はその絶死確定の一撃を受け止める構えだ。

「——腕輪で?！」

そう、腕輪で。破壊したら負け……しかし、そうならば相澤は死ぬのだ。その腕輪に江迎の腐食を防ぐ防御機能はない。だというのに、なんらためらいも見せずに——当然のように死の綱渡りを相手に託す。

「ほら、隙だ」

だからこそ、一瞬だけ動きが止まった。相澤を殺すことよりも、負

けることに意識が動いた。その隙を見逃さず一撃で江迎の意識を絶った。

過負荷の敗因が”皆のことを考えて”と言うのは皮肉と言うべきか、それともそんなものと嗤うべきか。

「――圧力が。なら……おおお！」

内側から破壊する。江迎が気絶した今、その植物に二人を拘束するだけの力はない。

「守り切ったぜ、お前を」

「切島……くん」

麗日の胸に暖かい感情が灯る。それは決して恋とか呼ばれる感情ではなかったが――今まで寒かったということに気付いて震え始める。確かにその淀んだ瞳には光が差していた。

ともかく、会計戦――勝利したのは切島、相澤チーム。もはや過負荷チームに後はなくなつた。

第26 旋回 狂犬落とし (1)

『——さて、蝶ヶ崎ちゃん。僕は心配してるんだ』
どこかの教室。球磨川と蝶ヶ崎は二人きりでそこに居た。

「……心配、ですか。不肖、この私は確かに強いとは言えませんが——それでも負ける気はしませんよ。皆さんのため、負けられないと言う気持ちがあります」

毅然としている。どこか他人事な雰囲気^{フレイム}が抜けきらなかった蝶ヶ崎が……いまや真剣に前——後ろかもしれないが、ともかくも一点を向いている。

『うん、君の覚悟は素晴らしいものだと思うよ。でも、それじゃ足りないんだ』

たしかに生まれて初めて本当の意味で真剣になれたことは凄いことだ。それは大きなパワーを生み出すに足る決意だが——当たり前前にそれは悪意を醸造し続けてきた球磨川の足下にも及ばないし、決意を実行し続けるヒーローにも劣る。

「足りない……ですか？ 短い人生でもこれほど”やらなくてはいけない”と言う気持ちになったのは生まれて初めてなのですが……」

『んー。蝶ヶ崎ちゃんの過負荷の性質かな。言ってしまうと、執念が足りないんだ。勝つんじゃないと言っちゃう辺りがね——もちろん、引き分けでもこっちの勝利のようなものだけどさ……でも、それで勝てると思っちゃいけない。向こうはエリート^{ブラス}の中でも、えり抜きなんだから』

ぼりぼりと頭をかく。とてもいいにくそうに——だが、真剣に相手に向かい合っている。仲間が相手だからこそ、決るためではなく力になるために弱さ^{マイナス}を見る。

「いや……しかし……だとしても、私にはどうしようも……努力はしますが——」

『だから、僕が力を貸してあげよう』

「——え？」

そして、球磨川がそのセリフを言う。

『お前なんだか、トランプとか武器にして戦いそうな顔だよな（笑）』
時が止まった。

「なんつ…でそこまで！的確に人を傷つける台詞が言えるんだよ、お前はあああああつ!!」

激怒する。

「言うに事欠いてまさかのトランプだ?!」

髪が逆立つ。

「トランプを武器にする奴なんて現実にいるわけねーだろ！俺が二次元と三次元の区別もつかねー馬鹿だつてのか!？」

性格が激変している。というか、見た目ですら変わってしまったている。まったくもって意味が分からない。

『いいね、その過負荷^{被害妄想}。まさに理解不能だ』

その混沌の前に、球磨川はただ意味のない笑いを浮かべる。

『なんか人を殺しそうな顔をしてるけど、突っ立ってる相手を殺したのも後で気が咎めるだろうし、こっちから仕掛けてあげるね蛾々丸ちゃん——』

螺子を手にもってしかけ——

「——」

ねじが不可思議に“止まる”。糸の仕掛けとかそういうものではない摩訶不思議。

『うわ……えっと、なんて言うんだっけ。これ……』

そして、蝶ヶ崎が“それ”を口に出した。

『……』
『不慮^{エンカウシター}の事故』——』

そして、結果はこれまた不可思議。球磨川は倒れ、その頭には足が乗っている。

「感動したぜ、これが理性のない世界か」

蝶ヶ崎がタガの外れた笑みで天を仰ぐ。好戦的としか呼べない笑み、今までの彼には決してできなかった笑み。さっきまでの気弱な少年風の表情はどこにも残っていない。

『そうだよ、蛾々丸ちゃん。きみの勝利は揺るがない』

「ククク！ 礼を言うぜ球磨川先輩。俺のためにまさかここまでしてくれるとはな」

『なあに、僕の勝利のためでもあるのさ。今回はちよつと生き返るまでにちよつとあるかもしれないから、死体は掃除用具と一緒にロッカーにでも入れといて』

『んじや、がんばれ』

「がんばる」

床ごと、その頭を踏み砕いた。

「副会長戦——僕が戦います」

ヒーローサイドは全員が集まっていた。もちろん、作戦会議のため。ではあるのだが……相澤がいない。怪我を押して仕事をして、さらに戦拳の参謀じみたことすら引き受け、止めにあの植物園での戦いだ。攻撃は全て防いだが、元々戦いに出れる身体ではなかったものだから傷が開くのは当然ともいえる。全員一致で（もちろん本人の反対票は数に入れず）病室に拘束されることが決まった。

「だが、緑谷少年。君はまだ個性を取り戻していない。そんな状態で戦うのを認めるわけにはいかない」

「でも、オールマイト！ 相澤先生も今度こそ入院させられてベッドに拘束されている今——他に手はないはずです」

そう、今は2勝1敗。一見すると勝利に王手をかけた状況に見えるが、そもそもが緑谷側の選手は4人なのだ。一人が二試合出ることができない以上——後がない。いや、不戦敗でなら一回負けてもよいのだが、それは単なる言葉遊びの範疇だろう。

「いいや、副会長戦は棄権する」

とはいえ、撤退それにも言葉遊び以上の戦略的な意味がある。相手の出場選手を見極める、以前に今はただ“時間が欲しい”。個性を使えなくなった緑谷のために。もはや最後の出場選手である彼のために。

「……そんな！ それは、あまりにも！」

とはいえ、合理性でもって感情を抑えられたらヒーローになんてならないだろう。金も名誉も、もつと楽に手に入れる方法はあるのだから

ら。「そつちの方がいいんだ」を理解できないのがヒーローだ。

「だがな、飯田。もうこつちには緑谷少年しか残っていない。副会長戦に出るにしても、会長戦に出るにしても同じことだ。稼いだ時間で個性を取り戻せるよう訓練するしかない」

「球磨川を相手に逃げることなんてできません！ 副会長戦で出て、勝ちます！」

叫ぶ緑谷。だが、その言葉は余りにも空虚だ。いくつもの無茶をやって、その度に生き残ってきた彼でも『個性』がなければ……。それは社会の病巣、常識と言う名の思い込み。

「緑谷少年……聞き分けのないことを言ってくれな。どうせ、どちらかは負けが確定しているのだから」

どつちで負けても変わらない。3勝2敗で勝つ——それだけだ。それ以外にあり得ないのなら、経過が違ってもそれは誤差だろう。もちろん2勝3敗もありえるわけで、それは絶対に紡がせてはならない未来だが。

「かつちゃんみたいに、僕は勝ちます！」

……それでも、なお。地頭はいいのだ、理解はできる。けれど感情は納得しない。正義は曲げられない。

「——」
「そうですよ、オールマイト先生。それじゃ、問題を先送りにしただけです」

扉を開き、現れた男。

「……君は」

少し陰のある笑顔。見ようによってはやつれてしまったように見えるだろう。以前は快活以上に明るすぎる少年だったから。

「通形ミリオ……もうルミリオンでなくなってしまった、ただのミリオです。でも、僕は戦える。個性なんかなくても、僕にはまだこの鍛えた肉体がある」

だが、そんなのは勝手な第三者の印象だ。見るものが見れば、筋肉はより強靱になっていることがわかる。個性を失ってしまったことで個性訓練にかかる時間を筋力強化に回せるようになった——言葉

にすればそんなことだが、それで済ませていいことでもないだろう。普通なら失意で部屋に引きこもっているはずだ。

「緑谷君だったよね？」

「え——はい！」

彼は頭を下げ、誠実に言葉を口にする。

「僕を、どうか副会長戦に出させてほしい。あの時、仲間を守れなかった後悔を——ここで晴らしたい」

下げたまま、嘘も偽りもなくただ願う。

「——頼む」

「頭を上げてください」

その決意は本物で、だからこそ緑谷も目をそらすことができない。個性を使えなくなるなどヒーロー失格、見知らぬ人にそんな目で見られていた。鬱屈した感情がないとは言えないが、そんなものがちっぴけに思えるほど彼の決意とが勇気が偉大に見えたから。

「緑谷君……」

「どうか、お願いします。勝って、この戦拳を終わらせてください」

ミリオに決着を譲ることに否やはない。打算でなく、彼になら任せることができると思ったから。

「君の出番を奪ってしまうことになるかもしれないよ？」

冗談めかして。

「それでも、学園が救われるなら——勝ってください」

緑谷はここ最近で、始めて快活に笑った。

「任せてくれ」

ミリオは自信にあふれた笑みを浮かべた。

「それでは皆様、お集まりいただきありがとうございます。時間になりましたのでこれより生徒会戦拳、副会長戦を執り行いたく存じます」

「出場されるのは球磨川チームからは蝶ヶ崎さま、緑谷さまチームからは……通形ミリオさまですか」

「おおっと！　ちよお——つと待ってくださいよお選挙管理委員

会『副』委員長の長者原くん！」

風貌が激変した蝶ヶ崎が言いがかりのストップをかけた。球磨川っぽいと言えなくもないが……

「そういうことはちやあぁんと上のかたに確認した方がいいんじゃないですかあ！ 万が一にも出場資格がないなんてことになったらオオゴトですからねえ——」

とはいえ、球磨川もこんなキャラではない。これでは、むしろスタンダードなトリックスターじみた人格だ。これを見ると心療外科の人吉瞳などはどれだけ捻じれまわった能力通負荷なのかと心配になってくる。型にはまった過負荷など、そんなのは存在からして矛盾している。そして、この手の連中は矛盾しているほどに凶悪だ。

「……そうですね。では、やはり確認を取りましょう。その間に蝶ヶ崎さまは選ぶカードを決めておいてください」

長者原が消える。

「——なんか、あいつキャラが激変してるな」

「つか、球磨川はどこ行ったんだ？」

そんな声。どこか能天気な声。“あの”ミリオに勝てるはずない——そんな生徒たちの無邪気な思い込み。もつとも、個性がなくては……という考えも未だとして根深いが。

「確認が取れました。通形さまには問題なく戦拳に参加していただけます」

「ですので、早速。皆様を副会長選の会場へご案内したいと思います」

そして、カードが選ばれる。

「蝶ヶ崎さまが選ばれた『戌』の試合形式カード、『狂犬落とし』でございませう」

連れてこられたのは建設途中の鉄骨細工。吹けば折れるほど弱くはないが、みすぼらしくはある——そこを通り抜けるのはただの風で隙間風でもないと言え、その建設途中振りが分かるだろうか。

「御覧の通り建設中の校舎が今回の舞台となります。ルールは単純明快——相手を地面に突き落した方の勝ちでございます」

「もちろん参加者の安全を第一に考えセーフティネットを張つてはお

りますが、そのセーフティネットは当然地面の一部とみなされますのでご注意ください」

そして――

「――ミリオ先輩に個性があつたら」

嘆く声。彼の『透過』があつたら風など関係ない、突き抜けるだけだ。まあ、それはただの素人考えだ。実際は下に沈んで、地面に落ちてアウトだろう。透過していたら地面に触れていないことにはならない。

「ふふ――はーはっはっはっはー！」

そして、やっぱりキャラが激変した蝶ヶ崎がそのままのキャラで大笑する。邪悪な笑い声だ――漫画にでも出てきそうな典型的な悪役の笑い声。

「私はあらかじめ予習してきたんですよおおおおお！　ですから、この自分に有利なステージを選ばせていただきました!!」

どういふことかわからない理解不能の言葉。大体、なぜこのルールが彼に有利なのか分かるものは誰一人いない。球磨川が居ればわかったかもしれないが彼は姿を消している。

蝶ヶ崎の言葉の真意がわからないまま副会長戦が開始される。

第27 旋回 狂犬落とし (2)

「——君たちの個性は過負荷とか言って、とてつもない効果を持つて
いるんだろう?」

ミリオは危なげなく鉄骨の上に乗っている。筋肉は脂肪よりも重
い——細身の蝶ヶ崎と比べてしまえば体重は2倍であつてもおかし
くないだろう。それだけの重量を支えて、横風にもびくともしない。
とてつもない体幹だ、鍛えているのは伊達ではない。

「まさか。私たちにそんなプラスなものがあるわけないでしょう。あ
るのはただの欠点マイナスですよ」

対して蝶ヶ崎の方は危なっかしいの一言だ。体重が軽いのが幸い
してそこまでバランスは悪くないが、風を無効化もできずにときおり
よろよろとよろめいてしまう。むしろなぜ落ちないのか不思議だが、
それは過負荷特有の自殺志願者めいた精神力のなせるわざだろう。
恐怖による動きの阻害がない、それだけが蝶ヶ崎の落ちないあまりに
も細い糸のような理由。

「それに何の違いがあるのか僕にはわからないけどね。なにかしら
の、他人には使えない唯一の能力はあるんだろう? ——僕は失つて
しまったけどね」

「だからこそ、あなたは私には勝てませんよ。なんだって、戦う」個性能力
“がないんですからねええええ!”

襲い掛かる。危なっかしくても躊躇はない。細い鉄骨の上を駆け
抜ける。

「——だが、君たちは素人だ。戦うということも分かつてない」

突き落すための手がすり抜けた……ように見えた。外側で見えて
いた観客には見えていた——ただのフェイントだ。しかし、それはかけ
た対象ではないからわかったというだけの話……かけられた対象で
ある蝶ヶ崎にしてみれば、魔法にしか見えない。いや。

「今のは——個性!?! 球磨川さんがなかったことにしたはずなのに

！」

今の社会で連想するのは個性それしかない。

「まさか。ただ、球磨川禊に個性をなかったことにされても。——これまででの全て、無駄にはなってない！ それだけのことだ！」

吠えた。未だヒーローとして健在であることをこれ以上なく見せつける。

「——は。ただのまぐれだ！ 個性を使えないヒーローもどきが！」

「——ここは言わせてもらおうか！ POWERRRRR！」

真正面から、殴り飛ばした。

「がっ……はっ……っ?!」

よく飛ぶ。それは個性などなくとも戦えると言うミリオの言葉通り。一点の破壊力という点で言えば爆豪にさえ劣らない。努力の結晶、強化の個性無くても人はここまで到達できるという証。

「ヒーローが！ 個性を失ったからって！ 戦わない理由にはならないぞー！」

蝶ヶ崎は鉄骨から落ちないようにするだけで必死だ。無論、意識を失わなかっただけでも褒めるべきだが。

「さあ、蝶ヶ崎蛾々丸。君を倒して、雄英の闇を晴らさせてもらおう！」

「——闇を払ったら光が差すなんて、なんて能天気な思考なんでしょうね」

「だが、君だって痛い思いをするのは嫌だろう？ さっさと降参するといい」

「いいえ、どうかお気になさらず」

立ち上がる。ヒーローであろうと立ち上がれなくなるほどの一撃を喰らったのに。——それだけの手ごたえは確かにあったのに。

「……は？」

「こんなのはただの不慮の事故ですから」

モノクルを上げる。ダメージなどなかったのように。ただのやせ我慢をするように。

「訳が分からないことを言うんだな、君は！」

そして、戦いが再開する。殴って——そして、殴られることはない。

それは偏ひとえに戦闘技術の違いだ。かけてきた時間が違う。技術が違う。そもそもバトルの経験値さえも全く劣るとすれば、戦いになる道理がない。

「おおおおおおー！」

「——はん」

蝶ヶ崎は鼻で笑うが——

「——さすが学園最強！ こっちの勝利は確定だぜ！」

「ミリオ先輩、本当にすごい」

戦う先輩の姿に心強さを覚える1年生たち。こんな一方的な勝負を見て負けるなどと思う人間はいない。そして、爆豪は。

「——ポケが！ テメエに勝ち目なんざねえからとつとと降参しちまえよー！」

ヤジを飛ばした。

「分かりませんね」

また、モノクルを上げる。バトルの熟練度の違いから、彼にできるのはその程度のものだ。

「学園最強ゴときがどうしてこの『不慮エンカウンターの事故』を屈服させうと思うのかね」

手をポケットを入れる。

「——何だい？ 君の個性はもしかして、手をポケットに入れると傷が治るとかかな？」

「まさか。というか、個性ではないと言ってるでしょう。そして、能力にも関係がない。これはただ、負ける時は潔く負けて、勝つときは態度悪く勝つのが私の主義なのですよ」

目を細めて。

「——ま、過負荷がゆえに勝ったことなんてほとんどありませんけど。ね」

一瞬、暗く笑った。

「そうか。では今回も、降参させてみせるよ——君を！」

そして、蹂躪劇と呼ぶにふさわしい戦いの幕が開ける。ミリオの拳の威力はすさまじい——だが。

「なるほど。すさまじい回復力だ。それが君の能力だね」

「――」
蝶ヶ崎は依然として人を馬鹿にしたような笑みを浮かべている。表情からは思考が読めない。

「防御力じゃない——それなら殴った感触でわかる。けれど、ダメー
ジはしっかりと通った感触があった。ピンピンしてるように見えても、
実のところは無傷じゃないだろう?」

「さて」

さらに、攻撃。悪に対して容赦はしない……それがヒーローの側
面ゆえに。先の推理は当たればいいなくらいのもの、反応を見たかつ
ただけだ。実際は見当もついていないのに臆せず立ち向かう。……
ヒーローは立ち向かってしまう。

「……ッ!!?」

そして、ミリオが攻撃の手を止める。それは、軋むような不審な音
を聞いたから。ミリオと蝶ヶ崎では強さの厚みが違う。ひたすらに
努力してきたミリオの人生は重い——それは個性とは何の関係もな
い“視野の広さ”というギフトを与えた。

「……つくく」

だが、視野が広いだけで『異常』を止められるなら世話はない。“
それ”は観客たちに聞こえるほどに大きくなり――

「大きくて重くて硬いものは、反面崩れやすくも壊れやすくなる。
たとえば、この作りかけの校舎も根元の鉄骨が数本折れるだけでバラ
ンスを失い、あっけなくもあっさりと全体が瓦解する」

蝶ヶ崎の耳元にまで広がるすさまじい笑み。

「もつとも、その鉄骨数本を折るためにあなたのパンチ、百発分が必要
でしたけどね――」

言った通り、“態度悪く”勝利する。

「君は何を――」

「何もしてませんよ。私はあくまで何もしてません」

そして、“不慮の事故”が実現する。骨だけの校舎がきしむ。鉄骨
が歪む。あらゆる不協和音がないまぜになつて耳をつんざく金属音

が反響する。

「こんなのはただの不慮の事故ですから」

——崩れ去った。

「——ミリオ先輩！」

声が重なる。崩れ去った校舎、崩壊に巻き込まれた彼。個性を持っていた頃ならともかく、今は致命傷になってもおかしくはない。

「何をしているお前たち！ 決着だ！ 通形さまの生死確認を急げ。おそらくは絶望的だろうが、ひよつとするとまだ息があるかもしれない！」

委員会が急いで救出しようとする。だが、そんな彼らを志布志は嘲笑う。そして、頼りになる、そして恐るべき彼の過負荷を開帳する。

「受けたダメージを他の場所に押し付ける、それが蝶ヶ崎蛾々丸の過負荷『不慮の事故』だ」

得意げに言い放った。

「この場合は通形先輩の拳のダメージを鉄骨に押し付けたんだろ。そのダメージは蛾々丸くんの身体を素通りしていたのさ」

「これでわかったら？ あいつがあたしらの中で唯一理性的な人間であつたっていう理由ってやつが。あいつはトラウマやストレスみたいなダメージまでずっと他人に押し付けてきたんだから。だからあたしとか迎江ちゃんみてーに性格が歪むことがなかったんだよ」

そして、過負荷らしく余計な言葉を付け加える。

「……もっとも、押し付けられた奴がその後どんな人間になったのかは知らんがね」

「いや、まだだ」

瓦礫の中から手が突き出る。

「僕はまだ——死んでないぞ！ ルミリオンでなくなっても、まだ僕は依然として通形ミリオだ！」

叫んだ。血だらけになりながら、醜く腫れた打撲痕を晒しながらも立ち上がった。誰が見ても満身創痍、病院に叩き込むべきだ。

「やれやれ……諦めの悪い。その体で何ができますか？ 病院でも行った方がいいんじゃないですか。相澤先生のように」

「君は、この僕を舐めすぎだ！ この程度でどうにかなるものか！」
けれど、言葉通り。ミリオはまだ戦える。ヒーローだから？ そんな下らない言葉で表せない。あんなになろうと戦えるヒーローなど、そこらへんに居てたまるものか。

「——学習しないんですか？ いくら決意を燃やしたって、新しい個性が得られるわけじゃないでしょうに」

「諦めない！ 僕は諦めないぞ！」あの「時とは違うんだ！」

吠える。まだ彼の心は折れていない。ラッシュをかける。

「違う？ 同じじゃないんですか」

だが、殴られる蝶ヶ崎はそんなミリオを嘲笑する有様だ。

「——何を」

そして、それに気づいたのは爆豪だった。

「……クソ執事！ ダメージをどこに押し付けやがった!?!」

「さあ、どこでしょう。あつちかなあ。こつちかなあ。たぶん、そう遠くない場所だと思うんですけど——」

嘲笑う。何もできないのは、仲間を人質に取られ、生徒会長となる資格を奪われたあの時と同じだろうと。

「……っがはー!」

そして、緑谷が血を吐いた。

「あー。そこでしたかあ。そのザマじゃあ仮に通形先輩が私に勝つても会長選は棄権ですなえ。ときに先輩。間接的とはいえ自分の攻撃が仲間を傷つけるってどんな気持ちなんですか？ 私にも経験がありますけれど——やっぱり嫌なものなんですか」

ゲラゲラ笑う。あの時よりよほど酷い。諦めた方がまだマシだっただろうと指さして。

「——こんなの、全然痛くない！ 僕だって、戦える！ そして、勝つのはミリオ先輩だ」

けれど、ヒーローは一人じゃない。この個性社会にあつてはヒーローとは孤独な存在ではないのだから。——緑谷が吠える。骨が折れ、血だらけになり……それでも、と立ち上がる。「彼を見習って」。
「おやおや。まあ、攻撃する本人がダメージを受けていた分だけ威力

が少なかったと言うことですか。まあ、テレビで見た腕をボキボキ折りながら戦ってたゾンビヒーローなら当然とも言えますかね。ゾンビを殴っても心なんて痛くないでしょうしね」

「いいや。——嫌な気分だよ。とてもね！」

吐き捨てるミリオ。けれど、戦意は衰えない。人質を取られたなら、どうにかするのがヒーローだ。できるできないじゃない——”やる”んだと、気力をみなぎらせて。

「また繰り返すつもりですかあ？」

仲間を傷つけるのを、とせせら笑う。

「いいや——ヒーローたるもの、創意工夫を胸につてね！」

走って行って、胸倉を掴んだ。

「ああ。無駄ですよ、予習したって言ったでしょう」

押し倒そうとして——びくともしない。押される力をダメージとしてどこかにやってしまえば彼本人は動かない。そこがたとえ針の上でも。

「——だが、これでは君も勝てないだろう？」

「……ッ!？」

そうだ、これは膠着状態。で、あるならば——先に集中が切れるのは蝶ヶ崎だ。過負荷であるがゆえの当たり前の理論。重症……その程度のマイナス負傷があつたところで、まともな体力勝負なら勝つのはヒーロープラスだ。

「この戦いに引き分けはない。だから、勝つのは僕だ！」

「通形、ミリオ——ッ!？」

じりじりと状況が動かない。それでも針の上のような緊張感が続く。一見して蝶ヶ崎が詰まされた状況だが——ミリオが血液の喪失による意識の混濁もあり得る。そもそも鉄骨に潰された腕が自らの出す力に耐えかねて折れる可能性だつてあるのだ。

「……」

「……」

皆が固唾をのんで……

「……」

じつと見守る。まったく動きのない——だが、本人たちは必死だった。これ以上ないほど真剣に……相手を潰すため、命だつてかける。

「……」

「……っうおー！」

蝶ヶ崎が“足を滑らせた”。やはり、最後は人生の重みの差——どこまでも本気であり続けたミリオが最後に上回る。確かに精神の变革は劇的だろうが、それでも人の身体は血肉で編まれている。積み重ねてきた時間は心などと言う曖昧なものに関係なく冷たく審判を下す。

「これで、僕の——」

「——負けられないんですよ。私は！」

堕ちる。二人ともに、だが——

「勝ったのは僕だ！」

「……殺してやる！ お前の家族を、仲間をズタズタに引き裂いてやるぞ……ッ！」

負け惜しみ。だが、ミリオの顔色が変わり——

「副会長戦……勝利は蝶ヶ崎さまのようですね」

先に地面に着いたのは通形ミリオの手だった。

第28回 人比べ

「——球磨川禊。僕は個性を取り戻した」

自信に満ちた表情。緑谷はミリオの雄姿を見てもなお怯えているだけの臆病者ではない。ゆえ、覚悟はしっかりと目に宿っていた……その個性とともに。

『そうみたいだね。まったく、だからプラスつてのは嫌なんだよ。なんでもかんでも都合の良いようになっちゃうんだからさ……』

対して、球磨川はひどくつまらなそうだ。シャツ姿——しかもよれよれの。やる気のないことこの上ない。

「あのミリオ先輩の姿を見せられたんだ。怯えたままではいられない——そして」

指を突き付けた。

「この会長戦。戦いに出る人間が居なければ——お前の負けだ。そして、この学園にお前の味方はいない」

つまり、5回戦中2勝2敗のこの状況。つまり——

「僕たちの勝利だ」

『それは一方的な見方だなあ』

やれやれと首を振る。確かにもうこの学園に過負荷は居ない。転校させて来ようにも、さすがに根津校長の権力でも無理があった。

「僕が不戦勝して3勝2敗。僕たちの勝利だ、この学園から出て行つてもらおう」

『いや、別にそんなこと約束した覚えもないしなあ。うーん』

「……ここまで言われてもへらへらしている。やる気のなさも健在だ。」

「……お前の負けだ」

『いいや、まだだ。それに僕はこちらの対戦相手が居ないなんて言っていない。さあ、出ておいで』

そう、へらへらしていたのは過負荷だからと言う理由ではない——返し手を用意していなくとも嗤っていいそうなの男だが、今回はきちんと裏を用意してあった。

」
暗がりの中から出てきたのは――

「なんで、君が……」

『過負荷に味方は居なくても、正義に敵は居るんだぜ？　お願いするよ、轟ちゃん』

球磨川はけらけらと笑っている。気楽そうに、無責任に。

「お前の相手は俺だ、緑谷」

そこに居たのは「個性」：半冷半燃――轟焦凍だった。酷く濁った眼で、やはりやる気の欠片もない表情でどこかを見ている。球磨川でも、緑谷でもない、ここにいない「誰か」を。

「それではこれより生徒会戦学会長戦を始めさせていただきますたく存じます。轟さま、十三枚のカードの中から好きな一枚をお選びください」

そして、そんな様子に平等の個性を持つ長者原は関与しない。ただ試合を厳粛に進めるのみ。

「なら『人』でいい。俺は人を嫌い、敵を潰す――ただの人間だ。ヒーローになんてなれやしない」

やはり、カードを見もしない。

「轟君……？」

その、どぶが腐ったような目に一瞬、ひるんで。

「『人』のカードでございますね。では」

そのカードは白紙だった。

「ええ、白紙。つまり『人』のカードはジョーカー。いわゆるワイルドカードでございます」

「会長戦の『人』のカードに限り、緑谷さま側に――この場合は緑谷さまですね。自由に戦拳のルールを決めていただくことになります」

「……そうかよ。まあいいや。どーでも」

選んだ本人は天を仰いだため息を漏らす。こちらも球磨川と同じく、勝とうと言う気概がまるで感じられない。

「なら、僕が決めさせてもらう。名付けて『人比べ』、ステージは雄英学園全域――スタートはたった今、この場所から。ファールナシ、タ

イムアップなし」

そんな彼を緑谷は睨みつける。誰もが本気で戦っていた、“あの”球磨川でも勝つために戦っていた。今不真面目なのは——それはどっちだろうが勝敗に関係ないからだろう。相手への向かい方は最悪でも、勝利にだけは誠実だった。

「そして、ルールはただ一つ」

けれど、轟には“それ”すらもない。負けたら負けたでさっさと帰りそうな雰囲気だ。……悔しがるような思い入れすらもなく。勝利に対してどうとも思っていない。

「負けたと思った方の負けだ」

——毅然と言い放った。己が“勝つ”ことを宣言するように。

「ああ、そうかよ」

そして、轟はくるりと背を向けてしまった。

「な——轟君！ 君は……ツ!？」

火柱が立つ。制御無視の適当な攻撃——見てもいない、それでも緑谷が開始時点から動いていないものだから、そっちに向かう。

「もう始まってんだろ、緑谷？ 悠長に話してていいのかよ」

炎が爆発する。空気が焼かれる。地面が焦げる。轟の個性——この能力を生むための個性婚、などというコンプレックスを持っているだけに個性そのものが強力だ。他の生徒に比べるまでもなく、あまりにも強すぎるその個性。しかも、ここで語っているのが氷結のみに絞っているのだから笑えない。

「もちろん、警戒はしてたさ」

緑谷は無理やりな笑みを浮かべて見せる。火傷——普通の人なら、指先にちよつと火傷しても泣き叫ぶ。彼のそれはもつと酷い……さげきれずに手のひら程度の火傷痕ができている。並の人間なら生命に別状なくとも敗北を宣言しているところだ。そして、彼ほどの精神力を持ってさえ、目にはわずかに涙が浮かんでいる。最も苦しい死に方は焼死であるのだから。

「そして、話してるだけでもないぞ……!？」

けれど、自損を計算に入れて戦う狂気の戦法を敢行する緑谷だ。そ

の程度の痛みはどうかと言うこともない。“憧れるあの人はこの程度でくじけたりしない”などという憧れだけで、その苦痛を踏破する。

「……つち」

片方、轟の方にはやる気が見えない。それゆえ……

「ここだ！」

拳を腹にまともに喰らってしまふ。

「つが！ち——」

だが、浅い。そもそもの緑谷に一撃必殺の意思がない。ただ勝利を望むのなら100%を使うべきだったのに、今はフルカウルだ。手加減をした——”相手に後遺症を残さないように”。顔面でもグチャグチャにしてしまえば勝っていたのに、相手が光を一生失うかもしれないなんて、球磨川なら迷うこともないことを忌避して。

「皆のため、今度こそ君の全力を待つなんてしない！」

緑谷はさらに追撃をかけようとする。けれど、それでも”それは勝利を目指す戦略ではなく、感情論の代物だ。血の通った、非人間的な戦略。自らの身体と苦痛を秤に乗せるそのやり方は余人が習っていないものではない。

「……来るな！」

氷の結晶が行く手を塞いだ。

「けれど、こんなもの！」

簡単に砕いていく。今はもう体育祭の時とは違う——体を凍らされても、フルカウルで内側から破壊できる。ゆえに自損覚悟の大技は要らない。一つ一つ砕くだけでいい。

そして、体育祭の時とは違うことがもう一つある。……ルールだ。あの時は動けなくすれば勝ちだったが、こっちは負けを認めない限りは負けないのだ。氷結の優位はほとんど消えた。あとは規模の大小だが——解放空間なら逃げ場はいくらでもある。ただ、総評すれば体育祭ルールが轟に有利すぎたと言うことになる。それがここでは互角の条件。いや、跳ねまわるのであれば緑谷の方がわずかに有利と言えるか。

「二瞬、で十分なんだよ」

だが優位が消えた——それで“はい負けます”とはさすがにならない。明晰な頭脳が状況に適合する戦術を導く。新しく作った戦法、彼は浮かび上がっていた。氷の天使——女性のように見える人型に羽らしきものをくつつけただけの氷の塊に抱かれ……それが火柱に押されて空を飛んでいる。

「……は？」

呆然とする。氷と炎——確かに可能だろうか……これはさすがに個性の領域を超える規模ではなからうか、などと考えて。“それ”はもはや神々しくすらある。それだけの大規模さ、そして永續性。こんなものがただ一つの個性によって成し遂げられてしまうとは。

「……燃えてしまえ」

火の玉が適当に落ちてくる。それはまるで神の裁き。地上に使わされた天使が最後の審判をもたらし、あらゆるものが炎に飲まれる。

「な——ぐうっ！」

狙いが読めない。そもそも狙い自体がない。火の玉が爆発して熱波が身体を焼く。地面が裂け、建物が焼ける。もはや天災とすら呼べる光景——これをただ一人の個性が成し遂げているとは信じられないことだろう。

「はは。いい光景だな？ 親父の炎が全てを焼き尽くしていく」

天使に抱かれながら、適当に災害を振りまく絶対者。強さに『信念』とか『清廉さ』とか余計なものを持ち込まずスペックを素直に見るならば——彼こそが最強だ。単一個性の究極にして、全てを焼き払う絶望の化身。

「……それが！ それが君の本音か!? 轟君……ッ！」

緑谷は必死に逃げ惑う。そうするしかない——天使は100%を使わなければ壊せないが……ここまで火の玉が大量に落ちてくると、その処理だけで精いっぱいだ。さらに言うところと緑谷はこれで姑息なところもある、相手の体力切れも期待していた。

「——ああ。その通りさ、俺は球磨川に気付かされちまったんだよ。

……俺はヒーローにはふさわしくない甘ったれのクソガキだよ」

「それだけの力を持ちながら……！」

「そうさ、だが力を持っているだけで相応しいなら親父以上に相応しいものはいないことになっちまうだろう？ 力だけを求める人格というなら、それはアイツのことだしな。そんなのがヒーローだなんて、あっちゃいけない。お前もそう思わないか？」

「アイツアイツって——誰のこと言ってるんだよ！」

「——」

口喧嘩……だが意味のあることは何一つ返ってこない。彼の諦めた瞳は何も変わらず、そしてこちらのことを見もしない。

「こんなんで——何ができるって言うんだよ！ 僕はまだ負けたなんて、全然思っていないぞ！」

「んじや、お前が負けたって思うまで繰り返すだけだ」

さらに爆撃が繰り返される。その有様は前時代、空襲の爆撃痕を思い起こさせる。もはやただ一人の人間の手によって校舎は戦場と化していた。

「それで——そんなんで、閉じこもってばかりで……ヒーローになりたいんじやなかったのかよ!？」

「——それはな、違うんだよ。緑谷」

「何が違うって言うんだ!？ 僕もヒーローを目指してた！ 君も仲間だと思っていたのに！」

「それはお前の眼が節穴だな。俺はな、緑谷。お前のように凄くない。ただ個性が強かっただけの人間で、別にヒーローになりたかったわけじゃない。俺はただ——いや」

「なんだよ!？ 言ってみろよ！」

「お前は強情だな、緑谷」

「残念ながら——ね！」

火傷痕が幾多にも刻まれている。これほどの爆撃には対応しきれない。“戦争”に立ち向かうには、ヒーローの人間の身ではあまりに儂すぎる。それでも、と耐える緑谷の身に『よくやるなあ、こいつ』と思っただけは苦笑を隠せない。

「……甘えたかったんだよ、母さんに。ヒーローを目指したのだから、あいつがヒーローだったから俺が越えられれば、甘えても許されるか

な、なんて——馬鹿みたいだろう？　こんなガキがヒーローになんてお笑い草だ」

嗤う。自嘲だ、轟は誰一人のことだって見ていない。自分だけだ。そして、父を憎んでは居ても向き合っつてはいない。ただ父から受け継いだ力で暴れまわっているだけだ。

「……違うー！」

だからこそ、緑谷は我慢ならない。運命がままならないのは当たり前だ。自分だって無個性だからと失意に沈み、無気力に日々を過ごしてきた。けれど——それで誰かを恨んだことはない。そして、周りの誰からも目をそらすことはしなかった。当時の自分にとって恐怖と畏怖の象徴であった爆豪相手にも逃げたことはない。

「お前は違うんだろうがな。人を助けたいだなんて、高尚な気持ちはお前にしかないんだよ。少なくとも、俺は——ただの甘えたがりのガキなんだ。それを嫌になるほど理解させられた……その気持ちはお前にはわからねえよ」

なにより嫌いなのは自分。それは緑谷も一致しているだろう。いや、していたと言うべきか。親を怨むことはできなくても、弱い己の五体をいつも嫌っていた。だからこそ、というべきなのか緑谷は己の身体を壊すことに躊躇がない。

「いいや」

緑谷が止まる。仁王立ちして、睨みつける。つまり、自分が嫌いと言う点では五分と五分——ゆえにこそ、先に進んだ緑谷は轟のことを許せない。許してはいけないと、心が叫ぶ。こんな体たらく、人間の尊厳に対する侮辱だろう。人は努力し、^{ブルスウルトラ}乗り越えていくべきだ。

「——なぜ止まる？　諦めたか」

「僕も諦めていたから分かる！　諦めたからダメなんじゃない。諦めて、そのままなことがいけないんだ！」

火の玉を砕く。その代償に拳が焼けても——構わずに。

「やっぱりすごいな、お前。俺とは大違いだな。でも、悲しいな……」
「今すぐそこに行つてやる！」

拳の風圧で火の玉を潰して、一步一步進む。己の身体の破壊など無

視してしまえば、足を一歩進めるだけの時間が稼げる。痛みなど、その程度では止まらないと輝きを存分に見せつける。己すら焼き尽くす光でもって緑谷は進む。

「お前はすごいよ。そんなにボロボロになってまで人を助けてるんだから。ただの承認欲求で動いていた俺とは大違いだ。オールマイトも、そりや気に入るよなあ。そして、節穴のアイツは俺を最高だなんだとほざいてたわけだ。……滑稽で笑えて来るな」

「どこも滑稽なんかじゃ——ない！」

目も覆いたくなる負傷。後で回復してもらえるからなどと考えなしでなく、本当に己の寿命さえ対価に捧げている。ただの外科治療では余命を幾ばくすらも伸ばすこともできない傷を自らに刻み付けて。ついに、天空の城までたどり着き——

「そんな凄いお前が相手でも、ただの生まれの差で勝ててしまうんだからさ——」

「……つくぐー！」

一言で言えば炎の渦。四方八方から火が押し寄せてくる。射程の問題だ、距離が縮まった分だけ威力は強力になる。

「これでわかっただろ？ お前の個性と俺の個性じゃ俺のが上だ——諦めるよ。現実はがんばったところで、どうにもなりやしないんだ」「嫌だ！」

叫ぶ。酸欠で肺は潰れ、火傷で喉は使い物にならない。そんな常識をただ気合いと根性で叩き壊す。

「分からず屋だな——？」

ふと、横を見ると氷が割れていた。いつの間に……そう訝しむ。実は勝ちたいと思っているわけですらない。ただただ、暴れたい気分であるだけだった。けれど。

「緑谷、お前エエエ！」

激昂した。

「……あ」

そういうことか、とストーンと納得した。

(轟君にとって、あの氷は母なんだ。そして、炎は全てを壊していく父

の象徴。母に抱かれ、父を汚す——それが)

「君のやりたいことか」

で、あるならば——負けられない。ただ母親の陰に隠れて父親にやたらめつたら八つ当たりを代行させる、そんなふざけた考えなど認められないと緑谷は決意を新たにしている。

「もうルールなんかどうでもいい。……ぶち壊してやる！」

炎が渦巻く。学園そのものを焼き尽くすに足る熱量。

「轟君、君に勝たせることなんてできない。だから——僕が勝つ！」

手加減なし。100%——

「おおおおおお！」

絶対の一撃と究極の一撃がぶつかった。

「——やっぱり、勝負を決めたのはただの個性の差だったな」

轟がため息をつく。

「——ってない」

すさまじい炎の威力は未だ衰えることを知らない。恐ろしい破壊をまき散らし、なおかつそれが「とどまっている」。オーバーキルにもほどがある。……なのに。

「なんだ？」

「終わってない！ まだ、まだアアア！」

声がする。死んだはずの彼が。確かに炎は揺れただろう。ただ、それだけだ。炎の津波を多少揺らしたところで0.1秒すらも稼げない。確実に死んだはずの彼が——飛び出てくる。

「な——に……ッ!？」

だからこそ、轟は何もできない。絶対の事実だと思ったそれが覆された。あまりにもありえないことが起きて、思考が停止した。

「……『テラウエア・デトロイトスマッシュ！』」

それは掟破りの二段、100%。右腕はすでに使っていた——以前に、殴ったら殴ったで普通は終わりだ。コンビネーションにはタイムラグがあるため、それは違う。炎を破り、氷を貫く1段目。そして、氷の壁の復活の前に2段目——慮外の攻撃が轟を貫いた。

「……ばか……な——」

「これだけは言っておく。勝つのは恵まれた人間じゃない——最後まで笑っていられる人間だ！」

“それ”が誰を示すか、言うまでもないだろう。

「——」

そして、だからこそ轟も何も言えなくなる。なぜなら、憧れた人物は同じだから。あの背中を目指して努力してきたのは嘘じゃない。個性を失ってなお戦う彼は、世間がどんなに勝手なことを言っても未だに“夢”そのものだから。ゆえにこそ——

「さて如何でしょう。轟さまは緑谷さまに負けたと思いませんか？」

「ああ——俺の負けだ」

ここに、生徒会戦拳が終了した。

第29 旋回 終幕、ならず

『あーあ。負けちゃった』

球磨川は空を仰ぐ。

『……でも、少しすつきりした気分だ。僕はもしかしたら、ちゃんと負けたかったのかもしれない。皆で一生涯命やって——勝ったり負けたりしながら唯一の終幕カーテンコールにたどり着きたかった』

首を振って、晴れ晴れとした表情を浮かべた。よれよれのシャツはそのままでけど、こうなってはもはや“やりきった”感まで出てくるのだから不思議なものだ。

『悔しい気分はもちろんあるさ。けれど、不思議と憎しみは浮かんでこないんだ。心に吹く清らかな風を感じるなんて、生まれて初めてのこともかね。全ては君のおかげだ、緑谷ちゃん』

手を差し出す。……握手。おそらく、彼が純粋な気持ちで人と手を握り交わすのは史上初めての事象であろう。

「……球磨川君」

理解不能に思えた過負荷も想いを伝え合えば分かり合えるのかもしれない。そんな暖かい感情が溢れてくる。

『僕はこの学園を去るよ。でも、その前に——』

『僕は君を敵としてしか見ていなかったけど——でも』

涙が止まらない。ヒーローであろうとしたのは間違いなかったと確信して……

『おいおい。野暮なことは言うなよ。口に出さなくても大切なことは分かっているさ。——でも、最後に握手だけしてくれないかな』

手を差し出す彼の姿が一瞬、きれいに見えたからこそ——

「ああ」

差し出された手を掴もうとして——

『甘いんだよ、間抜け』

螺子が緑谷を貫いた。

「……球磨川ア！ 不意打ち！ 闇討ち！ 騙し討ち！ てめえ、何

も変わってねえな！」

『そうだよ、切島ちゃん。殴るだけで改心できるなら、この世はもつと簡単だったろうさ』

打って変わってニヤニヤとした笑み。そう、“何も変わってなどい
なかつた”。彼は改心などしてないし、さっきの言葉もすべては口
から出まかせ。騙すための演技でしかない。

「長者原選管！今の攻撃は反則ではないのでしょうか!？」

『おいおい、飯田ちゃん……いい加減にしろよ。彼を困らせるような
迷惑行為は慎みたまえ。もう戦拳は終わってるんだから、これは僕と
緑谷ちゃんの個人的な喧嘩だ。委員会がしゃしゃり出る理由なんて
ないんだよ』

「なら、俺がためえをぶつ潰しても構わねってことだなア!？」

『やめてよね、爆豪ちゃん。そんな好きな人が傷つけられたみたい
な反応——そんなに緑谷ちゃんが大事かい？ そんなによその女子の
黄色い悲鳴をあげさせたいのかい』

「ボケが！なに訳のわかんねえこと言ってるやがんだ、ためえは！
俺はデクの野郎がクソ大嫌いなんだよ！ふぎけんな！」

『あはは。うん、分かった分かった。そういうことにおきたいん
だね？爆豪ちゃんはシャイだなあ。僕は外から生ぬるく見守らせ
てもらうぜ。どうせ、負けたら学園を去るつもりだったしね』

「……でも、球磨川さん。少し悔しいのですが」

「そうだけ、大将。ここはひと暴れしねえと収まんねえな」

殺気をにじませた二人。心から勝利を願ったことだけは“本当”
だから。

『やめてよ。志布志ちゃんも蛾々丸ちゃんもさ——そんな暴れなきや
収まりがつかない野蛮なヒーローみたいな物騒なこと。平和が一番、
僕は君たちがいたずらに傷つけられるのを見たくないんだよ』

悲しそうな顔を見せる。……これは演技か、それとも多少なりとも
真実を含んでいるのか。判断なんて誰にもつかない。

「——球磨川さん。でも、ここを出て何をすればいいんでしょう」

『何でも、さ。迎江ちゃん……廃校にする学校なんていくらでもある。

次こそは勝つき』

“そう、つまり”何も変わらない”。強大な過負荷が集合し、そして撃退されたとはいえ解散などしていない。凶悪な群れとなり、無力な“誰か”に牙を向ける。ヒーローではない、誰かに。

『そして』

改めてA組に向き直る。

『今はいい気になることだ、A組の諸君。この僕を倒したところで、第二、第三の僕が現れるだろう。——その時こそ、貴様らの最期だ』

コテコテの負け惜しみを言い放った。

『ふふふ。はーはっはっはっは……ごほっ！ げほっ！』

そして、最後の高笑い——をやり切れない。もつとも、高笑いを失敗してせき込むのだってどこかの悪役がやったそのままだ。

「——待てよ」

“コイツはヤバイ”と分かりきった事実を再確認した後ずさりする者たちをよそに、オールマイトは笑っている。私が居るから大丈夫だ、とそこにいる誰かを安心させるために。

『何ですか？ オールマイト。もう僕はこの学園の生徒じゃない。貴方の命令に従ういわれはないんですよ』

「勝ちたいと言ったこと、あれは嘘か？」

『僕は嘘しか言わないよ？』

「私と戦え。種目は人比べ。一度、きちんと勝つてみたいんだろ。私ならば申し分ないはずだ」

球磨川の、嘘も本当もごちゃ混ぜにして全てを台無しにする言葉などオールマイトは無視する。仲間と勝利を願ったこと、それだけは真実だと思うために迷いはしない。

『いやー、個性を失った元オールマイトに勝つてもねえ』

「勝利から逃げるなら、好きにしまえ。だが、ここで逃げたならば——本当の勝利は決して手に入らないぞ……二度とな」

そして、勝利を譲るつもりもない。何の言い訳も許されないほどのすつきりした敗北をくれてやるつもりだった。そして、それには相手が骨も残さずきつちりと勝つつもりでなくては意味がないゆえに挑

発する。

『……そこまで言われるのはちよーつと不快かな、なんて！ どうせ、そこにいる緑谷ちゃんの手で学園は終わるのにな……つてさ』

けれど、そう言うのであれば——球磨川の“手段”は残っている。それが残る限りは完全敗北ではない。学ランを羽織る。髪をセットする。どこまでも奈落の果てマイナスのような瞳が睥睨する。

「はい？ えっと……いや。僕には荷が重いかなー。なんて」

そしてこちらは覇気がない。勇気がない。あるのは煉獄の果てのように濁った瞳——

「……緑谷少年？」

「はい。なんでしよう、オールマイト」

首をかしげる。オールマイトには見覚えのある光景。全てを諦め、面倒は全部あんたに押し付けると言わんばかりの無責任な瞳。大衆と言う責任を持たない“誰か”の集合。

『学園の破滅は君の手にかかっているんだぜ。しっかりとしてくれよ、僕』

「そうは言っても、僕に大したことなんてできないよ——」

と、気持ち悪く言う緑谷。

「これは……これも、過負荷か……ッ！」

緑谷は変わり果てていた。そして、螺子が刺さったままだ——おかしなことに火傷が消えているが、そのことは何の救いにもならない。こんな瞳に力を失った緑谷は、初めて会った無個性を嘆いていたあの頃よりなお悪い。

『その通り！ これこそが僕の初めの過負荷『却本作り』ブックメーカー。過負荷と言うのは二つ同居するのが難しいのか、単に僕の限界かは知らないけど一つが限度みたいだね。大嘘憑きの材料にしちゃったのをもう一回組みなおしたのさ！』

「ブックメーカー……！ その過負荷、精神に作用するものだな！」

『ちよつと違うね。精神”にも”さ！ これを受けたやつはみいーんな、僕と同じになる！ だから緑谷ちゃんはああなっているというわけだ。僕が転校しても、彼がいる！ 僕と化した彼がね！』

「第二、第三の敵……そういうことか！」

あの意味のない捨て台詞に思われたアレは実には的確に事態を現していたと言える。第二の自分をすでに作り上げていたのだから。

『そう。そして、第三の敵はすでにいる』

静かに宣言する。

「第三——もしや、根津校長か！」

そして、オールマイトも思考を巡らせる。彼だからこそ、すぐに気付いた。

『うわ！ だいせーいかーい。予測されちゃってるねえ、僕』

嗤う。予測されたのは不利だが——不利なのは過負荷として嗜みたいなものだ。それに、予測したところでどうにもならないこともある。

「……ッ！」

『さて、“貴方と戦え”でしたっけ？ いいですよ——あなたが僕のブックメーカー却本作りを受けてさえくれればね！』

「——それは」

希望の象徴、オールマイトが球磨川に“なる”。それは、世界が終わるのと同義——個性を失ったことで役立たずと見る向きもあるが——後継が出てこない以上は未だその座に座っていると見ていい。

『そう！ そうなれば、あなたも僕と同じになる！ それでなお、平和のために戦えると言うなら見せてもらいましょうか！ もっとも……そんなリスク、呑めないでしょうがね』

だからこそ、そんなことは呑めない。優先すべきは世界か学園かなど、問いからしても違っている。

「いや、いいだろう。やりたまえ」

だが、オールマイトはそんな賢^{さかし}らなど知りはしない。選ぶべき選択肢？ そんなものはない——あるのは己の信念のみ。誰かの声も、理論も、全ては馬耳東風。

『——いいんですか？ 皆、反対してるようですけど』

「ああ、分かっているさ。皆の声を聞かずとも、そうしたところで君が緑谷少年と根津校長を解放することなんてないことは自明の理とい

うものだろう」

そして、“それ”はお花畑でもない。オールライトは都合のいい展開を期待して周りに理想を押し付ける愚物ではない。そして自らを過信して何でもできるなどという自惚れ屋でもない。

『あれ？ てつきりそんな勘違いをされるものかと思つてましたけど？』

「これでも、色々人と人を見てきたからね。たかだか十数年しか生きていない小僧が見透かせると思うなよ」

だからこそ、きつと彼は人間じゃない。体は人間だろう。けれど、心は異形だ。強大すぎる精神力というのは人間が獲得できていいものじゃない。ゆえに、あらゆる弱さを理解できる球磨川にも理解不可能だ、なぜなら理解できると言う言葉には“人間の”という枕詞がつくから。

『なるほど。けれど、僕のことも見透かせるなんて思わないでほしいですね——だって、あなたが観察してきたのは“人”でしょう？ 過負荷じゃあない』

が、それは球磨川も同じ。人の胎はらから生まれ出でた人のカタチをした、ヒトより下のナニカ。上か下かと言う対極は、結局のところ似た者同士に落ち着く。もしくは人外同士か。

「では、これから分かり合うとしようか。君の過負荷はそれができるんだろ？」

『できないよ。これは、ただ——僕と同じにするだけだ』

「やってみないと分からない。さあ、来たまえ」

オールライトに恐れはない。己をそう言う存在と規定した、ならば曲げない。貫き通すのが異形であるがゆえ。あつちにくつちにと揺れ動く人間とは違うのだ。

『なら、遠慮なく。オールライトと言う歴史を終わらせてあげましょう』

却本作りの螺子がオールライトに突き刺さった。

第30回 頂上決戦

「あー。なんかどーでもよくなってきた」

オールマイトの眼がどぶ色に染まる。却本作りからは彼でさえ逃
れられない。こう、これで彼もまた負^{球磨川}完全観になった――

『こうなつてはさすがのオールマイトのも形無しだね！ でも、念に
は念を入れて四肢を串刺しにしてあげるよ――』

「いや。待ってくれ、私の負けでいいから。痛い思いはしたくないん
だよ」

しよぼくれた老人のように言う。めつきり年を取ってしまったよ
うだった。

『……あは！』

“勝った” そう思つて、心からの笑みを浮かべた。――が。

「と、言うとても思つたか」

顔面にいいのが入った。そして、オールマイトにも傷が。却本作り
の効果……球磨川に与えられた傷はそのままオールマイトにも転写
される。

『つち！ まだ動けたか――』

反撃。オールマイトの足に螺子が刺さる。

「……む」

痛みに顔が歪む。だが――ダメージはなかった。“なるほど”と
納得する。つまり、球磨川になると言うことは、与えたダメージはそ
のまま帰ってくれるが、与えられたダメージはなかったことになる。
『貴方が僕になった以上、勝ったところで勝ちと言えるかは怪しいけ
ど。本気でやらせてもらうよ――』

球磨川が仁王立ちするオールマイトを睨みつける。今の彼は誰が
見ても本気としか見えない。本気で、どんなに汚い手を使つても勝つ
つもりだ。

「いいや、それは違うさ。なぜなら、私は君になどなっていないのだか
らね」

もう一度、顔面。マッスルフォームになれもしないその身は枯れ木の様で、しかし中身は噴火寸前のマグマのように燃え滾っている。

『ばかな——却本作りが効いてないなんて。……ありえない!』

そう、“殴る”——却本作りを受けて脆弱になった人間にできることではない。立ち上がる強さすらもないマイナスになっているのだから。

「効いてはいるよ。——けれど、“それ”は君の思っているような能力ではないのさ」

「……はあ?」

一瞬、球磨川に素が出た。

「確かに君のスキルは効いているよ。このような思いをしていた者を助けるどころか、分かってやることすらできなかった自分を恥じ入るばかりだ。とはいえ、君のスキルの影響か嗤うくらいしかできないけどね」

『——訳の分からないことを。僕のレベルまで墮ちたんなら、あなたにだって勝てるはずだ! 平和の象徴——この時代を築き上げた立役者にして世界最強! あなたに勝てたのなら、きつと——僕だって“どうか”なれるはず!』

「やはり、君はただ全てを無意味にして混沌に叩き落すだけのマイナス闇じやない。マイナス劣等感に打ち勝ち、仲間とともに誇りを持ちたいと言うのが君のちっぽけな祈りなんだろう。……ゆえに」

そして、泥臭い殴り合いが始まる。子供の喧嘩の方がまだ見ごたえがある低レベルの決闘。全ては球磨川の場所まで引き下げるブックメイカー却本作りがために。けれど同じになったはずなのに、勝負は一方的だった。

勝負は決着がつかないはず、なんていうのは性能に誤解がある。あくまで却本作りはRPGで言うステータスに作用するスキルなのだ。証拠など、オールマイトが球磨川の姿に変身していないことから明らかだ。というか、本当に球磨川に“なる”というのなら姿だけでなく記憶も同一にならなければ“そう”なったことにはならない。

そして、中身に関しても、『できないことはやらない』——それは一般人として当たり前前の感覚だ。球磨川のステータスになれば歩くこ

とすらできやしない……100%無駄と分かっていることに挑戦する馬鹿がどこにいる。だからこそ、むしろオールマイトが戦えているのは異常である。球磨川のスキルの本質はあらゆることを『できない』にして心を折るスキルだ。

弱さの究極は伊達ではない。立ち上がる強さすらもないのだから、2, 3本叩き込めば封印状態になるのも分かる——存在することすら『できない』弱い存在になると言うことだからだ。

けれど、ここで忘れてはならないのが、球磨川はそんな状態でも人に恐怖を与える魔王のごとき存在として君臨している。つまるところ、^{却本作り}「それ」が強さを全て弱さに置き変える力ならば——それ以上の異常で挑めばいい。

憧れでもなく。誇りでもなく。友のためでもなく。家族のためでもなく。あらゆるプラスとかけ離れた。

『僕は——僕だって、一度くらい勝つてみたいと思ったんだ!』

球磨川の弱さとは違う。

「私には分からない感情だな。勝利も、敗北も——それ自体はただの解釈だろう。ああ、まったくもって訳が分からない。人々が価値があるというものも、大切だというものも……私には本当のところかわからないんだよ」

ただひたすら突き進むと言うだけの光の意思。あらゆる全てを焼き尽くしてもなお進む異常。暖かさとはかけ離れた太陽のごとき灼熱の意思。それは決して暖かなものではないのだから。

『人気者が! そんなことを言うなよ!』

「だが、事実だ。なぜなら——私はやると決めたからやっている。平和の象徴が必要だと結論し、できることをやってきた。……が、これは人間的な感情ではないだろう。人間とは柔軟なものだ。それを弱さと捉えるならそうなのかもしれないが、しかし人間性としては重要な要素だろう。欠かすことのできない当たり前の、人が人に関わるために不可欠な生温さだ」

『それが、ないと?』

「だから、こうして戦えている。君と同じになっても、君と逆の方

本音を言って、螺子を持つ両手を振り下ろした。

「あいつ、自爆……ッ！」

外野の声。球磨川は自らの両足を貫いていた。

『いいや、違うねー！』

さらには片腕さえも貫いてしまう。

「……ぬ。ぐぐ——」

そう、その怪我はオールマイトにも転写する。

『這いつくばって、いいや違う。そうだね——這いつくばりながら勝つ。だよな？ 志布志ちゃん』

そして、言葉の通り這いずる。強さで戦うオールマイトは戦いが長引けば不利になる——全ては却本作りが生み出したルール。なにせ、基準となる球磨川の強さは怪我、疲労によって一方的に下がっていく。そして今、片腕と両足まで潰した。

『そうそう、勝つときは態度悪くつても忘れちゃいけない。まあ、こんな苦し紛れの芋虫状態に態度の良いところなんかあるはずがないけどね』

だが、弱さで戦う球磨川は動けた。

『所詮は、過^{僕たち}負荷の気持ちは過^{僕たち}負荷しか分からない』

残ったただ一つの腕で螺子を振り上げ。

『だから、あなたはただ僕たちの勝利の証^{トロフィー}になつてくれ』
頭を潰した。

「——」

だが、オールマイトは死なない。却本作りの作用だ。それに物理的な意味がないことくらい球磨川にもわかっている。けれど。

『今度は僕が聞く番だ。負けを認めるかい？』

意味はあるのだ。

「——ああ、私の負けだ」

勝利の証。突き付けられた敗北の前に見苦しくあがくことなどできはしない。なぜならヒーローというものは崖っぷちに落ちてからの輝かしい逆転だ。——泥にまみれながらあがき続けて相手のギブアップを誘うことではない。

だから。

「勝った!!」

今度こそ誇らしげに、球磨川は叫んだのだった。

最終旋回 物語は終わらない

「……球磨川アア！」

勝利の咆哮を上げた球磨川を緑谷が打ち据える。誰の予想もつかない慮外の一撃が、有無を言わせぬ必殺として突き刺さる。さすがに今度ばかりは球磨川にもどうしようもない。

『……ば、馬鹿な。緑谷ちゃん——君、死んだはずじゃ……ッ！』

だが、それはありえないはずだった。なぜなら、その攻撃を仕掛けた緑谷は無力化されている。動くことすらできなくなったからこそ、誰もそれを予想できなかった。そう、彼の胸には却本作りの螺子が——

『ないッ!?!』

なかった。抜いてはいないはず。解除した覚えはない。それにアテナのような役割を果たすプラス^{能力}なんてあるはずないが、しかしあえて能力を解除する馬鹿もいない。彼が動ける道理はない。なのに、なぜ——

「おおおおおー！」

球磨川は元より自傷のために方腕しか動かない——ただ打ち据えられるままに殴られる。いや、先の一撃が効いている。フルカウルの一撃がテンプルを撃ち抜いた、もはや思考は暗転してパンチドランカーの病状まで発症してきている。

『つぐ。この——』

「……遅い！」

取り出した螺子は蹴りでどこか遠くに飛ばされる。

「お前はオールマイトに^{ブックメイカー}勝った^{んだ}！ だから『何も無い』が終わったんだ。お前の却本作りはもう機能しないぞ！ 球磨川アアア！」

そう、過負荷が使い手の精神状態に深く絡みついたものならば、心が変わってしまえば能力もそのままではいられない。世界の救世主^{オールマイト}に勝つと言う偉業にして、異形——それは劣等感^{マイナス}を覆いつくすに足る

ものであり。

『……つく！ おのれー螺子か！』

もはや、却本作りのための螺子が出せない。これ以上ない物証だった。球磨川が勝利を得て負完全から脱却した、そのこと自体が彼の過負荷を壊してしまった。“勝った”その瞬間に転落するというなんとも球磨川らしい落ち。

「オールマイトを破つても、彼の意志まで曲げることなどできないぞ。まだ、彼の意志を継ぐ僕らが居る！」

『……それ……でー』

「いいや、お前にはもう何も言わせない。貴様はここで終わるんだ、球磨川」

まさに鬼神。元から暴走癖はあった。普段はともかく、緊急事態になると爆豪よりも“やらかす”性格だ、緑谷というのは。全身砕いてタコにしてやるくらいの気概はある、それが過剰防衛だか何だかの罪に問われようとも躊躇いはない。

「……てめえらアア！ 負けを無視して好き勝手あたしらみてえなことを恥もなくやりやがってエエ！」

だが、それを黙って見ているほど球磨川の仲間はお人好しでも友達甲斐のない奴らでもない。真っ先に動いたのは志布志。好き勝手にボロボロにされていく球磨川の姿を自分に重ね合わせて憎しみを募らせる。——それは秒すら必要とせず奈落の底から噴火するマグマと化す。

「てめえら、全員ぶつつぶれちまえ。『憎武器オ！』」

バズーカー・デッド

無差別に古傷を開かれていく。瞬く間に傷だらけとなり、動けないほどにまで傷が溜まる。もはや“損な気がするから人殺しはしない”などというこだわりなど、憎しみの前に吹き飛んだ。——降り積もる憎悪であらゆる全てを破壊する。

「好きにさせるかア！」

真っ先に反応したのは爆豪だ。低空どころか地面を、負傷すらも構わずに“飛ぶ”。飛行技の自滅的アレンジだ、一瞬でも早く届せるために。

「それはこちらの科白なんですよね☆ 荒廃ラフラフレシアした腐花……狂い咲き
バージョン！」

だが、無数の人植物が前に立ちふさがった。それはもはやゾンビの
ような凄惨な有様で……。奈落の底から生者への憎しみが眼の形を
した空洞の洞に反射する。

「しやらくせえ！」

爆破。植物を燃やしていくが――

「……届かねえ！」

「いいや、届いたさ。君のおかげで！ 爆速ターボ」

爆豪が開いた道を飯田が駆け抜ける。

「君の能力は殺傷力と言う点では最も危険だ。女であっても手加減で
きない。悪く思ってくれるなよ！」

全力の加速を乗せて蹴り込むつもりだ。なぜなら、それが一番早い
から。そして……それは致死の一撃と化す。

速いから軽い？ なんだ、それは――速くするために無理に中身を
空にしただけの話だろう。もし中身があつたのならば、衝撃の威力は
破滅的に跳ね上がる。威力を無視してスピードだけを追い求めた一
撃が絶殺の“血肉をぶちまける必殺技”になるという皮肉。

「いえ、お気にせず。こんなのはただの不慮エンカウンターの事故ですから」

だが、蹴り碎いたのは蝶ヶ崎の細い身体だった。デク人形の様
に転がっていくが――傷はない。そばの地面に大穴が空く。衝撃をど
かに逃がす過負荷……つまりはそれだけの力だったが無駄になった。

『――あ。やめてよ、緑谷ちゃん。死にたくない……』

それでも、過負荷たちの救いの手は球磨川にまで届かない。

「どうせ、それも嘘だろう」

緑谷が拳を握り。

「……ッ!?!」

全員が息を呑んだ。あまりにも破滅的な“それ”を予感したがた
め。

――“バキバキバキバキバキバキバキ”ッ……！

その音は破壊だ。破壊が連鎖して、全てが終わる。彼らを構成する

に等しい世界——つまりは雄英学園。その土地が。

「……ツオールマイト！」

間一髪、地割れに引き込まれそうなオールマイトを助けて脱出する緑谷。だが……

『——ふふ。せつかくの勝利なんだ。勝ち逃げさせてもらうことにした』

ニヤリと笑う球磨川。そして、後ろに付き従う3人の影。

『なるほど。僕は確かに却本作りを使えなくなつた。だが、こうは思わなかつたのかい？ ゆえに次は大嘘憑オールフイクションきが使えるようになったと、さ』

「——球磨川。貴様ア！」

ああ、確かに治っている。球磨川は確かに立っているし、志布志のバズーカーデッドの無差別攻撃に巻き込まれたはずの三人にも血が付いていない。

「けれど、治しきれてはいない」

だが、オールマイトが息を吹き返す。死んだときには却本作りが有効だった、にしても——死ねばそれは精神に致命的な負荷を与える。が、オールマイトならそんなものは昼寝すれば生き返る。

『オールマイト。僕はもうあなたに勝つたんだから黙っていてくれませんか？』

「黙らないさ。治っているのは表面だけだろう？ 見れば分かる。過負荷と言うのはそうそう都合のいいものでもないみたいだね。……

また何かやらかすのなら私の近くでやりたまえ。次は負けん」

痩せ細つた体でニヤリと笑って見せる。そこには敗北者のみじめさなどどこにもなかった。

『ふん。もうあなたと勝負はしませんよ』

「……こりこりだ」

球磨川は本音でため息をついた。

「はは。待っているよ」

『精々好きに待ちぼうけしてください。メールくらいなら送りますから』

そして、4人は姿を消した。崩れ行く雄英は13号、セメントス、エクトプラズムが被害を食い止めた、奇跡的に死者も出なかった。しかし校舎は修復ではなく作り直すことになった。

もつとも、物は治すことができても——全てが元通りになるわけでもなく、そしてヒーロー代表と言える雄英の醜聞が高まった以上はステインに対する賛美はますます過激になっていく。

未来は決して明るいものではありえない……それでも、ヒーローたちは正義を胸に戦うだろう。

そして、語られなかった伏線。

「オールマイト。あなたは俺を助けてくれなかった。だから嫌いだ。お前だけは……おまえだけは決して許さない……！ 例え個性を失おうとも、それだけで済みますものか。必ず……必ずお前の全てを奪ってやる……！」

元はオール・フォー・ワンのために作られた究極の対“個性”牢獄の暗闇の中で胎動を続ける影。——死柄木弔。

「ねーねー、オールマイト。折り鶴さんできたよ」

青年、というにも年を取りすぎているだろうか。決して老境というわけではないが、若そうには見えない。そんな男がニコニコと折り鶴を振って喜んでいるさまは一種の異常に見える。それに折り鶴はよれよれだ、お世辞にもよくできているなどと言えない。

「ああ、すごいね。うむ、よくできている……たえちゃん」

そして、妙に不釣り合いな名前——当然だ、それは“彼”に名付けられた名前ではない。この男は元はオール・フォー・ワンと呼ばれていた人間だ。今は女の子のようにふるまっていて、その記憶も持っている。“それ”がどこから来たのかは不明であり、記憶から照合された“たなかたえ”という人物は現代には存在しないと言う調査結果が出ているが。

彼は今、特別に改造された、個性を暴走させてしまう子供たちを治療する施設へと入れられていた。

「えへー。私ね、大きくなったら鶴さんに乗って世界を旅するの。きつと、気持ちいいよ」

「そうか。……できるといいね」

「ちがうよー。オールマイト、テレビで言ってたでしょ？ 夢は叶えるものだって」

「はは、一本取られちゃったな。ゼリービーンズを上げよう」

「いらない。まずい」

「ええ……こんなにおいしいのに……」

そんな彼の元にオールマイトが今もお通うのは——何のためか。あるいは本人にもわかっていないのかもしれない。

けれど、そんな“彼女”は紛れもなくオール・フォー・ワンの全盛の力を持っている。あらゆる技術を忘れようとその個性は強大に過ぎ……一つの火種と呼ぶには大きすぎた。